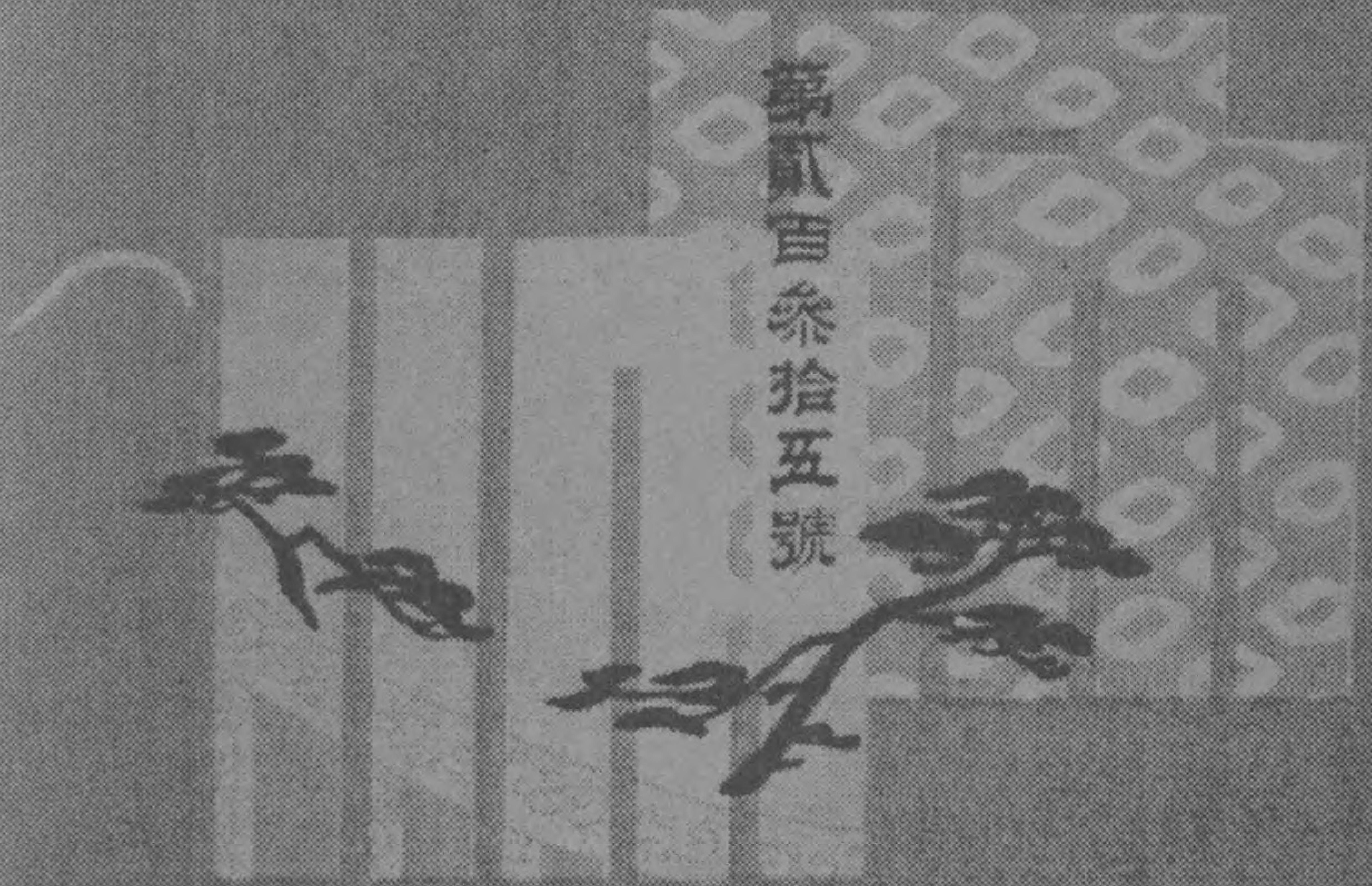
〔每月二回五日、廿日發行 明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可〕

明治三十四年八月二十四日發兌

女鑑



第貳百參拾五號

女鑑第貳百叁拾五號

目録

定價
一册 前金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金壹圓廿錢
全國無遞送料

明治三十四年八月十九日印刷
明治三十四年八月二十日發行

編輯兼發行人 川崎直衛
印刷人 並木長雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發賣元 靜思館
（電話本局一千三百七番）

社告

從來各所より御寄贈にかゝる新刊新聞雜誌及圖書等單に國光社とのみ御認めの分は往々當部へ着せず爲に折角の厚意も遂に無にするに至り遺憾少からず候就ては甚だ御手數ながら以後必ず國光社女鑑編輯部へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

東京京橋區築地貳丁目廿一番地國光社内

女鑑編輯部

稟告

本誌(女鑑)編輯に關する即ち原稿投書等の事件は必らず女鑑編輯部へ御送被下度候又發賣に關する總ての事件は必らず靜思館へ宛御發信被下度願上候也

東京京橋區築地二ノ廿一、國光社内

女鑑編輯部
(電話新橋八十八番)

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地

靜思館
(電話本局千三百七番)

日本赤十字社長 佐野伯爵題字

忠愛鏡

正價金參拾錢○郵稅六錢

本書は我赤十字社の主義精神及事業の性質を極めて平易詳細に說明し加ふるに苦行以て社資を幇助せる篤志ある社員の美談を蒐錄せるものあり抑報國恤兵の趣旨たるや全然夫の敎育勅語の精神に恊合す本書は叙述を玆に及ばし併せて其趣旨を實踐したる社員の行ひを記し以て活きたる模範を示したるものあれば敎育家諸君に對っては必ず本書を一讀せられん事を切望す

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地

日本赤十字發行所



山内一豊乃妻乃
鏡を家のたからにと
時来ぬと
馬よりまさる
志ろかねを
世にし鏡も
なかにいる
うれ

従一位実愛

公德問題と禮儀作法

健忘性の國民とやら、うれしからざる名を負せらるゝ甲斐には、善からぬことをも、總べて、打忘るゝならばこそあれ。善き方のことにのみ健忘にして、惡き方のことには、寧ろ、强記なるはなげかはしき極ならずや。

一新聞紙の唱導にかゝる公德問題は、一時、非常の注意を惹起し、新聞紙雜誌、皆、この事に就いて記述せざるはなく、實際機運の熟せるものあるかの感ありき。爾來半年ならざるに、世間、また、公德問題を議するもの稀なり。もとより、新聞雜誌の如きは、議論すべきこと多々あるが上に、生存競爭のためには、斬新を要するが故に、たとへば、其の名、其の体を異にすとも、同一の事項について、議論を持續せむことは、好まざる所なるべし。たゞ、多少の反響を起しゝが如く見えたりし、社會に於ける結果は如何。依然たる公德問題沸騰以前の社會にして、

其の結果として數ふべきもの一もあることなし。是を、常に反省を要めて己まざる所の惡德に妄執するものの多きに比すれば、何ぞ夫、忘却し去ることの甚速なる。顧ふに、公德問題は、其の論議の聲の喧しかりしに似ず、其の實行を敎ふる點に於いて忠實ならざりき。其の効果なかりしは、强ち例の健忘性にも因らざりけり。彼の、世に禮節家と稱せらるゝ者によつて敎授せらるゝ禮儀作法。今日に於いてこそ、流派を立て小異を守りて、たゞ、末節についてのみ云々するもの多けれ。其の本來の性質にしたがひ、之を大同せしめ、以つて鼓吹奬勵せば、所謂公德私德を兼ねすゝめて、遺憾なきに近かるべし。元來、禮儀作法と稱するものは、彼の公德私德に伴ひて成長せしものにて、公德私德は、總べて禮儀作法によつて發揮せらるべきものなり。其の今日に至りし所以は、所謂禮節を賣つて衣食する輩の過らしめたるのみ。若し、禮儀作法に對して注意することと公德養成論に於ける如くあらば、其の効果、決して、少々ならざるべし。



萬物萬事を整理することを論ず

細川潤次郎

散亂したる物を取集めて、之を、各、其の貯藏すべき所に置き、其の用に立たざる者は、之れを棄ることを、片付けると云ふ。片付けると云ふことは、即、物を置くと云ふことなり。物を置くと云ふことは、尋常普通の事にして、簡易明白なるが如くなれども、實際は、重要且複雜なる事柄にして、頗る、研究を要する事あるべしと思ふ。此の事は、家政學に於て、尤、緊要の事なり。一家中の萬物、各、其の宜く置くべき所あり。其の宜く置くべき所に置くときは、萬事、都合よく行はるることなれども、之れに反して、置くべき所に置かざれば、萬事、不都合にして、事務澁滯し、一家の人、常に、不愉快なるべし。假如へば、米穀には米穀を置く所あり、薪炭には薪炭を置く所あり、衣服には衣服を置く所あり、金錢には金錢を置く所あり。米穀を米穀を置くべき所に置かざれば、雨露に濡はされ雀鼠に食はるべく、薪炭を、薪炭を置くべき所に置かざれば、或は、廚房に遠くして不便なるべく、或は、廚房に接近して發火の虞あるべく、衣服は、衣服を置くべき所に置かざれば、塵埃に埋沒せらるゝことあり。金錢を、金錢を置くべき所に置かざれば、竊盜に奪はるゝことあり。此等は、必しも、説明を要せずして明白なることなり。室内の装飾に至りては、全く、

物を陳くことをして、其の宜きを得しむることに外ならず。掛物は掛物、香爐は香爐、生花は生花、各、其の所に在るべく、料紙、硯箱、卷物、其の外の玩具も、又、各、其の所に在るべくして、書院、居間、茶席等の別あるに從ひ、各、其の宜き所あり。然れども、此等は、猶、未だ、複雜なる者に非ず。一家の家具、若くは、諸雜の如きに至りては、其の數夥多にして　位置錯雜あり。之れをして、各、其の所を得しむることは困難なり。此等の物品は、時々、使用の際、取出すべき者なるを以て、米俵を積むが如く、刺身を並べたるが如くすべからず。一見して、其の物の何物たるを辨識し、直に取出だすべき樣兼て、其の便利を計り、夫々、適當に之れを置かざるべからず。然らずして、亂雜に之を置くときは、入用の時間に合はずして、其の物を所有する甲斐なくして、有れども無きが如くなるべし。今一層適切に、其の例を示さんに、何れの家にも、婦人ある家には、絹布木綿類の切々ありて、多くは、之を一つの箱に納め、或は一つの風呂敷に包み置きたる者なり。扨、入用の時には、一つの切を求むる爲に、一箱一風呂敷に在る、あらゆる切々を點檢せざるべからず。百枚あれば百枚、二百枚あれば二百枚を、一々點檢せざるときは、入用ある一つの切を尋出すこと難かるべし。如し、之れを區別して、大中小に分ち、或は絹と木綿とを分ち、或は其の色を分ち、之れを各種の紙袋に入れなどして、之れを一つの器に納め置くときは、入用の時、入用の切を、容易に尋出すことを得べし。何品に付ても、豫め、能く類を分ちて、之れを適當の位置に置くときは、入用の時、迅速に用立つ者あり。此れ物を置く方法ありとす。

物を置くことの方法は、大概左の如し。解に、物品のみならず。百般の事柄に付ても、矢張、右の道理にて、苟も、能く百事を適當の位置に在らしむること肝要なり。古人、事を處すと云ひ、處置と云ひ、處理すと云ひ、處分すと云ふ、處辨すと云ふ。此等の處と曰へる字は、置くと曰へる義にて、皆、物を置くの義より出でたる者なるべし。蓋し、人の萬事を整理するは、猶、人の萬物を整理するが如く、又、人の萬事をして適當の度に中らしむること、猶、人の萬物を適當の地に在らしむるが如し。萬事適當の度に中り、萬物適當の地位に在るときは、之れを、善く萬物を整理すと謂ふことを得べく、又、善く萬物を整理すと謂ふことを得べし。元來、人の、萬物萬事を整理することは、智力の働にして、人生の、最、貴重すべき點なりとす。此の智力の働の大部分は、萬事を整理して、適當の度に中らしむるに在り。萬事を整理して、適當の度に中らしむることは、人の、萬物を適當の地位に置くに異ならず。萬事を處置するの才ありと曰ひ、處理する力ありと曰ひ、處分若くは處辨する器量ありと曰はゞ、其の人の智にして、愚ならざること知るべし。人の、能く此の如くなるは、偏に、人の善く考へて、物を適當の地位に置くことなり。但、物を置く地位は、有形的にして、其の適當か、適當ならざるかは、見易きことなれども、萬事を處する適當の地位は、無形的にして、見易き者に非ず。此れ頗る研究を要する所以なり。右の理由なるを以て、物を置くことも、日用些細のことの如くなれども、此を以て、小事とすること勿れ。萬事を處すること、同く、考慮を加へて、之れを適當の地位に置かざるべからず。猶因に言はゞ、碁將棋の如きは、其の上手

と稱する者は、全く、碁石と將棋の駒とを、適當の地位に置くことを習ひ得たる者なり。書籍などの如きも、筆墨を、適當の地位に置くことを習ひ得たる者なり。物を置くとの大切なる、此の如し。庶幾くは、諸氏の、心を、此に留めんことを。

女子の學問

岸田松二郎

修身科 一之上

修身科は目的何れにあるかを論ずれば、謂ふまでもなく、良心を啓培して德性を涵養し、其の實踐の方法を指導するとを以て、滿足すべきにあらず。其の根本基礎となるべきものは、即ち、德性の涵養にあるなり。今夫、學校にありて、古今の嘉言善行を教ふるは、事實其の物に眞價あるにあらずして、寧、此等の事實を記臆するより、其の感情を衝動し、善に對しては深く同情を寄せ、自己も、亦、之に倣はんとの奮勵心を喚起し、惡に對しては病く之を避け、自己の箴戒となさんことを務めざるべからず。斯くして、歲月の久しき、終に、善惡正邪を判別し、良心の命に背くを不快とするのみならず、自から、元に安ずること能はざるに至らしむるを以て、本科主要の目的なりとす。されば、古今の貞女烈婦の事蹟を知悉し、或は、孝道、友愛信義、廉耻等の道德的名稱解說を澁諳するを以て、能事了れりとなすを得ず。是、唯、道德的智識たるに過ぎずして、而して、此の智識なるものは、實行を待て、始めて、人の品格を確かならしむるものなれば、智識を以て、實行と混一すべからざるなり。更に、之を詳言すれば、修身科として授くる所の智識は、良心を啓培し、德性を涵養するの一方便たるに過ぎず。然るに、孝道、

友愛、信義、廉恥等の道德的名稱の解説を明答し、或は、貞女烈婦の事蹟を即答し得るを以て、直に、教育あるものありと即斷するが如きは、輕擧の甚しきものと言はざるを得ず。若しも、貞女の事蹟を知りて、滔々懸河の快辨を振ひ、其の人自身は、不貞不潔の行爲あらば、果して如何の觀想かある。友愛の事例を知悉して、下流を決せる江河の如き雄舌を揮ふも、其の人自己は、蕭墻の間に相鬩かば、果して如何の奇觀かある。無教育なる賤婦にして非行あるは、世間或は之を寛假すべし。教育ある、殊に、高等教育を受けたる女子にして、醜陋の行爲あらば、却て、無教育者に劣るの不名譽なるべし。然らば、則ち、自己の智識は即ち行道の案内者にして己は、未だ、地圖上の旅行をなせるものと覺悟せざるべからず。既に、己は地圖上の旅行者たらば、是より、世間の道途に上りて、杳遠なる人道を踐むに當り、曾て得たる地圖的智識を放擲し、偏に、足蹤の向ふ儘なる行旅に就かば、奈何ぞ、途上至る所に嶮坂峻嶺なからざらん。是、前段述ぶる所の反省的行爲を要する所以なり。

現今、女子學校に於ては、單に、道德的智識のみに滿足せずして、其の實行を期せんがため、修身科の一部として、女禮法を課するもの多し。是、固より至當の事に屬す。蓋、女子の天性として、又、其の天職として、沈靜巽順なるべく、又、端莊幽雅ならざるべからず。現今女子体育の必要盛に唱導せられ、卑屈因循排斥の聲四面に湧沸するより、往々、之を誤解して、女德養成の障害となるもの尠からず。人は云ふ、体育のためには、体操遊戲を學ばざるべからず。体操遊戲には、活潑ならざるべからず。卑屈因循は、萬事を成すの妨

害にして、進取の氣象は、我國人の要事なりと。所謂活潑と進取の氣象と云へることは、正鵠を失ひ易きものにして、一たび之を誤らば、其の弊や、輕躁となり、粗暴となり、傲岸となるべし。活潑といへる語は、身体に伴ふか、將た又、心術に伴ふか。身体の活潑なるべきは、如何なる場合に於てすべきか。心意の活潑なるべきは、何種の時機に於てすべきか。將又進取の氣象とは如何なる時を然りとすべきか。是、大に其の時と所とを見別せざるべからざるなり。見よや、秋霜烈日雷雨の變は、吾人々類の必要物ならずや。三伏の暑熱は、吾人之を厭ふも、猶且、之を欲するにあらずや。春色の駘蕩、吾人之を欲するも、推移するにあらずや。四時の變遷糾纒の如くにして、五穀熟し生物育す。人の、行爲、又猶斯の如し。靜なるべき時あり、動かざるべからざる時あり。沈靜なるべき時あり、活動せざるべからざる時あり、進で取るべき所あり。退て守るべき所あり、其の靜なるべきに動き、活動すべきに沈靜し、進むべきに退き、退くべきに進まば、寒暑其の順を違へ、風雨其の序を亂すに同じ。体操遊戯を學ぶの時は、活動勢作を主とするの時にして、禮法を學び作法を習ふは、沈靜的動作を主とするの時なり。体操の時にありては、身体四肢の活動を主とするものなれば、其の動作は、務めて、筋骨の運動を盛にし、逡巡躊躇すべきにあらず。須らく、精神の快恬し、身體の敏捷なる運動とを僻せざるべし。禮法を學ぶの時にありては、務めて、其の心を沈靜にし、擧手投足、皆、敬愼を離るべからざるの時なり。然るに、體操の時に於ける心を以て禮法を學び、或は、禮法を學ぶの心を以て體操を學ばんとするが如きあらば、兩者、各、其の時を誤る

ものにして、其の効果を收めざるや論なし。軍人の職たる、戰鬪に臨みては、敵を殺し屍を晒すを厭はず。其の働作の猛なること虎豹の如く、其の敏なること疾風の如くにして、一點の慈悲を抱持せざるに似たり。戰時にありては、之を以て勇とすべきも、平時に於ては、人を殺し、或は、粗暴亂賊の擧動あるを許さず。規律あり、秩序ありて、苟くも、之を犯すことを得ず。軍人にして、猶且、戰時と平時との大なる區別存するあり。毫も、之を換ゆるを得ず。今、此の一事を以て、女子の體操禮法の時を混すべからざることを例說せんと試むるは、或は、妥當ならざるが如しと雖ども、一人の女子にして、快活沈靜の二時あることを區別するは、敢て、軍人の戰時と平時とに於ける行動に二種あることに譬ふべからざるにあらざるべし。果して然らば、軍人に、勇氣を尊ぶと稱して、平時に人を殺し、或は規律秩序を無視するの行爲あらば、是人の許すべからざる所なりとす。若夫、體操に、活潑の働作を主とするがために、體操以外の時に於て、體操遊戲の擧動を改めざらんか、其の弊や、粗暴たらざるを得ず。又、輕擧たるを免れざるべし。況や、禮法を學ぶの時に於てをや。然らば則ち、身體運動の上に於て、聊か活潑に過ぐるを許すべきは、單に、身體練磨の時に於てのみ要すべき所のものにして、恰かも、軍人に人を殺すを許すは、戰時に限るが如きものありと謂ふも、過言にあらざるべし。然るに、身體運動に必要あるがために要する態度を以て、活潑ありと稱し、當時の擧動に慣用して、以て、活潑敢爲の人と賛賞するが如きは、是婦人の賞賛せらるべき美德に瑕疵を生ずるなきを得んや。予輩は、女子の身體強健を欲せざるものにあらず。身體練磨のた

めに要する體操を喜ばざるにあらず。身體の上より、活潑なる文字を誤認して、沈重靜粛なるべき本分を忘れて、輕躁粗暴の人と化し去らんことを恐るゝものなり。現今、世人が所謂活潑の態度と稱するものには、如何なる目標あるかを知らずと雖ども、進退動作の雄々しきものを謂ふにあらざるべし。又、歩々に塵埃を起し、肩端疾風を起すの謂にもあらざるべし。然らば、常時は如何なる容態を保ち、又、如何なる態度を採り、又如何なる心を抱懐すべきか。是即ち、常時の儀容なかるべからざる所にして、行儀作法なるもの丶要求茲に生ずるものと謂ふべし。禮法なるものは、人の容儀を練成し、又、其の心を練磨するものにして、先、其の心の中に敬なるものを存し、之を外に表出して、端莊靜粛の德を成すべき方法と謂ふべし。苟くも敬なくんば、禮も其の眞を盡さず、儀容も亦徒爲なるべし。敬なるもの心に盈ちて離れざるときは、則ち、禮法茲に活用せられ、進退動止儀容ありて、一點の乘ずべき間隙を認めず。隨て其の性格を端莊にし、其の風采を清秀にして、自から、婦人の天性を發映するものと謂ふべし。

旅中偶感

三輪田眞佐子

おのれ平素多忙なるに、近來病氣さへ起りければ、知人たちのねもごろなる勸告によりて、夏休旅行をなしぬ。其の間折にふれて、種々の感ありしも、其は、時を得て、日記となして世に公にせん。唯、今度は、おのれ恆々心とする女訓につきて、偶感一二のみをものせん。

古人の言に、人は自ら侮りて後ちに人これを侮る

と。實にさることにて、或る日、おのれが、大阪より沼津に乘る滊車中に、今様めきたる乙女、獨旅をなせり。さなくも、旅の空なれば、人より侮られ易き乙女の習なるに、其は大膽なる性質にや。少しも憶する色なきぞいと樂もしき。唯、惜しむらくは、活潑の度や過ぎけん。やがて、空氣枕を脹らせ、仰向き様に臥しぬ。足投げ出して小說を讀み初めけり。されば、隣席のものどもは、老いたるも若きも、各、其の傍若無人の擧止驚かざるはなし。されど、其は、侮の門を開く緒にや。其の足先きの方に席を占めたる、二人づれの男子ありて、初めのほどは件の乙女を見て、大に笑ひ居りしが、一、二、(トンネル)などを過る後ち、乙女は、小說にや飽きけん。忽ち、本を片手に持ちて、足投げ出しのまゝ、座り直し、滊車の窓より外景うち眺めければ、其の機に乘じて、二人の男

は口を開き、貴孃は何地行くらんと問ひにけり。乙女は、東京へと答へぬ。時に、二人の男子は、衣の裾を腰の邊までかき揚げて、箕居しながら、慣々しく話をつゞけしが、遂に、敬語なども用ひずなりて、互に、禮を亂すこといよ〳〵甚しくなりぬ。あはれ、乙女の父母にしてこれを見ば、如何ばかり怒るならんか。當今、男女別ありといふ儒訓を以て、時勢に適せざるものと評するものあれども、おのれは、男女別あるべきものと信ぜり。蓋し、別な、字義通りに解釋せば、廣く流用し得ざるも、元來、別とは、男女相接するに於て、互に禮を失はざる意なれば、文化の進むと共に、益益別を守るべきなり。即ち、人事日に月に多端なれば、婦人の獨旅も止むを得ざるべし。否、獨旅をなして失錯なき婦人の、世に多きこそ望ましけれ。唯、人より侮りを受けざるやう、態度を保持

してよ。

更に、或る日、熱海に來り、旅亭の三階の側面より見降せば、百姓屋らしき家あり。其の緣端に、母親を中軸として五人の小兒の睦ましげに席を作りしが、おのれ心なく眺むるとき、其の小兒の一人が、赤兒を脊負ひて、庭前を逍遙し初めぬ。母親は、其の間を得て、家事を營むもの、如し。されど、其の兒守する小兒の、いと幼きため、足本みなは覺束なきに、聊か怠る色もなく、つとめて、母親の勞を分つめり。おのれ、これに感じ、旅亭の主人に、彼の小兒の年齡は幾何なるらんと問へば、いまだ四才なりと言へり。思ふに、都などに住みて、中流以上の家庭に育つものは、四才とし言へば、自ら乳を呑み、保母さへ附き添ふが常なるを、彼れ賤の伏屋に住む小兒ながら、四才にして赤兒を背負ひ、應分の勤を盡すは、珍しき例なり。蓋し、かゝる小兒は、體格も非凡にして、所謂早熟ならんも、必竟は、境遇の然らしむるためなり。故にゝ父祖の餘澤を食ひて、無爲に生育せしものが、往々、獨立の氣象を失ひて、國家のため、無用の長物となるは、耻づべき至にてそ。



日本女訓（未定草）

川崎重陽

九、室内の拭掃除をはじめとして、何事にも、まめまめしくたち働くべし。たとひ、召使をば、數多かゝへたりとも、なほ、相應はしき事を、己が毎日の課業と定めて、家内の實務に當る

べし。これ、女子の、重んずべきわざなり。

十、女子の、學業を修むるは、專、他日一家の主婦となりて、家を齊ふるに、事を欠かざらんが爲なれば、普通要用の學藝は、いふもさらなり。ことに、裁縫割烹のわざなどは、家政上に、とりわけて、大切なれば、一しほ習熟すべし。又、簿記の法、衛生の大意などにも、通ずること肝要なり。女子にして、專門の學藝を修め、學者として、世に立つものなきにはあらざれども、これ、身の境遇によることにて、一般女子の由るべき道にはあらず。女子は、夫を助けて、よく一家をとゝのへ、團欒の樂を全くしてこそ、己が天よりうけたる本分を全うせるものとはいふべけれ。

十一、茶の湯、生花、音樂などを修むるには、よく、その眞意を會得して、優美の心を養ふはむことにこゝろがくべし。ひとへに、技藝の末にのみ走らば、おのづから、虚飾に陷りて、浮華の習を生ずるに至るべし。又、唱、三絃、および音曲のみだりがはしくして、正しからざるものは、人の心をみだすものなれば、愼みて近づくべからず。

烈女はつ

山口鐵五郞支配所
野州足利郡上川崎村百姓逸八後家

はつ

卯三十二才

右之者儀、本庄式部少輔領分、野州梁田郡百頭村名主權左衛門娘に而、寛政八辰年、廿歳之節逸八女房にあり、其節者ちよと申候處、姑の名義を讓請、はつと改。舅勘右衛門姑共四人暮に而、田

畑等三石餘致所持、逸八者大工稼いたし相暮、翌巳年男子出生、勘彌と名附、舅姑とも悦罷在候處、同年夏より、逸八勞症に而相煩ひ、種々致藥用候得共快無之、同十二月重病之節、迚も快全致間鋪候間、若相果候はゝ、はつ親元者名主を勤候家に付、宜き所に縁付も相成申に付、親元江歸り、他江縁付候樣、逸八申聞候處、夫之家如何程困窮に候とも、他江縁付之儀は不致、舅姑之任差圖、百姓株放し不申樣致度旨相答、無程逸八相果、日數も相立候間、相應の入夫養子いたし可然と親類等存寄之所、勘右衛門片意地成生質に而、嫡孫勘彌を相續人に相立候旨申張、はつも、入夫之望無之、若身分に而、髮形にも構ひ不申、田畑之耕作日雇洗濯雇木綿賃織いたし、晝夜辛勞いたし相暮、去る酉年勘彌四歲に相成、最早、乳も給不申、手を離れ候而も差支無之候間、はつは、他

江縁付候樣、勘右衛門申聞候所、夫之末期に申聞候義も有之、舅姑段々年寄、介抱人無之候而者差支可申に付、他江縁付は不致旨申聞、彌、舅姑を大切に致候所、同年、勘右衛門中風症に而手足不相叶、姑も持病之痰癪相煩、持病おをり申候節も、縫物は勿論、農事之働も致し不申、はつ一人之稼にて、醫師之藥代、衣類、食物等不自由無之樣いたし、勘右衛門は病苦故老耄いたし、三度之食事もわすれ、晝寢致し、眼覺之節又は夜分眼之覺候節を、朝食時分抔、幾度も食事致し候を、太儀之體も無之、右能拵為給、平日麵類好物に而、夜分抔凡而望候節も有之候に付、兼而心掛置、急に拵為給、勘右衛門は大工にて、手足不相立候樣相成候而も、普請場等參見候事を好み候故、日々之樣に、脊負參氣をなぐさめ、何でも、好候儀を差押候儀無之、藥用致し介抱候得共驗も無之、

去る丑年、別而大病に成、醫師も斷る樣相成、村小藥師之命乞之致立願、病人眠候內、寒中氷をあび、素足に而每夜參り、直に歸り、晝夜側を離れ不申、大小用も居なから致候を、其度々取替濯し、洗すゝぎ無油斷いたし、能々致看病候得共不相叶、去る丑十二月廿八日七十七歳に而相果、右病中、姑も持病に而、折々煩候儀も、介抱無疎致し候處、右打續之不幸故、姑も、去春癪氣強く差發、何によらす氣短に成無筋事共申聞候ても、一向に逆ひ不申、姑に立腹爲致候儀、近所之もの承り候儀無之、右兩人永々の病中、晝夜眠之儀無之程に丹誠いたし、且、勘右衛門存生之節、悴勘彌を相續人可相立旨申置候所、祖父父無之故、育柄不宜歟、諸人に侮れ候而は、家之相續も成兼候旨申張平素直に育候故、村內之子供よりも柔和に有之、當年十一歳に相成候間、手習等も爲致、親類縁者村內百姓の付合も爭ひ之儀無之、御年貢米金、觸候日限無滯相納、誠に丹誠成儀に而、夫相果候後、困窮之中に而、舅姑永々之病中貞節を崩し不申致孝行、舅相果姑病氣も募り氣短に成候を、さからひ不申孝行を盡候。

一去寅十一月六日夜、掛鐵又はしんさし等に而〆りいたし、姑は勘彌と一同臥り、はつは一間之內押入之方え寄臥罷在候所、同夜八ッ時頃、盜賊忍入候物音を姑承り、聲立候に付、目覺可罷出といたし候節、はつ臥居候夜着之兩袖を、盜賊兩人に而押居、動し不申、聲立候はゝ可切殺旨申候故、怖敷存罷在候所、婆を殺し候樣盜賊申候故、姑に怪我爲致候而は難相濟、たとへ、はつは殺害に逢候とも、姑危難見捨仕、押居候夜着より、裸之儘に而、無体に拔出、誰共不覺、盜賊之後より組付候處、

兩人之盜賊は迯出、押居候盜賊も、可迯出といたし候得共、確と組付居候故、脇指に而所々手疵爲負候得共、手を離不申、頻に聲立揉合、裏口より拾間斗り隔之所迄被引出候内、倅勘彌儀隣家へ參呼立候故、隣家金五左衞門、勘左衞門兩人罷越捕押、はつ盜賊に被爲負候疵所、右之肩切疵長四寸五分、左肩同四寸、腮之下同四寸五分程有之、其外、所々突疵又はかすり疵等七ヶ所、都合疵所拾ヶ所有之、追々致平愈候得共、右二ノ腕は、深疵に而屈伸難相成候。

野州足利郡上川崎村
百姓逸八後家
はつ

右、はつ義、數年貞節を守、舅姑に孝行を盡し、其上、此度姑をかこひ、盜賊を取押候始末、女之身分に而、健氣之仕形に付、爲御褒美、所

持之田畑永代被下うへ、年貢諸役免許之上、金五十兩被下之。

無宿 太藏
卯三十二歲

右之もの儀、盜可致旨、無宿金次平藏申合、野州上川崎村逸八後家はつ居宅、裏口の戸を明け、三人共立入、聲立候はゞ可切殺旨申威し、金次平藏は、はつ臥居候夜着之兩袖を押へ、此ものは、戸棚に有之候衣類脇指を取出候所、はつ、夜着より拔出、此ものに組付候故、可逃去ため、盜取候脇指を拔、はつへ數ヶ所疵付候始末、不屆至極に付獄門。

以上

卯四月

右者、此度貞女孝行もの有之、御褒美被下置候に付、寫達候間、村限寫取に前末々之有共迄、寄

寄相話可申候。村順能、廻狀早々順達、留り村より可相返者也。

赤坂　御役所

卯六月廿八日　御油宿　始

同八月廿日着　田嶺　留り

其の行實こそ類例少きまでに貞烈を極めたれ。身はこれ、野州邊土の一百姓の後家。其を、讀者の殷鑑にせよと、三河ある古橋氏より寄贈せられぬ。書類一括たゞそのまゝに之を掲載せり。言外、無限の感慨を與ふべきを信じたる所以あることとは、諸媛も諒とせらるゝ所あるべし。猶、この書類を閲みて、志を立て、家道を恢復し公益を起し後世に名をのこしゝ等の美談もあれど、其は、他日、他の欄に於てせむ。（編輯者識）



家政

衛生上に於ける看護法の一班（承前）

久我西英

（ホ）病者の看護●●●●●　重病者には必ず看護人を附して、常に、其の狀態を監視し、以て、必要の保護を與ふべし。殊に、興奮し或は發熱して譫語を發する患者に於ては、其の患者の身、及び、他人に害ある行爲を防止するがため、看護人は、斷へず其の身邊を離る可からず。又、看護人にして、此の如き患者の行爲を制するには、懇篤温和を以てし、決して、徒に、患者を興奮せし

むることあること勿れ。而して、患者の容態を記臆して、醫師に逐一報告すべし。又、醫師より、不眠番を命ぜられたるときは、數人相交互して之れに從事すべし。

若し、傳染病患者を看護するときは、病室に於て、決して飮食せず、又、手に口をせず、患者に接したるときは、毎回、石鹼及び刷子を用ゐて、能く手を洗淨し、病室を去るときには、衣服を交換すべし。又、病室に在りては、常に、洗濯し得べき上着を以て、全身を被ふを可とす。

(ヘ)患者の睡眠及び呼吸　患者の睡眠する時は、總て、之れを妨げざるを宜しとす。永く睡眠すれば害あるか、或は、服藥食餌等の爲に喚醒すべきや否やは、豫め、醫師の指揮に從ふべし。又、熱ある患者に對しては、清涼飮料を與ふるときは、善く睡眠するものなり。

患者の呼吸に關し、醫士に報告するが爲め、呼吸數の增減、呼吸困難苦痛、其の他鼾聲鼻翼運動等の有無に、注意を怠るべからず。呼吸器内に粘液瀦溜するを察し得たるときは、漸々患者を扶けて咯出せしむべし。咯痰は嚥下せざる樣注意し、看護人は、一方の手を以て患者に痰壺を供し、他の一手を患者の枕の下に通じ、其の上體を支へて、之に咯出せしむべし。咯出物は、次の回診まで貯へ置き、醫士に示したる後之を處置すべし。

(ト)出血　患者の口より血液を吐出すること多量あるときは、直に、醫士に急報すべし。而して、血液若し咳と共に出で、其の色鮮紅にして氣泡を混ずるものは、肺より來るものにして、即ち、咯血なり。之れに反し、暗赤色にして咳なしに出るものは、胃より出るものにして、即ち、

吐出あり。何れの場合に於ても、醫士の來るまでは、患者を安靜に仰臥せしめ、少しく上體を高くし、言語を禁じ、出血の部位に從ひ、胸部或は心窩に、氷水の罨法或は氷嚢を施すべし。

婚禮色直式

有住常子

親るゐ盃の事

これは、婚禮當日の條に記載すべきものあり。其の仕方は、通常に行はる〻物によれば、

左上座に嫁方の父母親族、

○嫁の父親　●嫁の母親×嫁の叔父等◎嫁の兄弟姉妹

右下座

二ノ二 ○ 一ノ十三
二ノ三 ● 一ノ十二
二ノ四 × 一ノ十一
二ノ五 ◎ 一ノ十
二ノ六 仲 一ノ九

一ノ二 ○ 二ノ十三
一ノ三 ● 二ノ十二
一ノ四 × 二ノ十一
一ノ五 聟 二ノ十
一ノ六 嫁 二ノ九
一ノ七 ◎ 二ノ八
一ノ八 仲 二ノ七

○聟の父親　●同母親　×聟の目上

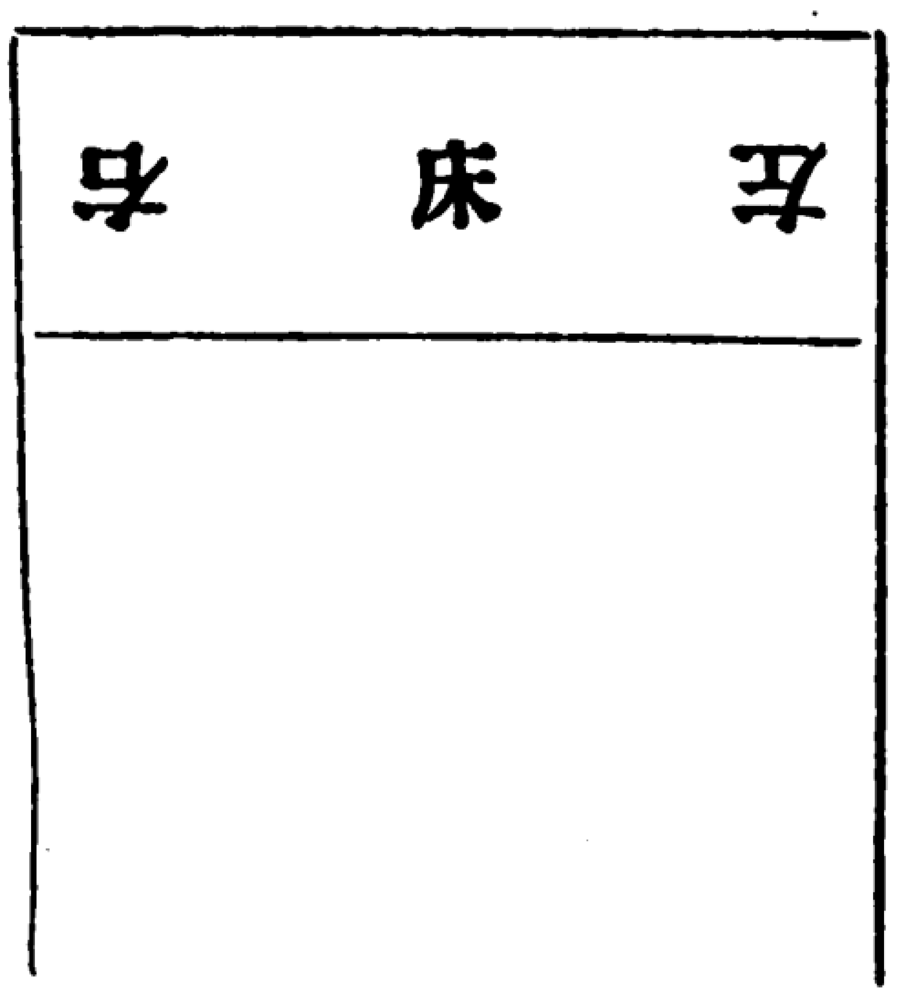
聟　嫁　◎聟の目下

右のごとき順に居ならびて、中人は、其の下座にありて、

但、人にもよるあれど、大方は、左右のとりあつかひをなせば、便利のため、下座につく。

盃をめぐらすべし。

此の左右は、床の方よりの左右の順に隨ふべし。



其の順序は、左上座の嫁の父より、一番にはじめて、右下座の聟の父へとさして、第二番にして、其のつぎつぎのついでは、右の〇●印の所に番號を付たるによりて、なしたまふべし。

〇これは、なみ〳〵の儀式につきて、必要のものなれば、こゝにしるして、まづは、婚禮式のとぢめとはなしぬ。（をはり）

上卷結び

石井泰次郎

（八）同一種

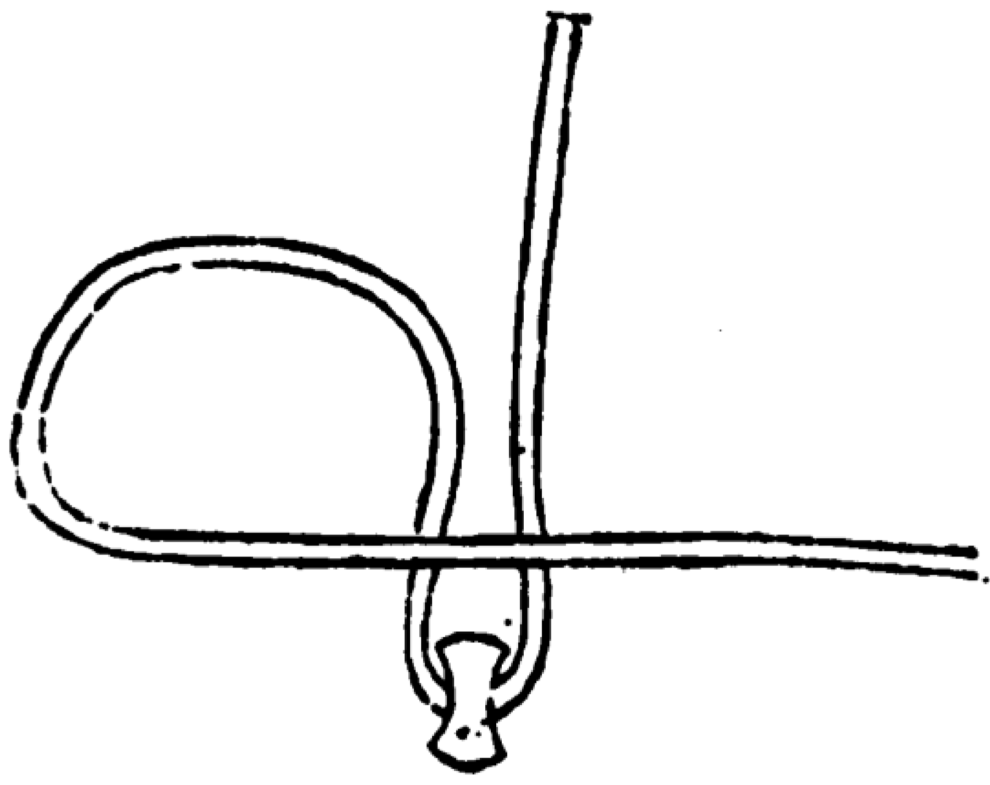
是は、類聚雜要鈔一本、及び、懸物圖鑑などに見えたる上卷の上の輪一本にて、物をつりたる圖によりて、結試みたるなり。未だ、正しき繪圖を見ぬものゝ爲に、誤れる樣をもあげつるなり。結習ふに及ばざるべし。

緒樣は、裏の金物に通して、右の紐先を向の方へのばし、左の紐先を向より、左の方へとめぐらして、輪形に右の方へとのばして、右の方より左へと、左の輪の下の方へとかけて、左右に輪形一ッ、出來たる時、又、今の紐先を、左の輪形の下と金物に通したる二本の紐の下とをくぐらせて、右の輪の上に右へと出し、次に、右の輪の向の方を双方の手にて、上の輪になる樣に直して、次に、右に出せる紐先にて、右に輪一ッをつくりながら、左の輪の上の方へとのばして、其の紐先を左の輪の上下の紐の下より、左の方の下の紐の間へと出し、次に向の方へのばしたる紐を、上の輪の右側より右の輪の上、下の紐の上より右の方の下の紐の間へと出して、金物の所の紐より間をおきて、少し上にて

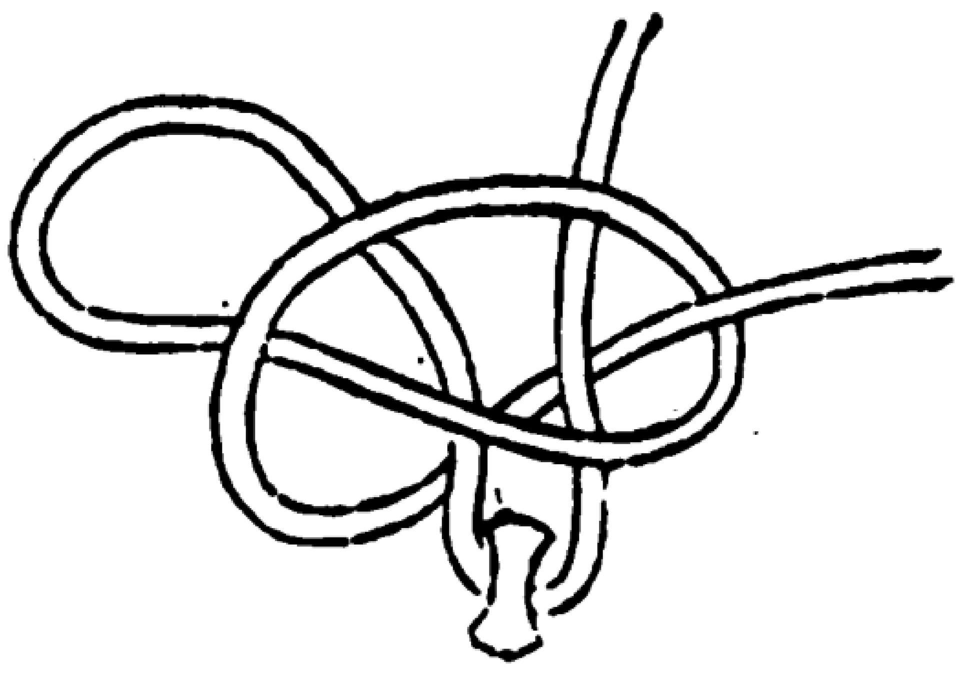
堅く引きしむべし。

同一種　是は古書にかきあやまれる圖によりてむすびこゝろみたるなり

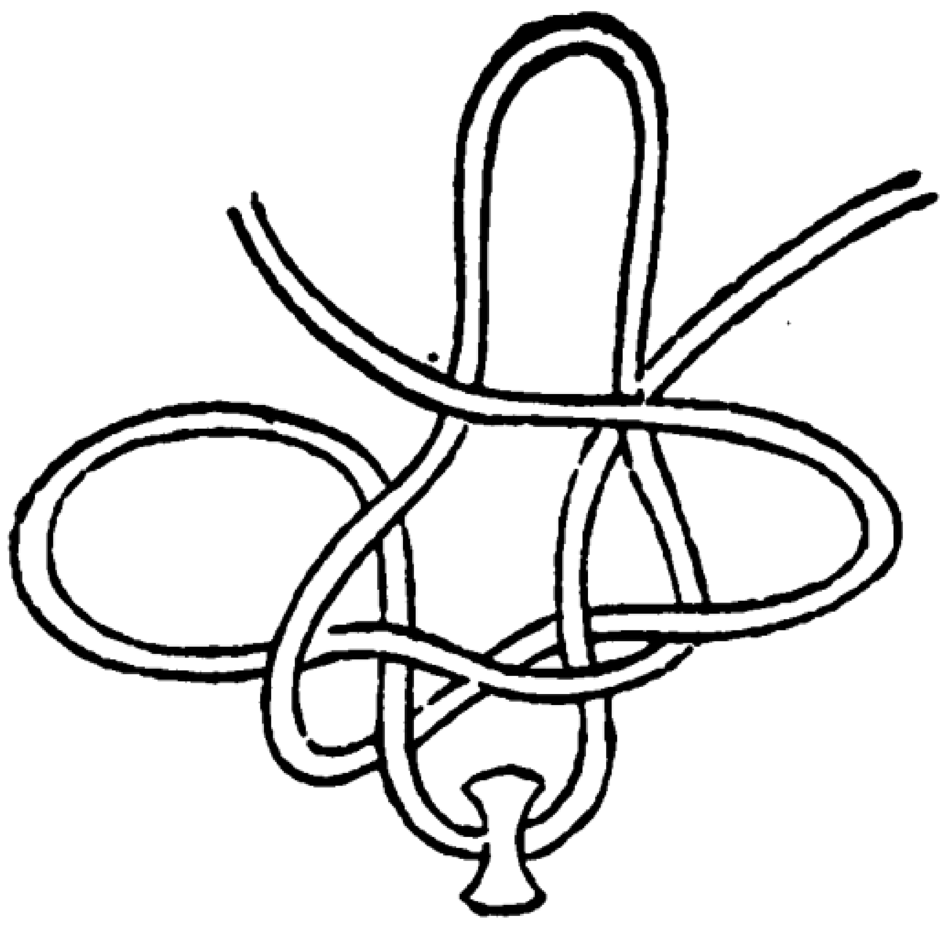
第一圖



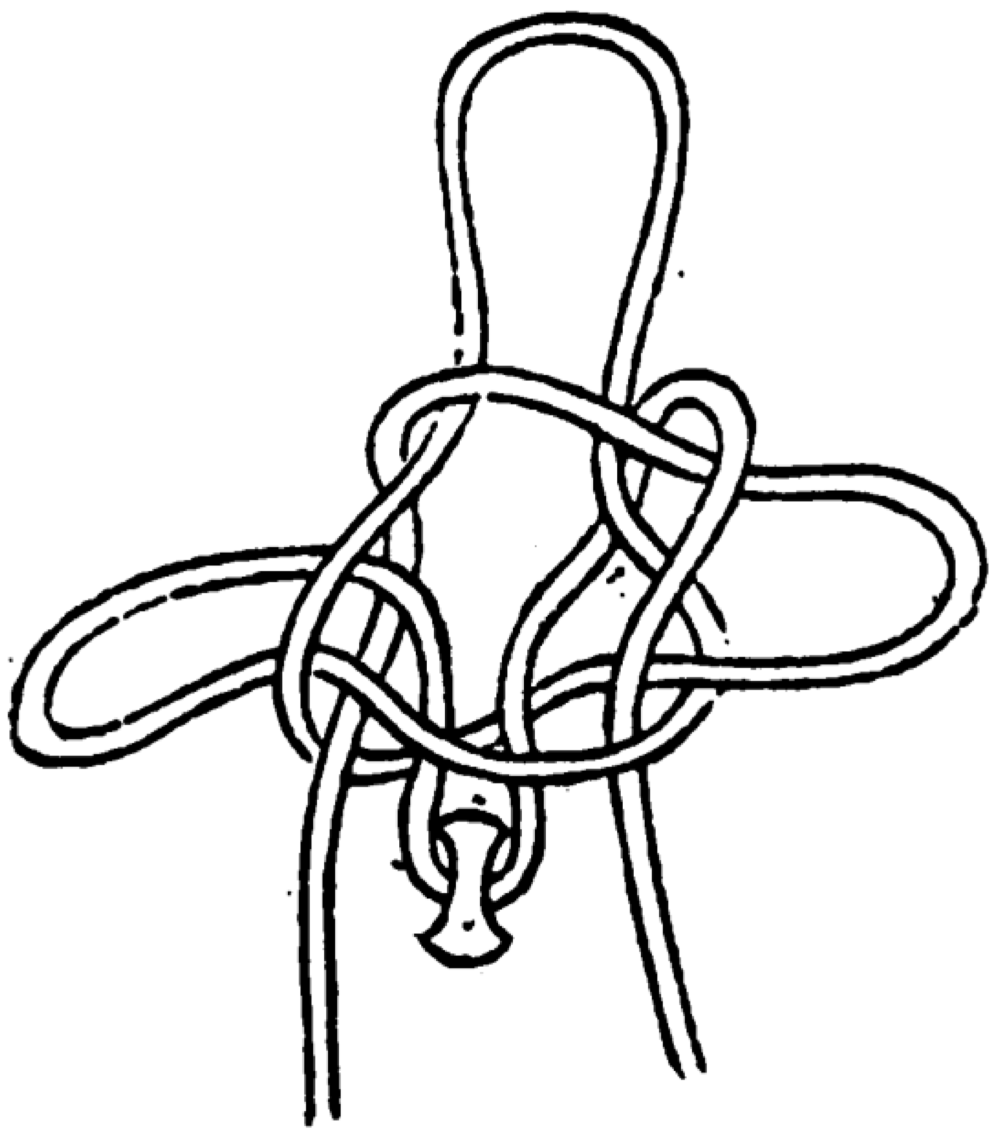
第二圖



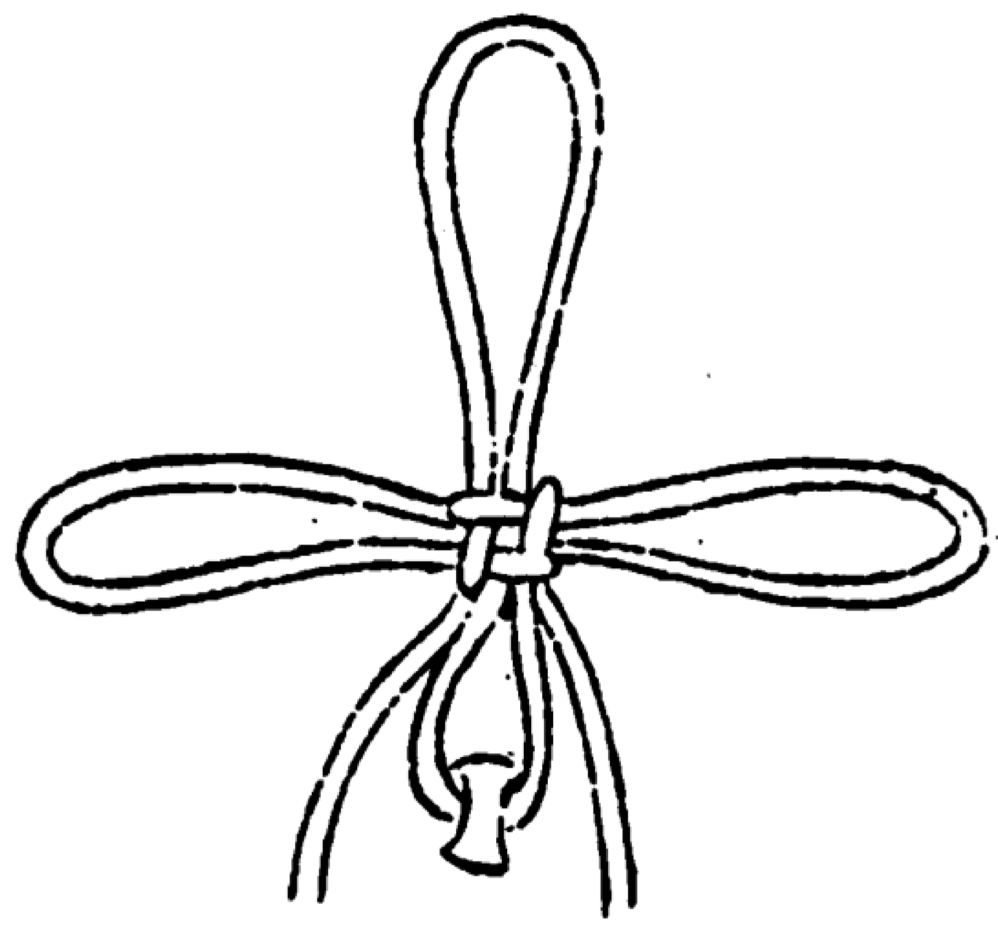
第三圖



第四圖



第五圖

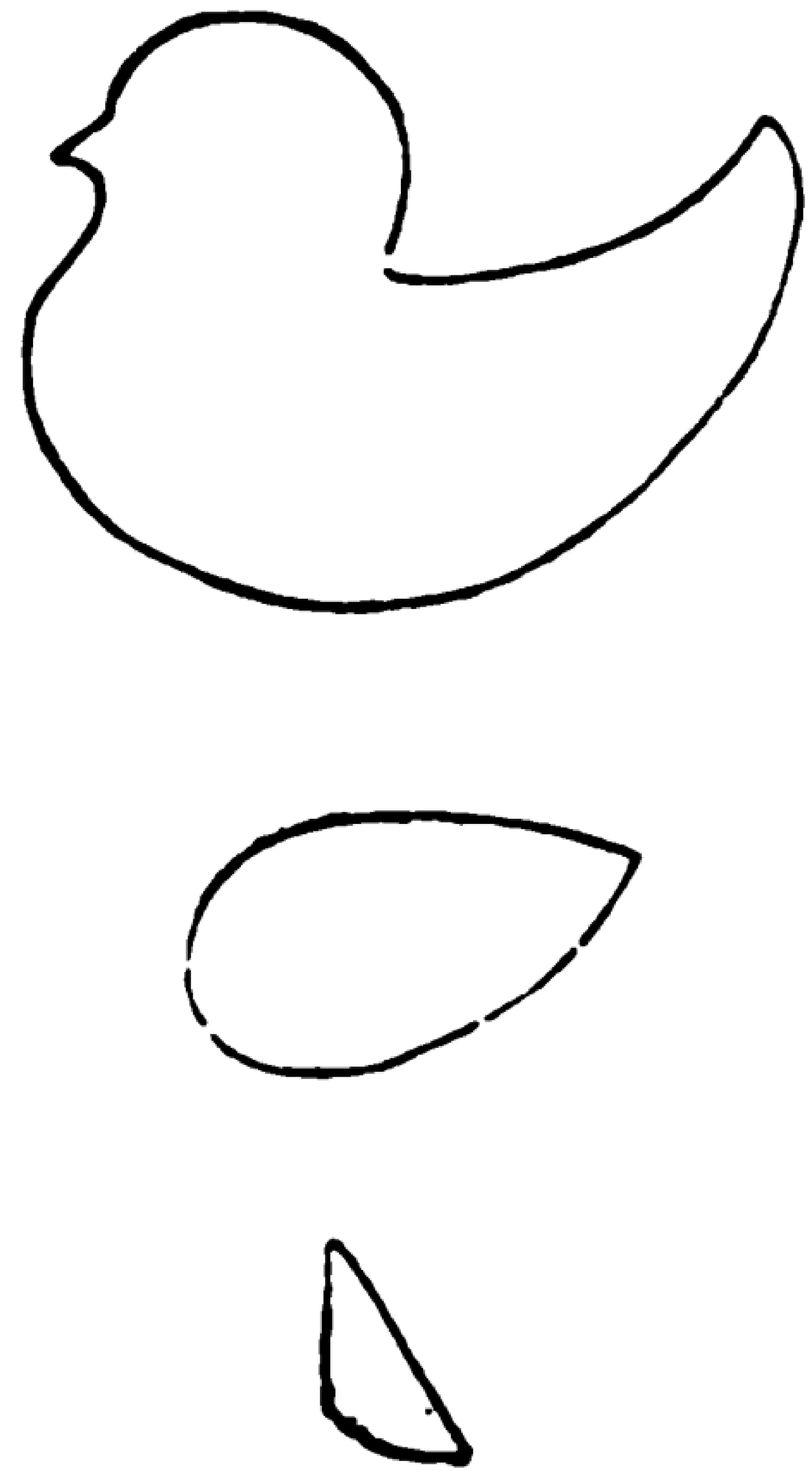


たちぬひ

匂ひ袋のつゞき

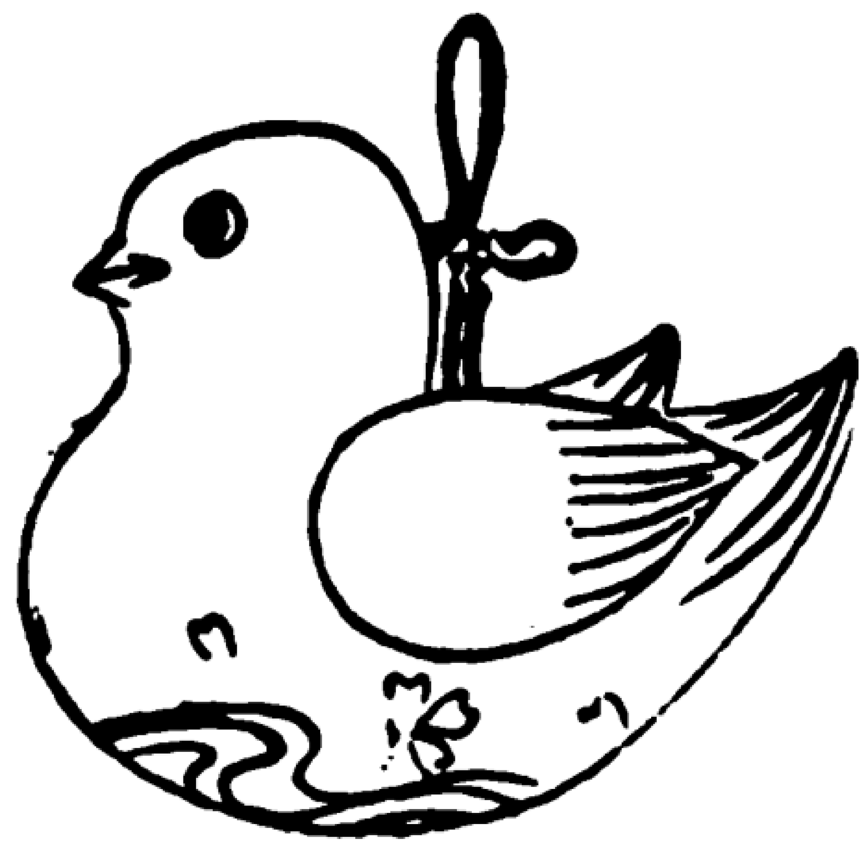
西山たい子

都どりの形



例の通り、厚紙を圖の如く裁ち、それに、綿と匂ひとを入れ、切れを被せ、目、くちばし、翅等を書がき、左の圖の如くくみ合せ、裏をも例の如く厚紙を切り、綿と匂ひとを入れ、切れを被せ、さげ糸を圖の如くはさみ、裏表合すべし。

その圖



だいどころ

鳥團子のしたか

鳥肉に、古米の粉をまぜ、すこし葛をいれ、右玉子の白味にてねりて、このつかひやうは、小くして一本汁にいれ、つまい、牛房の小口切か、大こんのせんぎりか、椎茸のせんぎりかをいるべし。吸口、わりこせうゐる。または、五斗みそ汁も宜し。甚汰味噌にてもよし。

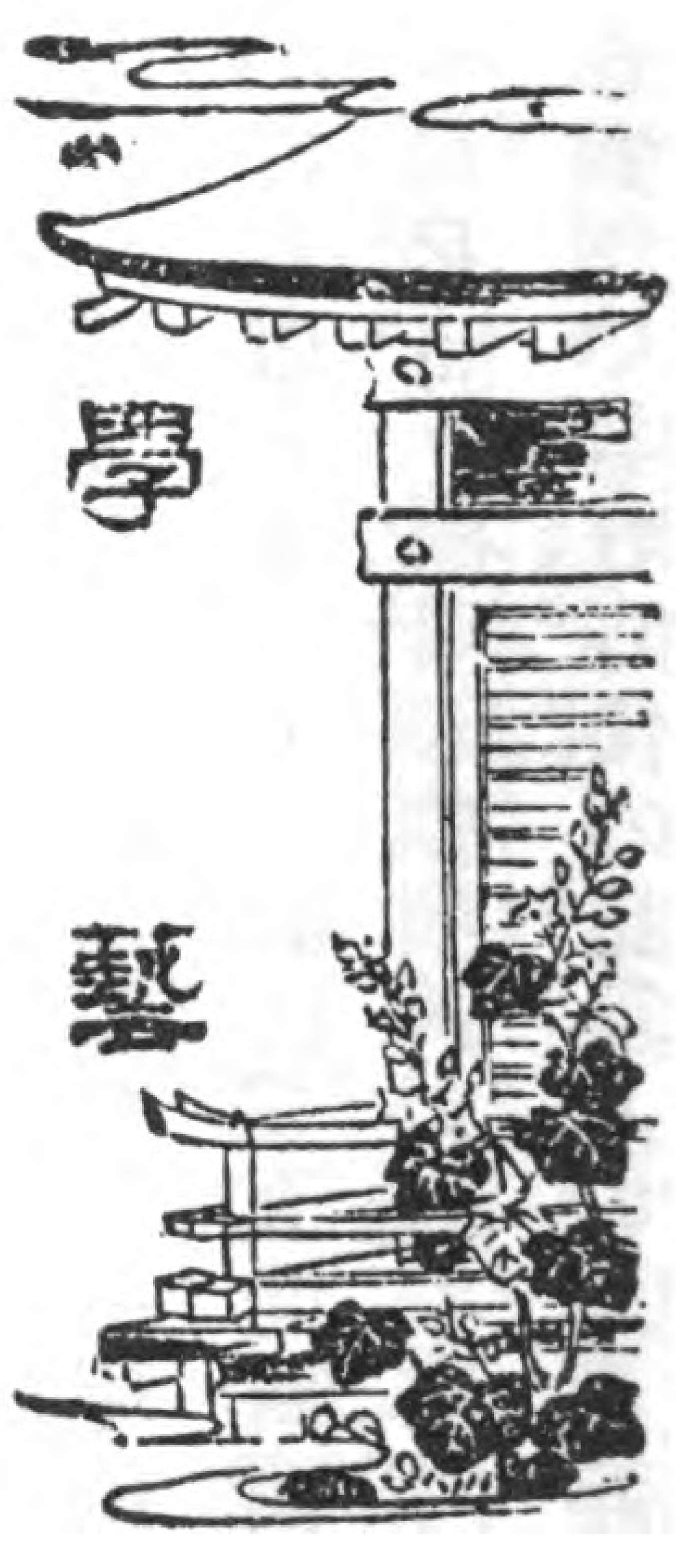
長崎鳥田がくのしかた

かしわか、雁か、鴨かを、半時ばかり味噌に漬て、そのまゝに取出し、みそをとくと拭き、右皮をさりて肉を竹の串にさし、すこし酒をぬりて火どり、山椒みそか、わさびみそか附て、青串にさしかへ出すべし。一臺引物か、手とり肴か、取ざかなに

宜し。肉すこし二ッも三ッも寄て串にさし、焼みそをつくれば見えしれず、また、黒胡麻をふりかけてもよろし。

長崎鳥のとろゝ汁のしかた

鴨か、大鴨か、雉子か、右いづれも、脂皮をとり、肉ばかりを、すこし酒と醤油と半分〳〵にして、右鳥をすこしやき、(右つけやき)こがさぬやうに焼て、さて、右鳥をむしりて、擂鉢に入れ、能くするにあきなし。白味噌汁に、すこし糠みそを入れ、煎立して、右、すりし鳥の中へ、すこしづゝ汁を入れ、又能くするにあきなし。加薬は、ちんひかだ苔里のすりごま、さんせうの粉、にんにくのこまぐ〳〵、飯は、すいふん〳〵大古米が宜し。又、もろ白ざけをかんして、右とろゝ酒もよろしきものなり。



國文學講義

紫式部日記講義(十八)

井上頼文

十一日のあかつきに、北の御さうし、二間はなちて、ひさしに、うつらせ給ふ。御簾なども、えかけあへねば、御几帳を、おしかさねて、おはします。僧正ぎやうてふ、そうづ、ほうむそしづなどゝさふらいて、加持まゐる。院源そうづ、きのふ、かゝせ給ひし御願書に、いみじき事ども、かきくはへて、よみあげたる、こ

とのはの、あはれにたふとく、たのもしげなることかぎりなきに、との丶うちそへて、佛ねんじきこえ給ふほどの、たのもしう、さりともとは、思ひながら、いみじうかなしきに、人々、なみだを、えほしあへず「ゆ丶しう、かうなど、」かたみに、いひながらぞ、えせきあへざりける。

釋義

○北の御さうじ　北側の御部屋、即ち廂の間なり。

○二間はなちて　中の仕切を取り除けて、一間とするなり。

さて、間といふことにつきては、いとまぎらはしく見ゆる條もあれば、今、家屋雑考の一節を引きて、左にかゝげつ。よく讀みて、その状況をもさとり給へかし。

家屋雑考に

間

間といふにさまぐ〵あり。古代多くは、柱と柱との間をさして間といひ、それを、一間、二間といへり。後世は、柱にかゝはらず、一圍の所をさして、御座の間、御次の間などいふ事となれり。又、幾ケンと唱へて町間の間敷をいふ事あり。たとへば、七間四面の寢殿、十二間の厩などいへば、町間の間敷にて、極めて、まぎらはし。故に、東鑑の頃より、柱と柱との間の事をば、幾箇間と、箇の字を加へて、書き分けたる事どもあり。然れども、母屋廂の廻りならでは、一間毎に、柱あるものにあらねば、常の有無にかゝはらず、坪割にして、一坪の所をも間とかける事どもあり。故に、五間四面の母屋の内へ、七間を補理ふなどいふ類も、常の事なり。さてまた、室町時代の記錄どもに、三間の御座

敷、四間の御座敷など書きたる事ども多し。是等も三坪の補理、四坪の補理といふ事にて、今ならば、三間は、二間に九尺にて、六疊敷の座敷、四間は、二間四方にて、八疊敷の座敷といふほどの事なり。然れども、前にいへる如く、そのかみは、總板敷にて、疊あれども敷詰にあらざれば、幾疊敷とはいふべくもあらず。故に右のごとく、間とのみ唱へたるなり。然るに、今時の人は、舊き記錄どもに、九間の御座敷、十間の御座敷など記せるを見て、後世の書院造のごとく、九間は上の間より、第九に當る間、十間は、第十に當る間と心得る故、稍もすれば、其間數の多きをうたがふ事あり。よく〳〵心得おきて、見分くべきなり。但、そのかみとても、一仕切の内をさして、一間といふ事も、絶えてなき事にはあらず。譬へば、鎌倉年中行事に、

新造御所の事をしるして、勝光院殿樣御代には、七つ間あり。長春院殿樣御代には、二十間になされ、坪を廣げらる。二十間は、臨時の御座なり、などあるは御所の總坪數をいふにはあらず。先々御代には、大小名總出仕の時、御主殿、幷に御會所等の内を補理ひわけて、詰所とせられし場所々々、七十仕切ありしが、先御代には、それを廿間に合せて、仕切の内の坪數を增れしといふ事なり。廿間は臨時の御座なりとは、右の廿間とても、常々わけおかるにはあらず、時に臨て補理はるゝ御座敷なりといふ事なり云云。

○ひさしにうつらせ給ふ　ひさしは、庇の間のことにて、庇の方によりたる間をいふ。

○えかけあへねば　急の事ゆゑ、御簾などを懸くる間なければの意なり。

○ぎやうてふ　僧正の名なり。

○はうむそうづ　法務僧都なり。法務とは佛事の事務を取り扱ふ役の名。

○御願書　こゝは御安産を佛に祈願する願文なり、願文の書式の體は、本朝文粹にあまたあれば、つきて見るべし。

○いみじきこと　作善とて、佛像を造り、堂塔を建て、經典など書寫せんことをちかふこと。

○とのゝうちそへて　殿は道長公なり。うちそへ、とは、僧都に辭を添へてなり。

○いみじうかなしきに　まだ、不安心の様なるこゝろもちがして、悲しきなり。

ゆゝしう　こゝは、忌々しうの意なり。今、御産のあらんとする際に當りて、なにか不祥なることなど、あるが如く、人々の泣く事が忌々しとの意なり。

○かうなど、かたみに、いひながら　かうは、かくにて、かやうといふにおなじ。かたみは、互にといふことなり。何故、此の様に、泣かるらんと、人々、おたがひに、いひながらの意なり。

評解

さて、いろ〳〵祈禱しても、御子生れ給はねば、十一日の曉に、中宮は、北側の御部屋の中の、二間の隔を取り除けて、一間となし、庇の間に、御産の座を設けて遷らせ給ふ。いそぎの事ゆゑ、御簾なども、懸くる間なければ、御几帳を、幾重も立てゝ、その中に、おはします。僧正、ぎやうてふ、僧都、法務僧都など伺候して、御加持を行ひ奉る。また、法住寺の座主院源僧都は、昨日、道長公の書き給ひし、御安産御祈願の、御願書に、七堂伽

藍を建立せんなど、大層なる事どもを、書き加へて、詠みわげつゝけたる、その文句の殊勝に尊く、これならば、御安産は疑ひなからんと、誠にたのもしく思はるゝに、道長公が、今、よみあぐる僧都に、誦む、うち添へて、佛を祈念し給ふ程の、たのもしく、たとひ、物騷などが、惱ましたてまつる事ありとも、御平産疑ひなしと、思ひながらも、また、不安心のやうなる心もちして、非常に悲しきにつきて、人々は、今に御産のあらんとする、御めでたき時に、何か不祥なる事などあるかのごとく、涙をこぼさずには居られず、

……………かゝる塲合に、かやうに泣かゝるは、不吉にて、いま〱し　なせ、このやうに、泣かる事ならんと、

女房どもは、おたがひに、いひながら、ヤッパリ、涙を止めかねたり。

漢文學講義

佐々木天游

無腸翁傳　村瀨栲亭

吾友無腸翁。猾介峭直。視二富貴一如二腐鼠一。以二俗士一爲二蜣蜋一。世俗忌二其病一。畏而避レ之。遊二其門一者。廑々如也。然一毀一譽。於レ翁乎何有。翁初住二城中一。厭二其擾々一。占二茅于瑞龍山中一。一裘一葛。疎糲自安。翁博聞强識。過レ眼成レ誦。是以不レ蓄二一書一。室中唯有二二三茶具一而已。最長二于國字文章一。及國風之詩。興到則一日數十百篇。言出二于口一。皆成レ文。所レ著數種。已行二于世一。又有二萬葉集訓詁一。及筆記八十餘卷。一日命二其徒一。瘞二之廢井中一。余聞レ之也遲。不レ能三奪去藏二之名山一。嘆惜無レ及。後值レ翁詰二其故一。翁笑曰。一時漫筆。意未レ盡者頗多矣。然年力頹侵。不レ能三區々就二鉛槧之業一。且與三夢中說レ夢向二痴人一。不レ如三投レ井淸二我魂一。

吾友無腸翁、狷介峭直、富貴をなみすること、廁鼠の如し。俗士を以て、蟯螂となす。世俗其の病を忌み、畏れて而之を避く、其の門に遊ぶもの僅々如たり。然も一毀一譽、翁に於ては、何かあらむ。翁初め城中に住す。其の擾々を厭ひ、茅を瑞龍山中に営いて、一裘一葛、蹤跡自ら浄んず。翁博聞強識、眼を過れば誦をなす。是を以て、一書を蓄へず。室中唯二三の茶具あるのみ。最も國字の文章、及び國風の詩に長ず。興到れば、則ち、一日數十百篇。言口に出で丶、皆文をなす。著す所數種、已に世に行はる。又、苑訓集訓詁、及び筆記八十餘卷あり。一日、其の徒に命じて、之を廢井中に瘞めしむ。余之を聞や遽し、奪ひ去て、之を名山に藏する能はず。嘆惜及ぶなし。後翁に値うて、其の故を詰る。翁笑うて曰く、一時の漫筆、意未だ盡さゞるもの頗る多し。然も、年力頽侵、區々鉛槧の業に就く能はず。且夢中に夢を説きて、痴人に向はむよりは、井に投じて、我が魂を清うするにしかずと。

無腸翁の傳。無腸は、翁の雅號とみえます。翁は老人の通稱であります。傳は、文體中の一式でありまして、其の事迹を記載して、以て後世に傳ふるの文であります。之に、史傳と、家傳と、託傳と、假傳との四種の別がありますが、今、此の文の如きは、家傳の一種に屬するものであります。

儕吾が自分の朋友の、雅號無腸と申す所の老人は、其の性質が褊急にして、人と和することが少なく（狷介、說文に、狷は褊急也とあり。晉語に小心狷介、不敢行也とあり。性質が褊急にして、敢て不義を行はず。已の操を抱いて、人と和する

こと少なきを云ふ。)峭直と、山のケハシク、サカシシ、つき立た樣に、正直な人でありまして、中に、潔白な、性質であります。ソコデ、富んで金を持ち、貴くして位の高きことをみることが、腐敗たる鼠をみるが如く、ナントも思うて居られずして、少しも、世中の名利を求むるの心を、持ちて居られませぬ。世上の富貴名利に、汲々たる鄙俗の人を、罵り嘲笑うて、以て糞中の蟲同然な穢はしき人間となして居られます。(蜣蜋は、字書に喰レ糞蟲也とあり。雪隱蟲のことなり。)ソコデ、世間の人が、其の翁の性質の、褊急正直にして、人と和すること少くして、世人を罵しるの病を忌み嫌うて、翁を畏れコハガリて、之を避け遠ざかりて、可レ成翁をよけて、寄り付ぬ樣にしてをる。ソコデ、翁と往來して、其の翁の門中に遊ぶ所の人は、至て少くして、廑々如として、ホンノ僅か

三四人位なものぢや。(廑は、僅の本字。)然しながら、世間のわけも分らぬ俗士が、一毀一譽で、或は毀り、或は譽め、一たびは、惡口して翁を毀り、又、一たびは、賞讃して、翁を譽めると云ふことは、固より、無腸老人に於ては、何ともあることでなくして、世俗の人が、譽めてみやうが、毀りてみやうが、翁に於ては、痛しとも、痒しとも、思ふことでなくして、何の關渉もなきことである。ソコデ、其の門に游ぶものが、少からうが、其の病を忌むで、之を避るものが多からうが、翁には、一向、何の損得もなきことぢやと云うて、俗士を抑へて、翁を揚たもので、即ち、之が文の抑揚法であります。老人は、最初に、城下に住居を致して居りましたが、其の城中は、人が多くて、擾々と亂れて雜鬧することを厭ひきらはれまして、後にチガヤを、閑靜な瑞龍山と云ふ山の中に

結び菴いて、乃茅葺の家を瑞龍山中に建て丶、城下より引き移りて、住うて居られました。(苫は字書に以レ草覆レ屋也とあり。かやにて家を葺くてとあり。)サウシテ、冬の寒い時には、一枚の裘衣を着、夏の熱い時には、一枚の葛衣を着らる丶のみで、質素にして居られ、又、喰物も疏糲、(疏は精の反なり。あら〳〵しきもの、糲は脱粟也。玄米のこと。)野菜などのあら〳〵しきものに、玄米の飯を炊いで喰うて、貧しく暮してをられて、自分から、晏如して、樂み安んじて、世間の榮華など丶云ふこと丶には、少しも、頓着せれませぬが、無腸老人は、中々、聞見の博くして、大變に、物覺の強き人でありました。(博聞は、澤山に書物を讀んで、見聞の博きこと、強識、識は誌と同じく、記し覺えてをること、記臆力の強きことなり。)眼を過ぎて、一度眼を通さる丶と、すぐに暗誦して、

そらに覺えられます。ソコデ、個様な譯合を以て根が博聞の上に、なんでも一度みられたものは、暗誦して、覺えてをられるものだから、一巻の書物をも、蓄へ藏して居られませぬ。何でも、皆そらに、覺えて居られるものだから、書物を參考などするの必用がないから、藏書は一巻もない。室中の家の内には、唯、ホンノ二種か三種かの、僅計りの茶飯道具がある。ソレギリヂヤ外には何にもない。翁は、博聞強識で、何事にも、通じて居れますけれども、其の中に最も我が國の假名字の文章と、兼て又、我國様の詩歌即和歌とにが、一番に長けて、上手でありまして、興到で、心に面白しと、思はる丶時にありますと、則、ソノトキニハ、(則ハ、接語の辭なり。)一日の中に、數十百篇で、五十も、六十も、百も作られます。何の造作もなく、唯言葉がずん〳〵と、口から外に出

るのみで、皆、奇麗な文章をなして居りまして、別段に、思案したり、工夫したりされねでも、言葉がすぐに皆文を成しますので、中々に達したものであります。著述をなして居れます所の數種。幾種かの書物は、已にはや版本となりて居まして、世間に流布して、行はれて居ますが、又、其の上に、萬葉和歌集の註釋と、(訓詁は、註釋のこと。)兼て、又、萬葉集筆記と云ふもの、八十巻餘りの書物を、著作して居られましたが、此の二種の本は、未だ世には行はれて居ぬものでありましたが、ドウイフモノデありますか、或日のこと其の自分のともがらの者に吩付て、此の二種の著書を、古井の中に投入て、湮めてしまはしめられました。(廢井は、古井のこと。湮は、埋沒ることなり。)が、余自分は、翁が其の著書を古井の中に、埋めしめられたと云ふことを、聞き知るとが遲くして、已に埋めてしまはれだ後に聞たものだから、(茲所の也字は、決語にあらず。語勢の助字なり。)埋めらるゝ前に、翁の手より奪ひて、採り去りて。此著書を、名山の名ある山の中に、藏めかくして、之を其の人に傳ふることが、出來なかつたので、(漢の司馬遷が、報二任安一書に、僕誠已著二此書一。藏二諸名山一。傳二之其人一。云々とあるに本づく。)あゝ、殘念なことをした。早く知りて居たならばと、嘆息をして、惜むでみたけれども、已に遲れた後で、及ぶことなくて、致方がなかつた。誠に、遺憾なことゝ思うて居たが、其の後無傷老人に逢うて、ドウイフもので、折角丹精をして、御著述になりたものを、むざ〳〵と、古井の中に、湮めてしまひなさいましたかと、詰り問ひました所が、老人が、にこにこと笑うて、答へて申されますのには、されば、あれは、ホンノ一時の漫

筆で、考へもなにもしないで、唯、筆のすさびに、漫りに書いたもので、十分に我が意中を盡さゞる所のものが、頗よほど多いので、固より、之を、名山に藏して、其の人を待て傳ふると云ふ樣なものではなかつた。然しながら、只今になりては、最早、老年にありて、年の力が頽れ衰へ、老の力に侵されて、魂氣も何もなくなりて、區々こせこせと、勉め勞して、紙筆をとりて、著作の業に就て、意中を盡すと云ふことが出來ぬ。ソコデ、後世に傳ふべきものでないから、非の中に瘞めたので、（鉛槧之業、西京雜記に、楊雄懷レ鉛提レ槧。從ニ諸計吏一訪ニ殊方絶俗之語一。作ニ方言一とあり。槧とは、版模のことゝあり。ソコデ、鉛槧之業といへば、紙筆をとりて、著作するの業と云ふことゝ知るべし。）且は、一ッには又、夢の中に夢を說いて、つまらぬたわいもなきことを謂うて、（自分の臆見を述ぶることを云うたるもの。）世の中のわけもわからぬ、愚痴な馬鹿に向ひて、話して聞かさうよりは、一層のこと、之を古井の中に投込で、（輿字は、よりはと讀むべし。ソレヨリハの意あり。）痕跡もなきやうに打棄てゝしまうて、我魂魄を、さつぱりと、清淨にしてしまふには、如き及ばぬことで、わけのわからぬ世の馬鹿ものに、一場の夢物語をして聞かさうよりも、其の方が益しぢやわい。それ故に、古井の中に、瘞めてしまうたのぢやと、答へられましたと、老人の答辭を以て、茲文を結びましたもので、別に、一句の論贊をも致してはありませぬけれども、翁の、當底尋常の人に非ずして、誠に、脫俗の高士であると稱揚しました所の氣味が、隱約の間に著はれてをります。是が、却て文士の手際であります。

家計簿記法講義

磯部武者五郎

(七)主簿者の心得

家計簿記は、一家の經濟か記錄するものでありまして、其の帳簿を主どる者は、即ち、一家の主婦であります。依りて、今、其の主簿者たる人の心得べきことを述べます。先づ、第一に心得べきことは、記帳の法式を一定に致し置くことです。固より、記帳法は、簿記法に依りまするが、其の家家の仕來りに由りて、幾分か變らなければならぬことがありませう。其の變るべき所は、能く法式を考へ定めて、常に、記帳法か一定して變せぬ樣に爲し置くてこそ必要であります。第二には、記帳の手跡を明瞭にすることです。第三には、誤記訂正の跡を明にし、混雜せざる樣に爲すべきことです。此の三つのことは、能く心得ありて、常に、服膺すべき條件と致すべきことであります。

(八)家計簿記の帳簿及記入法

家計簿記にては、三つの帳簿を要します。即ち、

(一)日記帳
(二)諸勘定帳
(三)元帳

の三つです。

それから、貸借の語を用ゐませず。受拂の語を用ゐまして、借方、即、金錢の收入する方へは、受の語を用ゐ、貸方、即、金錢の支出する方へは、拂の語を用ゐます。

式は、單式の方法で致しまして、つとめて、繁を省きまするつもりです。

以上の方法は、先づ、中等以下の定まつた收入ある家庭の經濟を標準として立たるものでありま

すか、中等以上の家庭にても大概は、此の方法で、家計を整理することが出來るであらうと思ひます。但、商家にて大なる店を張りて居る家は、店の方は、商業簿記に據りまするが、全く、一家の賄費及家產に屬する方は、此の家計簿記に據りて、致しますが宜しうわります。

日記帳

此の帳簿へは、日々生ずる所の收入金、及、仕拂金を順を追うて記入します、其の記入法は、

34年 月	日	摘要	受 圓 十錢厘	拂 圓 十錢厘
8	1	✓俸給(八月分)	250000	
〃	2	✓敎育費(授業料)		2000
〃	3	✓借家料(八月分)		20000
〃	4	✓利子(公債證書)	1000	
〃	5	✓賄費		50000

此の書き方は、先づ、年月日の欄へ記入して、摘要の欄へ俸給とか、利子とか、科目を大字にて記し、次に、(　　)をして小字にて八月分とか公債證書とか記し、其の金額を各受、拂の欄に記入します。而して、此の日記帳は、元帳と關係しまして、元帳の基礎となるもので、日記帳に一度記入したるものは必ず、元帳に行つて計算することにあるのです。そこで、元帳へ轉記するが必要である故、元帳へ轉記するに從ひ、科目の前にての印を附記します。此の印は、元帳へ轉記濟の證です。

諸勘定帳　此の帳簿へは、日記帳及元帳に記しまする科目の內譯勘定を記入します。即ち、補助簿であります。たとへば、賄費といふ科目で、日記帳元帳には記入しましても、其の內譯の細目は記しませぬ故、賄費に何が支拂に立ち居るか分りませぬ。そこで、此の帳簿で、其の細目を知るこ

とであります。其の記入法は、

賄費

34年		摘要	拂			
月	日		圓	拾	錢	厘
8	1	米屋拂	6	0	0	0
〃	〃	魚屋拂	5	5	0	0
〃	〃	茶壹斤		5	0	0
〃	2	菓子		1	0	0
〃	3	紙類		1	0	0

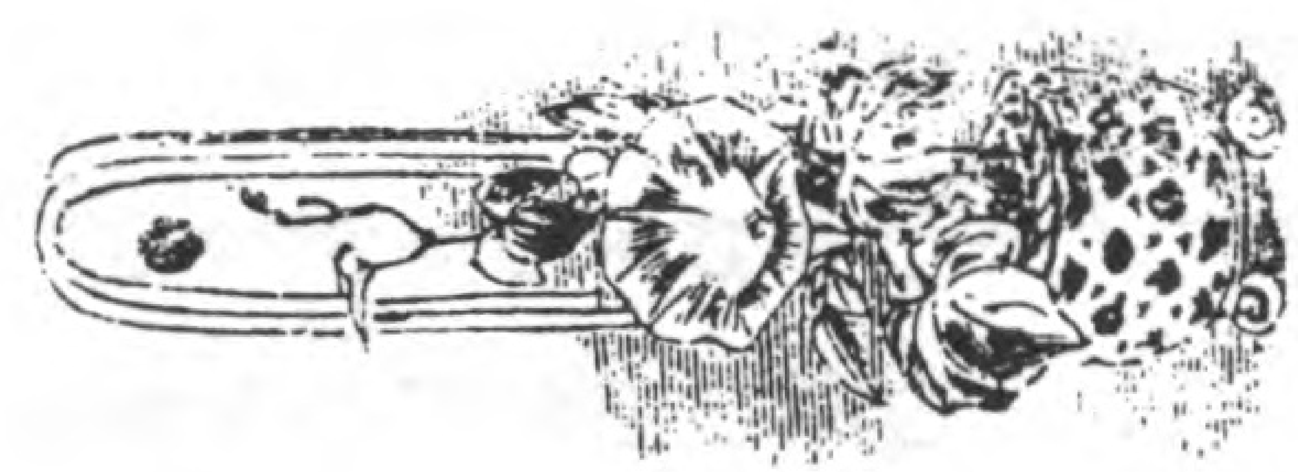
元帳　此の帳簿は、各科目毎に別々に記入して、一家經濟の全体を總括するものであります。先づ、日記帳より轉記するのでありまして、日記帳に記したる科目は、此の元帳へも、悉く設け置きます。一体、此の元帳は、複式にするのが正當ですけれども、家計簿記にては、複式にすることを省き、左の如き簡便ある記入法に據ります。

元　帳（賄費）

34年		摘要	拂			
月	日		圓	拾	錢	厘
8	1	現金拂	28	5	0	0
〃	15	〃	10	0	0	0
〃	30	〃	20	0	0	0
			58	5	0	0

以上は、三つの帳簿につきての説明であります。尙、記入法の練習等は、別に、問題を出して示します。

（以下次號）





深山瀧 東久世通禧

よのちりをへたてはてたる奥山の
瀧のひゝきそさやけかりけり

夏夜雨 高崎正風

水無月のてるひになれし夏くさも
こよひの雨におきかへるらん

朝梅雨 鍋島直大

閨の戸はふるさみたれに開かねて
あさの寝覺のおそくもある哉

海邊梅雨 津輕承昭

相模の海いそへにあまかひくあみの
ほすひまもなきさみたれの頃

山夏月 西三條實義

山松のこのまなからになつの夜の
つき影うつるねやのすゝしさ

田上螢 宮地巖夫

しけりあふ田面の稲葉つゆみえて
照らすはたるの影のすゝしさ

竹風 北郷久政

呉竹の葉すゑ渡りてわかまとに
ふきいる風のおとのすゝしき

夕水雞 坂正臣

くれわたる里川のつゝみゆくひとの
絶ままたてもなく水雞かな

夕立 植松有經

ならの葉に風吹おちてゆふたちの
降らぬさきより涼しかりけり

燭影映水 岩崎勝從

松かけにつるすともし火涼しくも
したゆく水にかけそうつろふ

船納涼　蜂須賀随子

暮はてゝ月もすみたのかはふねに
まほならねともあき風そふく

夏露　近衛貞子

夏草のしけるまゝあるわかやとは
ひかけにきえぬ露もありけり

市中梅雨　鍋島榮子

さみたれの降くらす日も立さわく
市ひとのこゑかしましきかな

梅雨晴　前田朗子

梅雨のはれてこよひはめつらしく
つきの影をもみいてつるかな

旅梅雨　南郷柳子

旅ころもぬきかへもなき袖ぬれて
いとゝわひしきさみたれの頃

刈夏草　松平米子

なりはひのいとま〳〵に露分けて
かれはあとよりしけるなつ草

砂月涼　小川直子

ひるあみしうしほも遠くひく跡の
眞砂をてらすつきのすゝしさ

芦間螢　松平多鶴子

しらなみのよるの芦まにちる露は
風をかけたるほたるなりけり

雨後夏月　河村重子

ひとしきり暑さはらひしむら雨の
なこりすゝしく月いてにけり

旅宿會友　宮地小東洋子

憂旅のこゝろはそきにゆくりなく
めくりあひぬる友のうれしさ

夏けしき

小西甚之助

ふく風に木々の葉末に置く露と
　ともにみたれてちる螢かな

ともし火に代へしふるごと語りつゝ
　窓にうなゐと見るはたる哉

はたるとふ野辺の柳の下ゆけば
　みどりも燃ゆる色に見えけり

木下闇草間にひそむはたるこそ
　飛ひかふよりも哀れなりけれ

木の間飛ふ螢の光影さして
　青葉きらめく夜半の谷水

音羽川流るゝ水をきゝなから
　なとて螢のおとはせで飛ふ

うつる影も清瀧川に飛ふはたる
　楓の青葉色や照るらん

淺みとり夏の木立の下蔭は
　よるゆくさへもうれしかりけり

さみだれの晴間さやけし花石榴
　下行水に影をうつして

花も葉もいろもにほひももろともに
　すゞしきものははちすなりけり

たち葉うき葉はちすの露のかゞやくは
　花のひかりのさすにやあるらむ

花の露落つるをうけてしら玉を
　底にしづめむ池のはちす葉

さかしまにかくるかたちの富士なれば
　すゞしき風は雪やふくらむ

心の花

井上頼文

伊雑宮御田祭

氷奥學藏

君か代の千代をうたひて早少女か

うゝる田面はにきはひにけり

志摩の國より逢坂山を越えて伊勢の國にものし侍りける時、まだ夜中ばかりとおもひしほどに、いつしか、神路山の梢に、むらさきだちたる雲のたなびきて、のこんの月かげおもしろく、郭公の鳥も、たゞならず聞きなされ侍りける、かゝるあかつきがたのおもむきを都人に見せなましかば

時鳥ひと聲なのるほどもなく
　やがてあけゆく短夜のつき

月

吹風に雲はあとなく消えはてゝ
　そらゆく月のかげのさやけさ

くもりなき御代のひかりもます鏡
　照らす雲居のつきのさやけさ

川梅雨

さみだれに川おとたかくみなぎりて
　筏にさはるいはかどもなし

夕立

夕立は外やまのおくにかゝるらん
　いはまにあまる瀧のしらなみ

朝顔

おく露のいろもにほひてさきにけり
　賤がかきねの朝がほのはな

都夕立

下田春興

鳴る神のとゞろくとき、いなづまのひらめく時に、
風はやみ雲はおほひぬ、雲おほひ雨はふりきぬ、
ふらぬ間と急ぐ市ひと、ぬれぬまとはしる車も、
こゝの軒かしこの門に、より集ひいゆき集ひて、

ゆき通ふ人もしつまり、立ちまよふ塵も治まり玉しきの都大路はしつけかりけり、

國ほぎ

甘井與太郎

神代より　名に負ひ來つる
豐葦原　みづ穗の國は
天地の　めぐみ深きくに
四の時の　いつもよき國
野山に　木草しげれり
田畠に　米麥さかゆ
朝な夕な　たつるけぶりは
春霞　たなびきわたり
民草の　よろこぶこゑは
夏蟬の　絶ゆる期なし
うべしこそ　名にも負ひけめ
豐葦原　みづほのくには
四の海に　たぐひなき國　國の眞秀國

反歌

國といふ國のまほ國にわしはらの
みづ穗の國はくにのまほぐに



女訓綾廼雛形（承前）

揖取素彦

一、食次の役參らば、椀のふたをとり、右の脇に置、椀をとりて出すべし。盛りて出さば、兩手にて取り、膳へおき、分杯をとりて、本椀のめしを

とり分け一口参り、汁を取り上げて一口参り、椀を置、飯を参るべし。汁椀のふたは、食椀のふたの上へ重ねて置くべし。(むかしのめしわんは、大きくして、ふたも、汁椀のふたより大なり。飯器のふたの上へ、汁椀のふたをふせて置かるゝなり。これは、再進のときに、都合よきためなり。今のめしわんのふたは、汁椀のふたより小さき故、ふせておきがたし。あふむけて重ねておくべし。)又、汁を参り、食を参り、膾か壺皿の品を参るには、皿をそのまゝ置き、分抔をとりて、これにうけて参るべし。壺皿を参るに、両手にて取り、さて、左掌にうつし、右手

読者諸嬢よ、今度余興として、次の如く歴史的ぽんち画を六ツ程だしましたから、誰々であるか當て御らんなさい。當てた人には、聊ながら、賞品を差げますよ。

にてふたをとり、右の様に置き、中の品を参るべし。さて、また、飯を参る。此の時、飯の三進参りたらば、椀をとりて、初の通りにして渡さるべし。次に、汁の再進参らば、明椀を取り、ふたをして渡さるべし。通ひの者、再進のわんを両手にて膳を上げおく。汁を参り、飯を分抔へうつして参るべし。又、汁を吸ひ、飯を参り、平皿をとり、壺皿の扱ひの如くして、中の品を参り、又飯をまゐるべし。さて、飯次まゐりたらば、十分なるよしを告げらるべし。此の内に、汁を参り、飯を参り、膾を参り、飯を参り、二口ほどのこして、膾かつは皿を参り、又飯をまゐりて、湯を乞ふべし。此

の時、食次まゐりて勸むる事あるべし。旣に十分なるよしを斷り被申べし。さて、箸をさめて、湯をうけ、飯をはり、懷紙にて箸をぬぐひ、膳のふちをはづして、あかへおとして置くものあり。餚は、賞翫のものあれば、成るたけ殘さず參るべし。

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、斉て我が短を補ふべし。他の短を以て、反省の料となすべし。

▲たゞ我が長をすてゝ、他の長短をあはせとるの愚をなすべからず。

第四章　獨逸婦人

（其の三）獨逸婦人の風俗

獨逸婦人の、偶、男子と相携へ、極めて親密なるが如く、郊外の散策に或は舞蹈會に、鴛鴦の双び飛ぶに似たるあり。而も、之れ多くは一時の興に出づるものにして、英米人の如き親切を、兩者の間に有するにあらず。男子は、多く佳麗の婦人と携ふるを一時の裝飾とし、他に誇るの方便とするものあり。（何れも、未結婚者を云ふ。）

又、人を訪ひ、客室に導きて、婦人來ッて茄非等を侑む。客は、即ち、婦人に謝して曰く、

我が最も敬愛する貴女よ。御厚意千萬有りがたしと。而も、之れ通用語にして、眞に、敬謝の意は千萬分の一に居るのみ。此の如く、男子が婦人を視ると極めて輕く、婦人の男子に於ける、亦此の如き習俗あり。例せば、

曾て、伯林の郵便局員が、平生最愛の女子と偶一室に會せし折柄、意中の千萬無量ある秘密を洩ししに、局員と從來知合の一女、忽ち、窓間より闖

入し來れり。局員は、倉皇、之に向つて、其の他言せざるを請ふ。女子は諾して去る。而も、翌日の新聞には、當日の秘密悉く暴露せられ、局員は、叨に處女に戯るゝの角を以て其の職を免ぜらる。

獨逸に稱すべき點は、其の生活上、嚴に規則を設けて、そを遵行するあり。例之ば、何時より何時迄一家の整理、何時迄讀書、何時迄應接訪問、最後に何時に就眠して、何時に起床すと、斯様に一々規則的に起居し、此の規則外には、決して出でざるなり。故に、能く事擧り且つ整ふ。

獨逸婦人は運動を怠らず。日曜等には、三々伍々群をなし、公園其の他郊外に徜徉し、雪降れば橇に乘り、晴るれば打毬に鞦韆に、少老を擇はず相嬉戯する態、如何にも活潑壯快にして、殆ンど男子と異なる所なし。左れば、何れの小學校等も、運動てふことは非常に奬勵し、他日、有爲の婦人たるの體力を鍊磨せしむ。其の結果長ずるに從ひ極めて運動好の婦人生ず。即ち、氣力體力共に健全の婦人を見る所以なり。



オヤ御前様は、此の雨ふりに………。麿は、汝の使が遲いから、又例の柳に、イヤサ道草でも喰つて居ないかと、實は………。

獨逸婦人は、皆、音樂に堪能なり。故に、何れ地も、稍密集せる市街村落を通行すれば、嚠喨の音耳を衝いて聞えざるはなし。

獨逸婦人の、學校卒業後に到り一家の主婦となるも、嚮に學ひ得し事の研究を怠らず。美術文學等には、屢々相會して討議研鑽を怠らず。故に、其の識見亦侮る可からざるものあり。有名なる學者政事家の議論も、偶、この婦人團の嘴頭に掛り批評を蒙ることあり。

女子要書解題（な之部）

三浦千畝

難波江　一卷

松平定信の著なり。公は白河城主にして、世に白河樂翁と稱す。公が一代の大政治家として、徳川氏の弊政を釐革し、兼ねて學を好み、和歌を能くし、書に巧みなりしこと、皆人の知る所なり。公の著書には、政治、文學、教訓、有職等に關するもの甚だ多し。女訓に關するものは、本書の外に、樂亭かんあの記などあり。



秀麗なる本世界第一の富士山に住して、未とまで威張て居ただけあつて味も又高尚無類だわい

公は田安中納言宗武の第三男にして、安永四年十八歳の時、白川城主松平越中守定邦の養子となり、その翌年、元服して定邦の長女峰子と婚せり。此の書即ち夫人峰子の請により、婦女の訓誡を記せるものなり。自序に「ふるき反古よりこの卷とりいで見侍れば、こは安永の頃、予がかきつゝりて峰子へおくりしを、ひめおかれしなり、もとよりつたなき言の葉、たぐひなき物から、あき人の手ふれ

けんと思へば、さすがに捨てがたくて、そのよしゝるしつゝ、をさめ置き侍るもの也、文化二年八月定信』とあり。さて書名をかく名づけしは、文の首に『難波江のよしあしも辨へぬ愚さを顧みず云々』と書けるによれるなり。

永松氏の女に贈りしふみ　一卷

永松氏の傳は未だ詳ならず。天明六年の著なり。此の書、永松氏の侍女通といへる人の善行を擧げてその女を敎訓せるものなり。

樂亭かんな筆記　一卷

白川樂翁の著なり。此の書、難波江に比すれば、やゝ晩年の作と覺しく、筆致老熟、意見着實なり。全編、嫉妬の情を去るべきことゝ、柔順の道を忘るべからざることゝを說きたり。僅に數葉のものに過ぎざれども、公が面目の一端をうかゞふに足る。

詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

梶原景季

もろともにちらは散らむとさしそへて
　えびらのうめに名はにほひけり

箙に梅をさしたるは、父景時なれど、世に景季といへば、さても有へし。二句、ちらばちらむといへるは、叶はず。三句、そへといふ事用なし。梅ともろともにちるは何ぞや。梶原なるべし。人の死ぬを、散るといふべからず。近世の歌に、かゝる類多し。心すべし。四五句も拙し。名は、匂ふといふべからず。

法然上人

さま〳〵に別れしのちのみちのおく
　ふもとになしてときひろめけり

道のおくふもとになしてとは、無下に物しらぬいひさまなり。ふもととは、いかてかいふべき。道の奥の對しては、口といふべき格なり。かばかりの事もわきまへぬは、いかにぞや。

文覺上人

思ひきや心に懸し人のなな
　身の上にさへ負ん物とは

四句、うへにさへもつたなし。結句、おはむもかなはず。人の名のけさを我が身に、などいふべきか。

小督局

かきりとてひくやなみたのつま琴も
　うれしきふしにかはる笛たけ



何々の限とこそいふべけれ。たゞ、限とばかりにては、何のかぎりか、しりがたし。なみだのつまことは、む下にをさなくいはれたり。こは、語をなさす。いともふつゞかなり。嵯峨野のともなくて、見どころなし。

辨慶

君をさへ打謀つゝ關の戸を
　越しは筆の力なりけり

初句は、富樫のみか、君さへはかりしといへるにや。君をはかりしにあらねば、事實たがへり。二句、つゝとあるも用なし。二句、關をこえしといふべきを、文字たらはで、關の戸といへるにや。四句、筆故なといてたり。いとみだりなり。

大和めぐり

井上頼文

五日午前の記者は館氏なり

鹿の鳴く音に驚きて、頭もたくれば、窓もる透影、いとくらし。明方には、まだ程あるにや。うまいの鼾もいと高し。かくてはとて、又まどろみぬ。程なく人の起きいづるけはひすれば、我も臥戸を離れたり。今日、幾日。指をり數ふれば、早五日とぞなりにける。空の景色、昨日にひきかへて、いとのどかなり。例の事し終へて、八時、漸く旅の宿りを出でたつ。奈良の名所を尋ねむとてありけり。抑、この地には、如何なる歴史が有るらむ。地、京阪に近くて、交通の便よければ、各所の物品、皆こゝに輻湊す。されば、何心なく見たらむには、唯繁昌なる市街とこそは見えめ。されど二千餘年このかたの、我が帝室の歴史を思はゞ、其の感慨は、如何に。率川の宮のありし所は、いづこ。桓武天皇、都を、今の京に遷させ給はざりし以前、七御代の天皇は、いづくに都し給ひけむ。且藤氏のいつきまつりし氏神の鎭まります所、藤氏の檀那寺を建てし所は、いづこ。山川、草、木、つぶて、いさごも、皆夫々に歴史もたぬは稀なるべし。偖もゆかしき所よな。ある人の歌に

かぎろひの春にしあれば、春日山三笠の野邊に、
櫻花木のくれがくり。貌鳥はまなくしばなく。
露霜の秋さり來れば、はかひ山飛火のたけに、
萩のえをしがらみちらし、狹男鹿は妻よびとよめ。山見れば山もみがほし。里見れば里も住よし。

など、讀れたるも、ゆゑあることなりかし。然れば、奈良朝の歌よむにつけ、文見るにつけ、いと

ど、この地の慕はれて、いかで一度はと思ひつゝこゝに數多の年月を重ねつ。今は、この思ひを遮り留むるものなく、今日、かかる名所を尋ねる事を得たる嬉しさよ。しかも我一人のみにはあらず。十八名と、之を共にす、嗚呼、何の宿世ぞ。誰が與へし、幸福ぞ。たゞちびれたる、我が筆先には、そのかたはしをだに寫しあへぬぞ、意ゆかぬ一ふしにはありける。旅館よりすこし行けば、道の右に、池あり。これなん、音にきける、猿澤の池なりける。うち具したる、案内者が、得意顏にいひのゝしるをきけば、へ。御一統樣に申し上げます。此の池は、誠に、不思議なる池で御座りまして、池の水は、増しもせず、へりもせず、澄まず、濁らず、出ず、入らずと、申して(評、案内者のこゑ、猶耳にあり。)など、首、うちふりて語る樣なりけり。衣かけの柳は、池の汀にあり。うつれる影は、眉の如し。采女の入水せしは、いづこぞ。うつらぬものは、すぎにし面影になむ。大和物語に

わぎも子がねくたれ髪を猿澤の池のたま藻と見るぞかなしき

といふ歌をのせたり。入水のことも、かの文にくはしければ、こゝにはいはず。采女の社は、街道の左にて、今は町家の右に建てり。社の後に、鳥居の立てるはと問へば、祠を立つる位置の無かりしか



猫が三味線を抱へたり、猿なする事は聞てゐるが、ハテナ虎の綱渡りとは、………なあーに、猿公が朝鮮征伐の餘興に、飼なられたとさ。

ば、かくはしつるなり。池を恨みたれば、かく立てたるなりといふは違へりなど、例の案内者がいふ。さもありなむ。この池の北は、興福寺境内なり。興福寺は、七大寺の一にして、世に、その名高し。この寺の起りし由來を尋ぬれば、天智天皇の御宇、大織冠、鎌足公、山城の、宇治郡、小野の郷に、寺を建てられたり。山階寺といふ。御代變りて、天武天皇の御時、此の寺を大和の、高市郡、飛鳥にうつして、厩坂寺といへり。其の後、和銅三年の頃、この春日の地に移す。淡海公、堂塔を立て、生の子の八十繼ぎ〳〵に至る迄、天皇が朝廷に仕へまつりて、おのが家も、千代万代にとみ榮えよとの、ねぎごとより、興福寺と名づけられたりとぞ。今の興福寺は、即これなり。世に、春日寺ともいふ。藤原氏の、檀那寺なりけり。藤氏の末の世を慮りし事、誠に周到なりといふべし。境内は、四町四方、宗旨は、法相宗なり。建物には、金堂、東金堂、南圓堂、北圓堂、五重の塔、三重の塔などあり。其の外、名のみ殘りて、今無き物多し。凡て、此等の建物は、いとふるくして、皆よくしつらひたり。五重の塔は、高さ十五丈計りあり。昔は、五堂伽藍建ち列りて、いとうるはしかりしかども、火の禍に逢ひてやけうせたれば、そのかみの建物、今は一も殘らずとぞ。現今の建物は、大方五百年前の物なり。其が中にも、いと古く見えしは、北圓堂なり。こは後冷泉天皇の永承の頃、物せしなりといふ。是等の堂塔に安置せる佛像は、皆木像のよし。是のみは、火災に罹らず。そのかみのまゝにして、妙作殊に多しとかや。上代、美術、工藝の、如何ばかり發達せしかを窺ふに足るもの多かるべし。いとまなければ見ずて過ぎぬるこそ、口惜しかりしか。東

金堂の傍に、奈良縣廳あり。九重に匂ひけむ八重櫻は、奈良師範學校の門内にあり。範校は、縣廳の隣なり。

如何に世は移りゆくとも八重ざくら昔ながらになは匂はなむ。あはれ、八重櫻、色は變らず、花はさくとも、世の移りゆくまゝに、かくありはてしこそ、いとつらからめ。そも大輔の靈、いづくにまよふらむ。こゝを去りて、菩提院を弔ふ。興福寺境内の右傍にあり。壁おち、軒かたぶきて、柱も朽ちたれど、修復せず。いたく荒れはてゝ、見るかげもなし。皆かまほしき事あれど、俗説のみなれば、爰には漏しつ。院より一町計りゆけば、大なる朱の鳥居あり。春日神社、一の鳥居なり。まづ目を驚かしては、大鹿、小鹿の群なり。ふり立てたる角は、冬の枯木の如く、はふ蔦のおのがむき／＼こゝかしこの芝生にあさりす。御社までは、皆かくの如し。聞きしに増りて、いと多かり。人馴れたればにや。吾等の左右により來ぬ。いと、らうたし。餅を手に取りて與へ、あるは投げやりてとらするも、一興なり。一の鳥居を打過ぎて、行くての左は、其の名も高き、春日野なり。小女等が袖ふりはへて春日野に若菜つみてしあとはいづこぞ。腰折と、野守が笑ふらむはしらず。

古今叢談

山岡螢雪

(二十六) 八月の異名

舊曆にては、まだ七月のころなれば、殘暑なほやくが如きを、兎角天候不順がちにて、時ならぬ冷氣俄かに催はし、去にし八日は、早や立秋の季節ともなり、桐の一葉も庭に飛びて、秋のきたるを

告げ、咲きみだれたる籬の萩もこぼれて、朝夕の端居やうやく涼しき八月とはなりぬ。

潜確類書曰、　仲秋者日月會于壽星而斗建酉之辰。

晋學志に之を注して、酉は緧、謂く時物皆緧縮するなり。又、緧は修の上聲と云へり。

此の月律を南呂といふ。史記律書に曰く、南呂とは、陽氣の旅して入藏するなり云々と。

禮記曰、　律中南呂。高誘注云、南任也言陽氣內藏陰侶于陽任其成功。

月令廣義曰南任也呂助也言陽氣尙有妊生陰助陽成功也。

白露とは、元、節ありしを、いつしか異名となりたる者にて　月令廣義にいへるやう、

孝經緯云處暑後十五日斗指庚爲白露節言陰氣漸重露凝而白也

と、秋分も、又、同書に、

白露十五日斗指酉爲秋分陰生於午極於亥故酉其中分也仲月之節爲秋分秋爲陰中陰陽適中故晝夜長短亦均焉。

月令に曰く八月を仲秋と爲すと云ひ、纂要には、八月を中商とし、又壯月といふ。されど、爾雅には、八月を壯となす、郭璞が注に、いまだ詳ならずとあり。己もいまだ、其の意義如何をたしかめざるは、はなはだ遺憾なり。竹春は、竹譜に竹は、八月を以て春となす、とあるより起りたるならむ。

筍譜曰、　竹八月謂之小春熱欲去寒欲來氣至而來故曰小春。

苧環に難月とあれども、おそらくは、儺月のあまりにはあらざるか。儺はオニヤラヒと訓む。唐類函に、八月には、乃ち儺して以て、秋氣を達す

云々、と見ゆればあり。
中律といふも、亦、芸環に出でたれど、出處詳かならず。されど、月令に律は南呂に中る、といひ、纂要には、八月中秋亦中商といふ、とあれば、此等を略して、誤り稱たるには、あらざるか。

纂要に、八月亦桂月といふとありて、

王起曇池賦曰、　瀕風已歇桂月初臨云々。

抑、此の月を桂月と呼ぶに至りたるは、詩に謂ふ處の、いとやさしき桂花の咲きにはふ月あればなり。
雁來月および燕去月は、共に月令より出でたるも



夜や更けぬ鰹やの燈火かげ消にて
わが影にさへわかれてしかな
との和歌を以て、いたく寵愛を蒙りても、我は國家の爲に退ければならん。
オヤどこへ………
奈須野。

のにて、すなはち、

仲秋之月鴻雁來又八月燕去月

云。

又、葉月（ハッキ）といへるは、一説に、初月（ハッキ）といふのあやまりにて、雁の初めて來る意より起りたれば、正しくは、初來（ハッキ）と書くべし、といへど、此の月や、粛殺の氣生じて、百卉葉を落す、故に葉落月と云ふを、今略して葉月と稱すともあれば、決して、誤とは、云ふべからず。
新月は、三秋に渡る異名にして、韓退之の新月鎌を磨くに似たりとか、白樂天が

三五夜中新月色。　三千里外胡人心。

なとど吟じたる詩より起りたるは、明かにて、朗詠の註には、新月とは、凡そ三箇月を云ふなり。然れども、三五夜中の詩は、十五夜をさして云ししなり。十二ヶ月の中、八月は、即ち新月なり。十五夜は、東方より出るによりて、新月といひ、微月と同く、三箇月といふ云々と、見えけり。藏玉には、秋風月とも、月見月ともありて、定家卿は、

荻の葉も露ふきみだれ音ぶりや
身にしみそめし秋かぜの月

と、長明法師は、

名にしおはゞ秋のなかばの空晴れて
ひとりことなる月と見るかな

又、待霄とて、彼の盛衰記にみえける、近衛河原の大宮の御所にさむらひける、待ちよひの小侍従が歌に、

まちよひのふけ行く鐘の聲きけば
かへるあしたの鳥はものかは

と、守輝は、

月至㆓中秋㆒未㆑望時。　清光猶帶㆓一分虧㆒。

更に、孫明復は一詩を賦して曰く、

銀河無㆑聲露暗垂。　玉蟾初欲㆑圓時。
情樽素瑟宜㆓先賞㆒。　明夜陰晴未㆑可㆑知。

これ即ち、十四夜の月を賞したるものにして、俗に小望月といふ。易經に、

月幾㆑望。注云、幾近也月近㆑望也十三四日也

とあり。古歌には、なほ、

あすのよひの月をこよひになして見ん
いのちもいらず曇もやせん、

天暦の帝の御製には、今霄の月と遊ばして、

月ごとに見る月なれどこの月の
こよひの月に似る月ぞなき

と、大江匡房卿は、海内都て斯の地に勝る事なし。歳中いまだ此の霄圓なるに若かず。とて、いたく、賞讃せられしこともありき。

説文に、望月は滿なり、日と相望む、乃ち、君に朝するが如しと。釋名には、望は月滿の名なり。日月遙に相望む者なりと云ひ。周禮註に月大なれば十六日望、月小なれば十五日望なり。又、左傳註は、月體光なし、日照を待ちて、而して光生ず。半照は、則ち弦となし、全く照すを乃ち望と成すと云ふ。これ等より、望月、けふの月、十五夜月、三五夜月などの名はおこりたるならんか。

芋明月は、紀事に云へるやう、今夜地下の良賤等も、亦、明月を賞し、各々芋を煮て之を食ふ、故に、世俗芋明月とは稱するなり。又、處によりては、生菼豆を湯煮として喰ひ、或は、團粋をつくり、之れを月見粋といふもあり。

端正月とは、韓昌黎が月の詩に、三秋端正の月今夜東濱に出づといひしより始まり、或は、名月と呼び、名高き月と云ふは、蘇子瞻が詩の、

明月不ㇾ解ㇾ老。　良辰難ㇾ合ㇾ幷。
回顧ニ座上人一。　聚散如ニ流萍一。
嘗聞此霄月。　萬里同ニ陰晴一。

に基き、朱喬年は、

秋雲定何心。　忍ㇾ翳ニ今夕月一。

と、嘆じ。源の朝臣順卿は、

水の面にてる月なみを數ふれば
　こよひぞ秋の最中なりける

と、新勅撰には、又、

かぞへねど秋のなかばぞ知られける
　今霄に似たる月しなければ

十六夜の月といふも、此の月の異名にて、千載集に、

はかなくもわが夜のふけを知らすとて
いざよふ月をまちわたるかな

と、また、源氏夕顔の巻の歌には、

山のはにいざよふ月をいでんかと
まちつゝゐるによぞふけにける

倘、此の異名につきては、いふべきふし少からぬど、餘りくど〳〵しければ、わざと省きぬ。

あはれ、入日の影もいつしか消えて、冴え渡る空に星影寒く、叢に虫の泣く聲も露はしげなる夕まぐれ、サト吹き過ぐる風に、何處ともなく落葉の音の聞えたる、さしも囂しきまでに賑はしき都大路の淋しさ。秋氣骨に入りていと爽かに、品海灣頭縹渺として、よりては砕くる浪の花實に雪より白く、潮水滿うして洗ひ出されたる、一輪の明月、光り冷かにして、彼方に高き、愛宕の峯の松が枝にかゝりては、已が身も俄に輕く、すでに仙境に遊びつゝある心地せられ、如何に心ゆくべきかぎりぞや。

（二十七）　大忘れ

關白豐臣秀次、一日、六角義郷に謂て曰く、人皆、物忘れすることを患ふれど、我は記憶よくして、その患なしと、その時義郷答へけるは、尊命恐くは然らず、秀次曰く、何に依て、その然らざるを知るや、義郷答へて曰く、公位職の重きを以て、天下の蒼生を忘る、是れ猶人の父母をして、その子を忘るゝが如し、物忘れこれより大なるはなしと、秀次大に耻ぢたるも、悔悟の心なくして、遂に敗亡に至りたりといふ。

あはれ人の親たる者、また兄姉たる人、いかでか、わきまへずして、可らむや。

衝口漫言（三）

白松園主人

○魚目燕石

韓文にいはく、裹二燕石一而履二玄圃一、帶二魚目一而游二漲海一、祇取二誹耳。云々玄圃漲海は玉の多き處をいふなり。その處に、石や魚の目の如き者を、玉によそほひて持て行くとも、何の甲斐かあらむ、といふ事をたとへしなり。社會複雜に、人事多端なるに從ひ、單純にして眞目面なるは、却りて、世間むきのせぬ者と見え、當時は何事にまれ、何物にまれ、魚目燕石的の者ならねば、あまり多數の歡迎を受けぬが常なる者の如し。余が幼時、嘗て父の語りけるは、此頃の書籍は、皆表裝のみ綺麗にして、表紙の美しき事は、むかしの書や、まことに顏色なかるべし。されども、一たびその內容を瞥見する時は、三文の價値だになき者いと多かり。むかしの書は之に異り。表紙はまことに疎末なれども、その內容のめでたきを競ひたりき。また、父の書籍を手にするや、先づ、其の表紙なる書名を熟視し、次にその序文を視るを常とせり。之れにて、その力の槪を知らるればなり。故に、拙しと見る時は、そのまゝうち捨てゝ、一字一句も讀むことなかりき。之れ所謂、名は實の賓也、の主意より然りし物ならむ。嗚呼方今紛々として、續出する諸種の書を見るべし。先づ、皇張誇大なる廣告をふりまはし、次に表裝の、いかにせば時好に適するかを考案し、その主たる內容文字の精神に至りては、往々最後の手段として、深く推究せざる者多し。甚しきに至りては、書名のみ、いかめしく、いかにも、大研究のものとに成りたる、大著述かの如くに裝ひ、廣告を利用して、あるか

ぎりの法螺を吹き立て、遠地に在る讀書家を瞞着せんと謀る者、幾百千なるを知らず。或は書名を改めて、出版するあり。或は古人を著書を編纂し、自分の新著の如き名に改めて、出版するあり。いかに射利のためにするとはいへ、彼の魚目燕石にもまさりて、淺ましき事かな。たゞ、書籍の表裝を見ても、社會人心の趨向を察知すべし、といふべきにや。

○師範者の資格

山崎闇齋、人に接し書生を率ゐる事、極めて嚴正なり。されば門生の、毎に翁の許より歸るさに、美女にあへる時、或は娼家俳優の肆を過ぎて、心動き情移らんとする時など、冥目一番する時は、忽ち、翁の面貌咫尺の間にある心地して、そゞろに畏敬の念を生じ、敢て心の移らざるに至りしとぞ。（先達遺事）

噫、教育家たる者、須く此の處に留意せよ。道に教師にあへど、顔をそむけて知らざる者の如く、卒業さへすれば、忽ち路傍の人なり。教育は活物なり、教育は技術を估る手品師に非ず、教育は鸚鵡にも非ず、蓄音器にも非ず。抑も一片の免許狀をもて唯一の標榜とするは、教育者の資格に非ず。

○仁齋

人材教育につきて妙を得たるは、伊藤仁齋に越ゆる者なし。人物の溫厚なると、學問の豐富なるとは、その子東涯も父に等しかるべし。否、博學の點に至りては、父にも越えたりしなるべし。されども、教育に於ては、父に及ばざりき。或人の仁齋にあひたりし者の曰く「仁齋は何となく一所に居りたき人なり。されども、大山の如くにて、中中動かしがたき人と、思はるゝなり」云々、先天的に、師表家の資格を具へし者と思はる。

○春蘭秋菊

春蘭秋菊倶に廢すべからず、とはそれ仁齋東涯父子の云ひか。二子が教育學術界に貢献せしことは、喋々せざるべし。而して東涯の如きは、口訥にして、言語澁滯、加ふるに音聲甚だ低く、その門前に桶屋ありて、其の槌を振ふおと、常に講義の聲を壓して聞えず、書生も大に困りしとぞ。その上、門生の意見を叩く者あれど、只默然として良否を云はざりき。此の如くなるにも係はらず、日夜勵精して、年年出す所の著述により、東西相應じて、その學問文章を喧傳すると共に、其の人物の謹厚なるを想望して止まず。敵も味方も、實に一代の儒宗として推服したりき。即ち東涯が當の敵と目指されたる、徂徠の門生菅麟嶼の如きは、遂に笈を負ひて之に降り、同じく徂徠門の服部南郭の如きは、屢々東涯が學問のその父にも倍せるよしを説き、此の人の如く、學問のあつき人は、決して此の以後もあるべからずと、くりかへし賞せしとぞ。未だ一見せざる人だに、此の如くなりしは、皆著書によりて知られたるなり。方今書肆の店前に充溢せる新刊の著書、果して社會を風靡し、人心を歸向せしむるに足る者ありやいかに、著書は以て見るに足らず、講義は以て聞くに足らず、趣味もなく益もなき教育、また以て學者先生とするに足るか。



コレハ動物園か大蛇が居ろ、否々長曾我部の旗下、俗に蛇取りの大將と聞えたる荒武者、嗚呼誰だらう。

○徂徠才を愛す

徂徠は才を愛する事、甚しかりき。故に一藝一能の士と雖、賞揚して捨てず。水足平之進と云ふ人、十六歳の時、書牘を徂徠に送りし時、徂徠之を見て、悦ぶこと大方ならず。折柄竹溪といふ門生の來りけるに、水足の事を云ひ出して、さても珍らしき者なり。大事の物なればとて、其文を取り出で見せられたるに、文字にも顛倒ありと云ひしかば、徂徠色を變じて、左樣なる事を云ふな。顛倒などは年のゆかぬゆゑ、あるはずのこと也。それが何の妨になるべき。此の見識の勝れたる、誰か立ちおよぶべき、とてくりかへし〳〵、ほめられたりとあり。徂徠の賞する所は見識にあり。實に字句の末に跼蹐する群少輩が、明の及ばぬ所といふべし。まこと徂徠は、才を愛して人を捨てず。故にその門下多く豪傑の士を出して、大に徠派の學を鼓吹せり。

○育英之術

正徳享保の頃、育英に力を盡したるは順庵木下先生に及ぶ者なし。濟々たる多士、木門より輩出して、學問文章を以て海内に鳴る者、枚擧に遑あらざりき。山崎闇齋も、亦、一世の豪傑なれども、門規嚴正にして、或は酷烈に過ぎたり。故に良知良能の發達を抑制して、獨おのれが思想の一律に羈束せんとせしかば、後年入レ室操レ戈ものも多く、忠臣の希望は變じて、叛旗を飜すに過ぎざりき。之れ仁齋徂徠等に、若かざる所なり。徂徠門下の翹足なる服部南郭曾て云へる事あり「育才あまりに、世話やきたるは、あしかるべし。あるまゝに精出させて、ひとり進むやうにしてよかるべし」云々(文會雜記)併しながら教育の手ごゝろは、まことに難し。徂徠が放任も、長ずる所あり、闇齋が激

勵も長ずる所あり。いづれも凡人の規範たらざるはなし。

○服部南郭

湯淺常山は、南郭の門人なり。それが掲ける文會雜記に曰く「南郭はもと歌人なり。歌と書との藝を以て、故甲斐侯吉保に仕へられたり。それより詩を學び文をかきて、徠翁に從ひたまへり。それゆゑ和書は、よくよみたる人なり。」故あるかな、南郭は加茂眞淵と親交ありしこと。當時詩文に妙を得たるは、此の人に及ぶ者なく、その師徂徠同窓春臺の如きも、深く之に推服したりき。されば、文墨に遊ぶ者、或は南郭に逢ひぬ或は南郭に褒められぬ、など云ひて人に誇る者さへあり。長ずる所此の如くなれど、溫厚謙讓人と爭はざる君子人なりしとぞ。

○金華藏書を要せず

徂徠門下の高足たる、平野金華は左傳、檀弓、莊子、通鑑、など拔書したるを、少しばかり持ちたり。外に書は一卷もなし。常に右の抄出の書を見て、文をかきたり。人に對ひても、吾學問はこれのみなりと云へり。擁書萬卷を誇るとも、胸中に一卷なき人あり。金華の言に恥づるなきか。但し徂徠社中の人、放蕩家多し。由來徂徠は、長を揚げて短を咎めず、金華も放蕩家の一人なり。故に恐らくは、書籍は悉く質屋の庫にをさめられしならん。之れ但し金華の豫め覺悟する所なり。嗚呼趙々たる千里の駒は、野夫をして御せしむ可らず。

（次號續出）

夏山の陰なしげみや玉ほこの
道ゆく人もたちとまるらむ

紀貫之



教の庭

八月廿日兼題

暁虫

天　鹿兒島市藥師町十五番戸　川畑常子

きぬ〳〵のつゆもおきそふ袖かきに
　また夜をのこすむしのこゑかな

評に日、あるか中にも籬垣の虫の、音わきて、あはれ深くきこえはへり。

地　東京市本郷區湯島天神町三ノ三　篠田圓子

をとめ子がねくたれ髪にさすくしの
　わかつきさむきむしのこゑかな

評に日、優調にして、趣向おもしろし。

人　東京市四ッ谷區元鮫ヶ橋五十八番地　雨森つる子

ちぎりおきしひとわりけにもつゆしげき
　わかつきかけてまつむしのなく

評に日、人まつむしの聲きゝすてかたし。

秀逸

肥後　佐々有鄰子

わかつきの露をかざしてくつわむし
　ひくまのはらにあきしきるなり

○　京都　今西綱子

ありわけの月はうすれてわかにはの
　しはふにすだくむしのこゑかな

○　武藏　横田秋子

むしの音はまた夜ふかきに秋のゝは
　わかつきつゆやおきわたすらん

○　東京　長庵菊枝子

草むらにつきはやとりてきり〳〵す
　なく音もすゝしわかつきのそら

○　東京　池知すみ子

きみをまつ虫のなきゝてありあけの
　つきにあはれそいとゝまされる

○　東京　安居綾子

あかつきにちくさのつゆもふかくさの
　さとわけゆけはむしそなくなる　肥後　千々波橋子

○

秋かせやよさむるらんはたおりの
　あかつきかけてなきしきるなり　肥後　坂本豊子

○

白つゆのおきあかしたるむしのねは
　ねさめのとこのともとなりつゝ　東京　櫻井方子

○

あけ移るのへの千くさのさま〱に
　きゝのよろしきむしのこゑかな　東京　當間すみの子

○

山てらのかねのひゝきにねざめして
　むしの音きかぬあかつきもなし

(以下原稿到着順)

夢さめてきくむしのねもたえ〱に
　まくらにひゝくあかつきのかね　河田いし子

なかきよもなほあかしとやあかつきの
　かねにきそへるこほろきのこゑ　坂本てい子

月おちてまたほのくらきあけかたに　金澤文子

くさむらの露ないのちとなくむしの
　くろあきつけてむしそなくなる　德永萬壽子

れさめしていとゝさひしき曉つきの
　まくらとひよろきりきりすかな　德永廣子

あかつきの露けきにはのつきかけに
　ふりいてゝなくすゝむしのこゑ　德永識子

秋ふかみさひしかりけりれやのとな
　おとつれてなくあかつきのむし　澤田春子

あかつきのれさめさひしき窓のとに
　こゑふりたてゝすゝむしのなく　澤田靜尖子

あかつきの露のなとこにこゑたてゝ
　たれをまつむしなきしきるらん　佐々小琴子

秋の夜はまたあけはてぬにはのおもに
　しのひれたつるまつむしのこゑ　濱口貞子

音にたてゝはたおろむしも秋ふかみ
　あかつきさむきつゆになくなり　山田米子

思ひなきわれもあはれとよもすから
　きゝあかしけりまつむしのこゑ　山田いれ子

よひのまの人まつむしのこゑたえて
　あかつきちかくこほろきのなく　田代艶子

さと〱のあかつき近くれやの戸な
　いつれはむしのこゑそきほへる　田代綾子

あかつきのれさめにきけはなく虫の
　こゑよわりゆくあきそかなしき　吹田たけ子

いる月をなれも惜しむかきりきりす
　あかつきかけてなほも鳴くらむ　稲原道子

露しけきあきのよころたくさの戸に
きみまつむしのなきあかしつゝ　重田きよ子

くさたらぬそてにも露のおきそひて
あかつきさむきむしのこゑかな　永井さい子

道あけのつきのひかりのうするゝを
おのかゝきりとむしのなくらむ　野中あさ子

あきの野の夜風身にしむあけかたに
よわりもゆくかこほろきのこゑ　川中子てつ子

ありあけのかけふむ道のくさむらに
あはれをそへてむしのなくなり　横田音羽子

よひの間にきゝしより猶あはれなり
あかつきかけてよはるむしの音　財田とみ子

なきたてし聲なかりけんまつ虫の
うらみにほそるあかつきのこゑ　井川澄子

尾はなはら虫の鳴く音もたえ〳〵に
つきかたふきぬあかつきのそら　岡山民子

月ふけてよさむをわふるむしの音に
あはれをそふるあかつきのかね　源たけ子

つきおちてあはれも深しよもすから
ちきりしひとをまつむしのこゑ　横井幸子

やちくさの葉末のつゆにつきおちて
むしの音かなしあかつきのころ　村瀬花子

よもすから神のみけしやおろならし
あけかたさむきはたおりのこゑ　岡山雪子

月かけてかせそみにしむあかつきの
いとゝつゆけきむしのこゑかな　横井あや子

ちきりにし人まつむしのまとちかく　林環子

あかつきかけてなきしきるらむ

おきあまるあかつき露をわひしらに
よもきかもとにむしそなくなる　穂積稔子

人しけきよひにはましてあかつきに
きくむしの聲そあはれなりける　吾妻ちか子

荻の葉の音にはなれてきり〳〵す
あかつきかけてなきしきるなり　内田とく子

なくむしの聲たえ〳〵になりにけり
あかつきちかきつゆのさむしろ　戸塚鉄子

あかつきの夢のまくらをそはたてゝ
さま〳〵になくむしをきくかな　川村松子

あかつきの小くらき庭のくさむらは
ゆふへのまゝにむしそなくなり　杉浦いと子

月かけののこれるにはのきり〳〵す
いまはまくらのしたにきくなり　後藤のぶ子

あかつきの鐘に寝さめて出て見れは
かき根わたりにこほろきそなく　下平かほる子

きぬたうつ音にきほひてきり〳〵す
あかつきかけてなきしきるなり　青木たま子

有あけのつきかけうすくなるみちに
たかゆくこまのすゝむしのこゑ　安居鏡子

あかつきの露のそこひにとこしめて
こゑをかきりにまつむしのなく　安居美志子

ころといひし時もすきぬとまつむしの
あかつきかたに音をやなくらむ　岸山あや子

あけくれにしはしたゆたふ月かけを
たのみてやなくむしのこゑ〳〵　岸山ふみ子

歌の庭

きぬ〲の袖もつゆけきあかつきは
こゝろにとまるむしのこゑかな　吾妻とみ子

朝ぼらけはなのゝつゆにすゞしさの
こゑもこぼれてこほろぎのなく　桝田益子

なはかりは庭のときはのまつむしも
こゑよわりゆくあかつきのしも　椎野秀子

なかきよのねさめにきけはきり〲す
あかつきかけてなきまさるかな　椎野ぬき子

露ふかきあかつきかたのさむしろに
こゑよわりゆくにはのまつむし　椎野しげ子

さやかにもよひにふり出し鈴むしの
おとかすかなるあかつきのころ　中舘やう子

こぬ人をなかきよすからまつむしの
うらみはてたるあかつきのこゑ　山本梓子

ありあけの月もしつけきくさむらに
たれまつむしのなきしむるらむ　石井操子

虫のねはふけゆくつきになきよわる
ねさめさびしきあかつきのころ　武田艶子

虫のねのよわりもゆくか夜もすから
なきあかしたるあかつきのそら　鏡山増代子

來し秋のあはれをそへてあかつきの
つゆにぬれつゝむしそなくなる　小池粗子

あかつきのまくらにちかき虫のこゑ
いとおもしろくきこえけるかな　佐々値賀子

あかつきの月のひかりのうすらけは
のへのむしのねすみわたるなり　佐藤玄子

もの思ふ身になきかせそこほろぎの
しもによわれるあかつきのこゑ　戸賀崎治子

ものおもへはねさめさびしきあかつきに
あはれをそへてむしのなくなり　梯竹子

山のはにふけゆくつきのかけおちて
むしの音すめるあかつきのころ　衣笠澄子

あかつきのこのあけくれに聲たかく
なくむしの音そさびしかりける　吉澤よし子

さしくしのあかつきかたの月ふけて
むしの音たかしにはのくさむら　近澤和子

あけぬるか千草のもとになくむしの
こゑもほそりていとゝさびしき　荒野たに子

しらつゆのおくゝさむらになく虫の
あかつきかたのこゑのさびしさ　安藤ひさ子

松かせのおとにまかひてなくむしの
こゑうらかなしあかつきのころ　國府田はる子

山てらのかわのひゝきにゆめさめて
ひとまつむしのこゑをきくかな　會田まつ子

あかつきや近つきぬらしくさむらに
ひくしほたかくむしのこゑする　上平よし子

しのゝめの露ふみわけてゆくたひを
なくさめかほにむしそなくなる　瀬戸ゑい子

月かけはにしにかたふくあかつきに
むしの音のみそたかくきこゆる　村上操子

老の身のねさめにきけはあかつきの
むしのなくねもあはれなりけり　田村多豆子

あかつきにきけはをかしき虫のねの
なにゆふくれはかなしかりけむ　上原のぶ子

八月廿日兼題

蓮

地　大阪市東區平野町三丁目拾一番屋敷　桝田益子

某の聖は、何かは露をと、其心の清きをたゝへ、それがしの姫は、是の糸もて、佛のかたを　あやに織りなし尊み給ひ、また、唐のうた人も、いみじう愛で、花の君てふ名をおふせしとぞ。蓮は、花さへ香さへ、いひしらずあはれなる物にしあれば、世の人の、はやすもうべなりけり。葉のさゝやかに、つぶらかなるは、木のめにる、むろにしき渡したる、わらふだのやうにて、大きやかにひろでりたるは、ほひりの壁にかけたる竹のを笠に似たりけり。咲きほこれる花の色香は、哥詠むみやびをは、心をおきて、しら露の玉の言の葉むすふべく、唐哥、好める博士は、にぬりのを舟浮べて、からをとめどもに、折らせまほしく思ふなるべし。日の入る國人は、九の品の、玉のうてなと仰ぎ、日のいづる、こゝにありても、御寺の壯嚴は、更らなり、法の師の衣のあやと匂はせ、偕は、おのがじし、かなしき遠つおや、めぐはしき妻子等の、玉まつりのあか棚に、供へのしろとし、散りての後も、其の臺(ウテナ)を、木のめにる釜の處ものとし、根は、をしものゝそへ葉とすなど、卷葉の、つひに、世に廣ごりて、もてはやさるゝは、花の清きと、匂ひの香ばしきによるなるべし。かゝるあはれなるも、とつ國の、種なればにや、ちはやふる神の御前にさむらはぬは、かの、吉祥天女も、猶、はうけづきぬとか、いふたぐひにて。ゆふべ涼しき垣ねの花ならねど、げに、口惜の契りとや、蓮はかこつらんかし。そははとまれかくまれ、上なき玉のうてな、花の君ともて興ぜらるゝは、此上なきめいぼくにて、露の光りとたゝへつべくなん。

玉かとそみゆる浮葉の白露は
　　きよき蓮のこゝろなるらん

人　東京深川大住町四　中村伊曾子

秋風の吹きそむるにも、程遠からねど、白金も黄金も、流るゝばかりに、たへがたき、今日此頃、たゞ、人々の心をいともたのしく感ぜしむるは、この蓮になむ。其の身は、濁れる水に生ひ出でながら、いつも清き心もて、花は淡紅或は眞白にうるはしく、池の面は月も宿らぬ程、うき葉まき葉

の重なりあふ中に、おの〳〵咲きにほふすがたは、えもいはずうつくしうぞ有りける。殊に、葉におきそふつゆこそすゞしけれ。玉とも見ゆるすがたして、風にみだれまろぶけはひをかしく、自づから身にしむばかり涼し。いざよひの頃、たかどのなどにのぼり、つま琴かきならしつゝ、ながめたらむには、いとゞ香りゆかしく、涼しさいまさりて、誠に、此のよのものとも見えずなむ。あはれ、蓮よ。古より歌にも文にも稱へられ、今なかはらず人々にめでられつゝ、すこしもほこりげなくかはらぬすがたして、誠に、四季折々に咲き出る花多きがなかにて、いとも、めでたきものにこそ。

（以下原稿到着順）

佐々有璘子

むかしの人の、めでたりしもむべなり。はしり出の池の鏡も、朝日影に匂ひうるはしくきらめきわたる。浮葉巻葉の露にかなりあひぬる。蓮の花は、にもいはれぬすがたにて、宮人のうす紅の衣きよそひてたてるがごとく、または、淑女の心のごと、濁にしまぬゆかしき色は、いかにたとへん言の葉なけれど、池の汀を逍遙して、

色も香もたとへんことばなみの上の
蓮の花こそいまさかりなれ

福原薫子

ひま洩る風の打薫りくるに、いもねられざるまゝ、暁の程まち受けて、朝戸押し明くれば、うべなりや。池の蓮の三つ四つ二つ咲きそめしなりけりやなら庭におり立てば一際袖に打ち香ひていと床し。葉毎に置ける露のしら玉、朝風にゆらぎて、なり〳〵こぼれ落つるなど、いとゞすが〳〵しう、見るから、よべの暑さも忘られぬ。あゝ、蓮や。濁り江に、育ちて、其の濁りにしまぬなれが心のけだかさ。實に、花の君子と稱へられしもことわりぞと、一入涼しさなおぼえてなん。

記者曰はく、淑女が、ねどころへかへるとて、或は三或は四、或は又、二とおひ〳〵に群りかへる際のあはれを、さながら物に記しとゞめしより、物を數をならべいはむとする時には、まづこの、三四二を用ゐるが、いと多くなりぬ。古人のいひたることは拾ひ用ゐられずといふこともなけれど、總べて、古より人に知られたる（知られぬものも）語句を用ゐむとするには、もとの意を損せざることゝ、其の古人の努力を沒せざることに意を注がざるべからず。もし、これに注意せざる時は、おのれの德をもきずつけ、また、古人の德を損するに至るべし。夕鳥などの或は二つ或は四つ或は三つと思ひ〳〵につれだちかへるなどにこそいとをかしうもあれ。蓮の花のさきそめしにはいかで。よく原意を稽へ、ふさはしき方に用ゐらるべし。このこと、しばしば、種々なる人によりて用ゐらるれば、注意するなり。

金津文子

見渡すかぎり、木々の緑り葉茂り合ひて日かげなもらさず。春花にいとひし風さへ、いとゞ嬉しき心地せらるゝ此の頃、ことに、梢そよぐ毎にはら〳〵と朝露のちる。心地よげに朝まだきより起き出でゝ、蓮花の開くる音きかんとて、我が伏屋の後の方なる、

田歩のあぜ道をたどりつ行く程に、草葉の露のあたかも白玉のとぶが如く、ばら〳〵と亂れて、我がすそ道などに付く冷かさ、いと心地よく面白し。夜の中にあぜに上りて、雨を待ちにし蛙の、已が行く足音におどろかされて、田の中にあはてとび入るもおかし。来し事また程遠からざるに、一むら木立しげる森かげに、開きおける蓮池あり。あまり多くもあらされど、白き紙もて作れる珠の如き花數十本、緑りなす平らたき葉の上五六寸をのび出でつつあり。花はよき音して一輪つゝ開きぬ。開く毎に、花の含める露亂れて、葉の上に落ちては、白玉いくつとなくなりまろびては一つとなり、ちりまろびては一つとなる。開く花はよき音して、丸き形はくづれて蜂巣の如き形となる。中には、黄金色なるシベいく千すじとなく見ゆていと美はし。あゝ佛は極樂淨土のれん花の上にますと。かくの如きにごり江の中にさのび出でし蓮にして、かくの如くしゆん白なるうるはしき花をひらくなり。人も又、賤が伏屋に生るとも、學びてうますたゆまずば、いかでか、此の蓮の如く美はしき花の咲く事のなからずやは。

にごり江の水の中よりおひ出てゝ
ま白に咲けるはすの花かな

財田とみ子

きに吹きくる朝風の、常ならず打薫れるに、いぶかしみつゝ、れやの戸おしひらけば、待ちに待ちつる池の蓮の、二つ三つ開きそめたるなりけり。うれしくて、笑みつゝ庭におりたてば、高うのびたる廣葉の露こぼれて、浮葉の玉となるもをかしきに、今咲き出づるにや、二つ三つ音の聞ゆる、殊にをかし。あゝ、かゝる泥ふかき池の中に生ひながら、濁にしまぬけだかさよなど、ひとりごつ折しも、清らかなる花の香を吹くかぜ袖に通ひて、身さへこころさへすが〳〵しうなる様、いひしらず心地よくやなむ。

林環子

あはれ世に蓮ばかりめでたきはあらじ。そが花の、あるは紅なる、あるは白きなんど、とり〳〵にうるはしきに、おりから風さとふきて、花をゆらくまゝに、かくはしき香の身にしみて、葉上におけるぬきとめぬ白玉は、白露となりておちゆくさまなど、いかでか、他の花のこれにたくふべき。げに、古人の、こを佛のみさにたとへたる、いと理ありとぞ覺ゆ侍る。さるに、かくらうたけなる花の、いとけがれに〳〵し濁江より生ひ出るぞ、たれか、こをまことゝおもふべき。あはれ、大方の世のひと、おのがあたりのありさまに身を安んじ、なすこともなく一生を終るものよ。この蓮を見て、鑑とするところあれ。と蓮を見ておもふことなかくなむ。

今西絹子

すぎつる文月の中頃より、あつさは、いとゞたへがたう苦しうて、蟬の聲さへかしましく、何よりたのしく友とする文鑑すら、ゐよまずなりぬ。たゞ、そゞろに一日ひとひとくらしけり。折しも、夏を忘れぬ花はちす、庭表の池におひたちて、しのゝめつぐる有明の鐘のひゞきともろともに、音おもしろく咲きにけり。我れ、まだ、始めの事なれば、其の何物の音なるや、步路をたどる時にもあり、なにやいんでおとみさこ、枕おしのけ床を出て、折戸おしあけながむれば、先つ頃より、けふ明日と待ちにこがれしはちす葉の、泥の中より、いさぎよく清き心を、桃色に装ふ姿やみやびなるけはひにいとにたまとられ、しばしの程はたゝずみて、目たたきもせずほめはやせり。げにや、花は濁あれど、不思儀にも、朝霧ふかき其中に異なる姿に身を裝ひ、葉の姿のつゆを玉と見せ、優にやさしきかほもち、かなりゆかしくかんばしく、別けて又あは、濁に打ち勝ちて、人の鏡となすものは、此の花をおきて

りや、我、此の花の咲きてより、朝毎々にまちおきて、清き心に身を閉め、蓮池近く、文机のちり打ちはらひて、心地よく、あれやこれやの道しらべ、昨日に今日と暮す日も、朝な夕なにたのしみて、いそしみつとめおもしろく、はた又云はれぬ事になん。

德永廣子

世には、きよく直なるを、もとも貴び、行道の必要なることをなしらぬ者なきに、其の人すら、かゝる直道を守るものは、もとも少なき世に、草花にて、かゝる直道を守れる蓮こそ、誠の貴ものとおもはるれ。某氏の庭の、いとさやけき池水に、かげさへうつり、濁にしまぬ蓮の、水を心としてうるはしく、花ひらきける其いゆかしさ。風にそよぐも、またいとをかし。かゝるにほひに心うつして池畔をめぐるも、いくたびかは。花にして、人のかく感賞びていとめでしのばるゝは、この蓮にこそありけれ。

梯竹子

どろふかき池に生ひ立ちながら、其の水のにごりにもしまぬ、この蓮のすがた、誰かはいさぎよしと思はざるべき。實に、みどりの廣葉のしげりあへる中に、いみじう美しき花は咲きいでたるさま、はらいはれず。世に、かばかりめでたきものあらんやは。されば、御佛のうへなう愛でたまふも、げにうべある事になむ。あはれ、かゝる清き心なればこそ、おきゐる露もかくうるはしう玉とは見ゆるならめと思へば、いとも〱ゆかしう、ながむるまゝに、おのづから、我が心さへもすが〱しうなりもてゆきて、さながら、此の世の外のこゝちせられてなむ。

吉澤よし子

泥の中よりぬけ出でゝ、にごりにしまぬ清き姿、げに、花中の君子と云ふも、ことわりなりや。ことに、朝とく、みどりの葉に、水銀の玉のやうなるつゆをのせ、眞白き花と色をきそへて、朝日の光をうけつゝあるなど、中々に、又無き嬉しきながめになん。やがて、其の根はいと長く、此の汚びを遁れんと、嬉しきぜんに遁るぞいとも嬉しき。あはれ、人と生れし身の、此の蓮に及ばでやはあるべき。汚れたる世に身を處くとも、汚れにしまで、己がつとめを全うし、此の蓮のごと、願はずとても敬はれ、はた愛せられ、世の手本ともならでは、人と生れし甲斐なかるらん。

國府田はる子

草といへば、いとひろき名なれど其の中には、貴きもあれば、また、賤しきもあり。己が淺智にて、あれこれといふはをこがましけれど、蓮は貴き草の一として、あへて、恥づかしかるまじくなむ。

濁りにそまぬいさぎよき其こゝろは、葉末の露をして玉とまがはせ、咲く花の姿にやさしく、どこやらに、あなどりがたき威をそなへ、かゝる美しき花も、後には散りて僅かの名殘をとゞめて結ぶ實の、其の風味、さすがに香ぐはしく、人々のほむるもうべなり。蓮の貴きことは、これらのみにとゞまらずして、其の根の世に益あることは、中には、拙き筆の及ぶべくもあらず。これら、みな、蓮の貴きところなり。

小川つる子

ひとの目に、美しとよろこび、心にめでたしと思ひ出づるはいと多かれど、蓮にまさるものはあらじかし。あらがねの土もさけむばかり、そよふく風の音もせぬ夏の盛りに、すみ行く水中に、時を得顔に咲き匂ふ。いひしらずめでたきものなり。蓮は、花のうつくしきのみならず、朝な夕なに、葉の頂きに玉なす露も、いとうるはしきものなり。

去年にかありけむ。朝風のそよふき渡る日、向ひの八枝子の君は、今より名のみを忍ぶ不忍の池へ行かばやとのたまひぬ。己れも、

かれて一度はと思ひ居りし事なれば、うれしくて、いそぎ支度とゝのへ、家を出で、池の邊りにと歩みをはこばせしに、定めの所へ出でぬ。人の行きゝのしげく、いづれも、足をとゞめざるはなく、あだかも、辨財天のみやしろの、水にうかぶ如くに見ゆ、池の中は咲き匂ふはちす花は、白あり、あるはうすべにありて、うるはしく、さながら、久方のみそらに浮ふ白雲かとうたがはれたり。況て、はちす葉の漂ふもとには、しらつゆをひきたるがごとし。また、胡蝶などの、夏しりがへに、はちす花の匂へる中を遊びくるふか、みやびやかなるけはひにて、其の風情ゐにもかゝまほし。歌にもよみたしとかこちつゝ、しばし打ちながめ、をさまる御代をよろこびて、風のまに／＼かをる香におゝられて、家路につきぬ。實にねせうた一だによみ得ぬ身のかなしくて、むなしくかへりぬるが、花に向ひ、いと恥かしうてなむ。されど、都にかゝるながめのあるぞとはと、いとうれしくて、木立物ふりたるひなのなつかしさを打ち忘れたり。今日より、たのしくゆかしかりし日は、またなくと打ち思へるまゝを記しつけつ。

宮下武子

はちすはなは、佛のものとなしつるそたかなつけそめけむ。にごりにしまぬそいとおかしき。此の頃我が庭の蓮の花は、こきうすき、所せう咲て、ふきくる風の涼しさのいやましに、にほひゆかしく打送りくるこそいとおかしけれ。かくするうちに、東の山より月いてきて、池の底にそうつりける。葉ことにおきつる露の白玉は、風にゆられてこほれもあへぬ涼しさそ、いとゞうれしかりけれ。又、月の水底にうつるも、にもいはす。はちすはのうら葉をみせてうつるも、また、おかしさかゝるうちに、たまあへる友訪ひきて、互に、蓮につきての古事など語らふほどに、吹來る風絕ねす薫りて、一際ゆかしくて、うき世の事は皆忘られて、唯、天上にあるが如く覺ゆ。とかくするうちに、夜もやう／＼ふけ行きて、蓮の花のひらく音におどろきて、友は思ひたちて、さらばといひて別れをつけ、心遣して家にかへりけり。我は、急ぎて机にむかひ、このかのうせぬまに、かくしるしておきつるになん。

地久節といふ五字を句の上におきて

坂本豐子

千代かけてきさらき頃のうめ花
　せきやの軒のつきに匂へり

佐々富枝子

千五百秋きくの色々うちかなり
　せり川の邊のつゆそきらめく

佐々有鄰子

千歳ときみをことほきうきいてゝ
　瀬に鶴なとりつる聲にまふ

佐々小琴子

千歳川きしの司にうちはもちて
　瀬にすみわたるつきを見るかな



なぞ〳〵

赤堀又次郎

「なぞ」といふ一つのたはむれ、いづれのころよりかはじまりけん、今も世に行はれて、つれ〴〵のなぐさめにすることなり、近きころは、「なぞなぞばうず」などいひて、之をとくことに巧なるものやありしとか、さてこの「なぞ」といふことばの「な」は、事のさだならぬをあらはし、「ぞ」はとひかくるてにをはにて、「何事か」いふと同じ意味の何なるが、轉じて、一の名詞となりたるなり。

中むかしの物語などに「なぞあはせ」をなしたる事、みえたれど、その、今につたはれるものは多からず。まれ〳〵につたはりたるをみるに、今の「なぞ」とは、かたちをことにして、今の「あてもの」に似たり。されど、このしかたは、今の「あてもの」、「なぞ」などよりもはるかに上品にして、かつたくみなるものなり。

藤原氏の盛なりしころは、歌合とて二首の歌を左右にたて、其のよしあしを評して、勝負をわかちしこと、盛に行はれ、「なぞ〳〵」も亦、歌合の一種として、もてはやされしなり。されば「なぞ」の題を出し、之をきくかたは、答を歌によみて出したるなり。そのころの人は、歌をよむことはやくして、かの小式部の内侍が、まだ幼きころにても、ことばかけたる人の袖をとらへて、其のかけられたる詞の、をはるかをはらぬに、たちまち「大江山」なとうちいだしたる類はめづらしからぬこと

なり。今は、一夜百首とて、一夜のうちに、百首の歌をよむを、口どき事とすれど、そのころの人は、金椀をチンとたゝきその音やまざるうちによみ、或は紙燭とて、今のらうそくに似たるともしびの一寸もゆる間に、十數首よみなどしけるとか、されば一方より「なぞ」云々ととひかけられ、やがて、答を歌によみいでゝ、とくも、かの「なぞばうず」が難題をうたうたひつゝとく類なるべし。天元四年四月廿六日、小野宮右衛門督齋敏の家にて、なしたる「なぞあはせ」をみるに、をかしき事多し。その一つ二つをつぎに紹介すべし。

問「なぞ、このごろにふるめかしき香するもの、

答「いそのかみふるめかしき香するものは、花橘のにほひなるべし。

五月まつ花橘の香をかげぞ、昔の人の袖の香ぞするとかいふ、古歌のこゝろをとりたるなど、巧なるもいといふべし。

問「なぞ名を名のり、人だのめなるもの

答「たのめつゝなつく夜もなし、ほとゝぎすかたらふことのあらばこそあらめ

ほとゝぎすのなくな名のるといふによりて、かくいひたるなり。人の名を名のるものは、親しくわひて話をする事もあれど、ほとゝぎすは、名のれども、話をなす事はかなはぬものなり。

問「なぞはきものならべたるいのりの師

答「はきものを、二つならべてつとめたし、くつくつぼうしいづこなるらむ。

夏の末より秋のはじめになく虫にて、今「つくつくぼうし」といふあり。こを古は「くつくつぼうし」といひたり。故にはきものならべたる祈の師を履履法師とゝきたるなり。法師は祈禱をなすゆゑ「いのりのし」ともいふ。

問、「なぞ、大ぞらにつはもの(兵器)めきたる
答、「弓はりのかたどの月を、山のはに、そらつはものゝいるかとぞみる

弦月を「ゆみはり」といふによりて、大空につはものゝきたるを、月とゝきたるなり。

問、「なぞ、ふつきはわさき、わきはふつきもの
答、「いづれともわきぞかねつる、あすかゞはあつさふさゝのさだめなければ、

これは、古歌に、世の中はなにかつねなる、あすかがはきのふのふちぞけふはせになるといへる歌のこゝろをとりて、ときたるなり。

中古に行はれし「なぞ」はおほよそこの類にて、そのかたちは、たゞ二段よりなりたちて、今のなぞの如く三段よりなりたちたるならねば、簡單なるものなれど、その間も、答も大きにたくみなるものなり。さて、之によりて、勝負をわかちたること常のうたあはせと同じきなり。

玉川に遊びて

鶺鴒女史

文月廿八日、心しれる人々に誘はれ、子等打連れて九人ばかり、玉川に鮎とらんとて出立つ。八時四分、牛込より汽車にのる。ゆく／＼二つ三つの驛を過ぎ、新宿につく。こゝは此處彼處より、行かふ事の乘替場とて、暫時とゞまるまゝに、車の窓より見渡せば、今しも、品川よりつきにし汽車より、一群の美女打つれて急がはしく此方をさして來る。あやし。何地行くらむとながむるに、さゞめきわたりて、我隣れる室に入りぬ。さては我等と同じく鮎とらんとにや。さらば、かくわまたの人々の、むらがりあむには、さきの程も、いかゞ

など語らふうち、車は走りぬ。大久保も過ぎ、中野につきし頃、隣れる室より、相知れる人の我方へ入り來りぬ。彼の新橋の一群の、かしがましういとはしけれど、暫時いこはせてといふ。美女をいとふ心ぞいぶかし。荻窪、吉祥寺、境、國分寺など打過ぎて、九時廿分といふに、我志す立川の驛につきぬ。

いざとて立ち出づれば、思ふにたがはで、彼の人人も、こゝにおりて、われより先に、そこなる車のあるかぎりをつくして馳せ去りぬ。かたへの茶店にいりて、川のさまなど聞くに、主人いと氣の毒げに、今日は、某の銀行のもよほしにて、よべより、こゝはさらなり、近き傍りの村々の、舟車のあるかぎりあつめつゝ、なはたらで、河原に幕うちめぐらして、遊ばんとて、中々のさまなれば、かしこへ至り玉ふもかひなからんと、いふに、い

と本意なくて、

美女にすてられし身のいまさらにわいみん事もせんなし。さらぞ、山野は如何といふに、かしこも、今日は去るやんごとなき御方のわたらせ玉へば、おぼつかなしとこたふ。實に彼等こそ敵なりけれと、一人のいへば、敵にはめぐり遇ひたきものとかやと笑へど、さて行くべき方も知らで、右せむ、かくせむ、などひたひをあつめて、かたらふさまの、あはれとや思ひけむ。そこなる女の、今より國分寺にかへりて、府中に赴き玉はゞ、かしこには、鮎とる便宜も侍らむ、道の程も、府中迄廿五丁、夫より川邊迄一里許なればといふに、力を得て、さらばとて、折しも出る滊車にのりて、聞きしまに〳〵至りつきぬ。

府中のとある宿に入りて、ありし事どもかたりて

たのみ聞えしに、いとようらべなひしかば、心おちゐぬ。やがて、用意よしといふに、いざなはれて、川邊に至れば、いとひろう大きやかなる川の、底すみわたりて、いさごも見えすきたるに、ところ〴〵に州の浮出たる、幾條かに分れて、また一つにあふ流の、早き緩か、さま〴〵なるに、彼方には、小高き岡の、青葉にうづもりたる、そが麓まで、はる〴〵と、見渡すかぎり、たゞこの流れなりけり。げにも、はるけき川のさまかな、そのはゞも、いかばかりならんといへば、かの名高き大井川は、直徑一里とぞいふなる。それにも似ひたるさまなれば、一里ばかりならむと、おしはかりにいふ。こゝは、同じ玉川なれど、立川の邊より、上流にて、川のはゞもひろしとかや、げに打見るかぎりの長閑さには、先のつらかりしもわすられつ。舟さしよするまゝに乘る。こゝは何處ぞと問ふに、多摩村せきどの河原と答ふ。彼方より、一人の男、二羽の鵜を、左右の手にのせて來る。そのあとより、二人の男、いと狭く長き網をたづさへて從ふ。いかにかすらむとながむるに、はるか川上に至りて、彼の網の左右のつまを、一人づつもちて、流のまゝに下る。あとよりかの鵜持たりし男の、網の方へ追ひつゝ下る、そのひまに、鵜のしば〳〵水をくゞりて、魚をあさるさまの、めづらしうをかし。あかずながむるほどに、やうやう見えずなりゆきしころ、かの男は、大なるびくたつさへ來りぬ。さしのぞくに、おびたゞしき鮎なりけり。大なるは六七寸にもあまり、小きも四五寸ばかりあるを、處せくあらぶるに、宿の男の、逸早く、さま〴〵てうじて出す。皆、打よりてあじはふに、たぐふべきかたもなし。都にてはえやすからぬになどかたらふ。さるにても、かの

一群の、獵物やいかにと氣遣しげにいへば、我にはいかでとほこりかにこたふ。

うかれ女が深き情をよそにみて眞のあいにあふぞうれしきなどわらふ。各が〲たふべ終れば、男どちは、釣竿を手にし淺き瀨に立つもあり、或は深におよぐもあり、子供らは、籠もちて、小き魚を追ひありき、或はともづな引あひて、船をおしうごかしつゝ、かぎりなう興ずめり。彼方此方みわたすに、先の鵜の州にをりて、羽ひろげつゝ、いこへるさまを見出して、ほどちかくたちよりつゝ見るに、雄なるは、頭より腹にかけて、いとくろうつやゝかなるが、十年あまり經ぬれども、なほよく魚をあさるとかや。雌の方は、いまだ三年に足らねども、こも、亦よく魚をとるとぞ。羽茶色をおび、つやなくきたなげなり。されば、鳥すら男は女にまされるものぞと、いはるゝも口惜し。かゝる鳥は何地すむらんといへば、このわたりにては、常陸の筑波山に多く棲みて、近きほとりの川に、魚をあさる折ふし、網をはり、もちにて捕ふるなりとぞ。漁につかふ鳥の、山棲ときくもめづらし。嘴のさき少し曲りたるに、一度口に入れし物は、いかにすともはなさず、されば、なれぬうちには、指をかまるゝも、づよくひけば、肉をとられて、骨のみいづるとぞ、今はよく馴れて、黄昏になりぬればはなしおきても、住家へ歸るとかや。魚を喰ふ時も、頭よりのみて、しばしすれば、骨のみ出すとぞ已が餌にとあさりたる魚を、とらるゝ事、いと〱あはれなり。かの男の、再び鵜を取りあぐるまゝに、舟に歸れば、川風心地よう肌をふきて、萬のうさもわすれはてつ。

夏知らぬ多摩の川邊の夕風に
心のちりもはらひぬるかな

日もやゝ西にかたぶきて、家づとの魚もかごにみち〳〵たれば、今はとて、舟を出でつ、稲田にそよぐ夕風に、日ぐらしの聲をあとにしつ、早く〳〵府中のまちに入れば、杉木立いかめしう、神々しき宮居あり。いかなる御靈にやと問ふに、大國魂神社とて、官幣大社なりと答ふ。おりたちて拜みたけれど、われのみならねば、心にまかせで、車の上よりふし拜みぬ。

宿につけば、いといたうかわきを覺ゆるに、氷あまたもち來りしは、天の甘露とやいはまし。浴しはてゝ、又車にのる。夕日のかげをかしう、或ははた、あるは田の面の、さま〴〵なるながめもあかぬに、虫の聲々あはれに、夢路をたどる心地しつゝ、ほどなく國分寺につく。

今宵は陰暦みな月十三夜なりけり。子供らは、滊車の窓より、首さし出し、かの月のあしの早き事滊車よりも先にはしれり。されど、我止まるときは、又とまりて我をまつ事のいぶかしなどつみなげにかたる。隣の室のさわがしきに、ふと心つけば、又もや例の人々なりけり。あい見ん事もと思ひしを、宿世あやしきちぎりありけむなどかたらふうち、やう〳〵家路につきしは、亥の時すぐる頃なりき。

つまこひ（舊體詩）

ゆりのいらつめ

おほやけの　みことかしこみ
梓弓　春のはじめゆ
かりがねの　歸らふころに
たふとき　父母をおき
はしき　妻子をおきて

天さかる　ひなの長路に
五百重山　いゆきこえつゝ
海原を　いゆきわたりて
いにし君　いつきまさむと
をよび折り　かき數へつゝ
朝よひに　吾がまち居れば
月日は　まなく過ぎ行き
ほとゝぎす　聲もとだえて
ほたる火の　かけも消えつゝ
夏の日の　なかばをすぎて
夫の君が　手ゆひの垣に
あさがほの　花ぞさきたる
めでましゝ　池のみぎはに
はちすの　はなぞにほへる
はちすの　花はにほへど
朝がほの　花はさけれど

我がまてる　君はきまさず
玉づさの　たよりだになし
ちゝのみの　父のみことも
はゝそばの　母のみことも
朝には　門べに立たし
ゆふべには　さといでまし
ひたぶるに　汝をば待たすを
今いくつ　いねての後と
たのめつる　子等も待てるを
めぐしとは　汝はおぼさずや
こひしとは　なは思ほさずや
むらぎもの　こゝろ亂れて
たゞひとり　寢る夜のいめに
夫の君が　告らくを聞けば
吾がやどは　玉しくうてな
もの言はむ　花もおほきに

樂園

舊りにたる　家やはしたふ
すしにたる　妻やは戀ふる
千代經とも　かへらむものか
いたづらに　吾をな待ちそと
吾かまてる　君が告らしゝ
ぬばたまの　いめに見えつる
うべしこそ　君は來まさね
宜べしこそ　かげだに見えね
朝がはの　さけるまがきに
はちすばな　にほふみぎはに
たゞひとり　たゝずみ居れば
思ひきや　おもひのほかに
なつかしき　人のたまづさ
ゆくりなく　通ひぞ來つる
玉づさに　吾か夫の告らく
吾妹子や　汝か待つわれは



天さかる　ひなのほとりに
おほやけの　事わざしげみ
たよりだに　せずて過ぐしつ
父ゝ母ゝは　いかにか坐せる
そも子等は　いかにかくらす
吾はもよ　身もすくよかに
五百重やま　いゆきさくみて
海ばらを　い行き渡らひ
おほやけの　わざにいそはく
告りおきし　こと忘れずば
父ゝは丶に　まめにい事へ
子どもをら　いよゝはごゝみ
すくよかに　汝もいませや
疾くあらば　今二十日ばかり
久にあらば　今みそ日はかり
おほやけの　事は畢へむに
程もなく　歸らむわれぞ
勿戀ひそ　わぎも

青火

はんりう生

むかしむかし、古い古い家に、老人がたゞ一人住むで居ました。不思議なことには、この家へ雇はれて來る婢は、半月と辛棒したものがないのであります。では、この老人さむが、やかましやか、吝嗇家か、または、亂暴家かといふに、またと無い、人柄の好い、深切な人なので、婢等を勞はることは、世間普通では見られ無い位でした。それあら何故に、來る婢も、來る婢も、半月經つか經たぬかに、暇を呉れといふのでせう。これがそもそも、お話の種なのでございまして、婢が、新に參つて二三日すると、訖度、寢床のまはりを、人

は寝静つた、丑満頃に、青い薄氣味の悪い、小さい火の玉が、フワリフワリと、廻りまはつて、美くしい孃様になるかと思へば、また、安達が原の鬼婆を跣足にさせる様な恐しい者になり、毎晩毎晩、うなされ通しで、如何な膽玉の強い婢でも、閉口してしまふのでございます。

それで、こむど參りましたのは、お花さんと言つて、名も心もやさしいが、見かけた所では、淺草公園花屋敷のお花さんといふ虎の様に、中々、千や百のお化に驚きさうもありませむ。はじめての晩も明けまして、老人さむは、

「お花や、昨晩よく寝たかい」

ときゝますと、お花は

「私、はじめての家だけんど、よく寝ました」

と申立ますから、老人さむも、まあ今日は、逃げられはすまいと安心致しました。其の翌晩も、翌晩も、何事も無かつたのでしたが、六日目の朝、流石のお花さむも、青い火の玉には、心もちがよくなかつたと見えて、老人さむに、その話を致しますと、老人さむは、今度逃げられちや、大變だといふ風で、

「お花や、ナニもそむなに、恐がることは無い。お前が正直でさへあれば、お化だッて何もしはしない。私が良い智慧をさづけてやるから、私のいふ通にしなさい。第一青い火の玉が來て、お前を呼むだら、早速起きて、その跡をつけるのぢや。善いかな。第二に、青い火の玉が、何をしろといッても、爲ることぢや無い。第三に、何を遣らうと言ッても、貰ッたらいけない。ただ、火の玉のすることばかし見て居て、その爲る通に、爲しておけば、それでよろしい。斯うさへすれば、何も恐いことはない。屹度お前は

福をさづかる」
斯う言ひきかされたものですから、お花さむは、まわ安心して、その晩も休みました。
果して、その晩もまた、青い火がやッて來まして、
「花ちやん、お出でなさいよ。花ちやん、花ちやん、お出でなさいよ」
と申します。お花さむは、飛おきまして、その跡をつけやうとしますると、青い火の玉は、
『さわ、おさきへ』
といふのです。お花さんは、こゝだと思ッたから。
『汝さア、前往かッし、私途知らねえだ』
とやッてのけました。青い火は、それではといふやうに、先に立ッて參りました。やがて、背戸へ出て、納屋まで來まするとゝ、青い火は、
「花ちやん、鳥渡明けて頂戴」
と申します、が、お花さむは、充分氣をつけて居ますから
「私明けられねえだ、鍵忘れただから」
とはねつけました。青い火は、そこで、白い美くしい婦人に化けまして、吻ッと、鍵穴へ息をかけまするとゝ、戸は難なく明きまして。婦人の体の周圍には、矢張、火が燃えて居ますから、暗いことは少しも無い。やがて納屋の奥の方で、婦人は
「花ちやん、こゝへ穴を掘ッて頂戴」
お花さむは、
「私、鍬もねえー、穴あむか、掘れねえだ」
と、またはねつけました。青い火の婦人は、コッコッと掘りはじめまするとゝ、一つ汚い壺が出ました。これをお花さむに見せまして、
「鳥渡持ッてゝ頂戴」
といふと、お花さむは

「私、厭だ、そむな汚い物ら」
と、手もふれませぬ。詮方ないといふ風に、青い火の婦人は、その壺の蓋をわけて、中から、金やら銀やら、大判小判を、ドッサリ握り出して、
「花ちやん、これをお前に、御褒美にあげるから、持ッておいで」
と、手から手へ、わたさうと致しまするのを、お花さんは、振切ッてうけとりませぬ。
「ぢやあ、お花さん、私の家まで、これを持ッておくれ、重くてしやうが無いから」
「そんねえ、重いもの、わしだとて厭だわ」
如何してもきゝませぬから、婦人は、とうと、まけて、コイシヨヨイシヨと、金銀小判大判の壺を、お花さんの部屋へもちこみました。そのうちに、一番雞の聲が聞えると、左樣ならとも、何とも言はず、青い火の玉はソッときえてしまひ、お花さんも、何時知らず寝てしまひました。夜があけて見ると、これまでのことは、皆夢の様であるのに、不思議なことには、枕もとの小壺の中には、金銀が一ぱいにはいッて居まして、何だかまた夢では無いかと疑ひましたが、老人さんが、しきりと、それは神さまの恵だと申すので、大切にしまッておいて、お嫁入の道具を買ふのにして居ますとサ。めでたし〳〵。

雜報



○宮廷錄事

●●●●●●●

◉日光御用邸御消息　日光田母澤御用邸に御避暑中なる皇太子、同妃兩殿下には、其の後頗る御

健勝に渉らせられ、四日は午前八時御出門御徒歩にて、神橋へ成らせられ、附近の景色御撮影の上、御歸館遊ばし、午後は皇太子殿下のみ侍從武官の御供にて、霧降の瀧へ成らせられたり。而して、迪宮殿下御着の翌九日午前十時、皇太子同妃殿下には、朝陽館へ行啓あらせられ、御對顔あらせられたり。

●●●●●●●●

●宇都宮行啓の模樣　日光田母澤御用邸御滯在の皇太子殿下には、十三日、栃木縣河内郡城山村大字荒針なる大谷の勝地へ行啓ありたり。當日、殿下には、御輕裝にて、午前六時半御用邸御出門、中山大夫、高辻侍從長、多久侍從、平賀海軍武官、西郷侍醫、其の他供奉水野警務課長御警衛申上げ、午前七時日光驛御發車にて、八時廿五分宇都宮に御著、此の時、溝部知事、樺山書記官、水本警部長、戸田市長、其の他、各官衙學校會社の吏員等奉迎し、市中は、毎戸國旗を揭げ、市民は、御道筋の兩側にて奉迎したり。軈て、宇都宮軌道運輸會社の人車に御召相成り、午前九時四十分、城山村荒針に御着、盤水館に御休憩の上、溝部知事の御先導にて大谷寺へ成らせられ、堂及岩石に彫刻の佛像等を御觀覽の後、盤水館に御休憩、大谷寺觀音堂外二三ヶ所を撮影せしめられ、午後一時半、再び人車に召されて宇都宮に向はせられ、途次、宇都宮市なる國幣中社二荒神社に御立寄ありたる上、午後三時宇都宮發滊車にて、午後四時半日光停車塲へ御着、神橋迄腕車に召され、夫より徒歩にて、同五時御歸邸相成りたり。大谷行啓の際、宇都宮軌道會社へ百圓、盤水館へ三十五圓を御下賜ありたりと。

●兩殿下へ献上品　溝部栃木縣知事より、皇太子殿下へ献上の織物は、足利機業家秋間爲八氏製

の白風通織にて、同妃殿下へ獻上の織物も、同じく辻豐平氏製婦人洋服地にて、頗る精巧なりと。因に記す、秋間氏は、足利同業組合を代表して、同地特産絹綿織物百餘點を携帶し十三日日光へ赴けりと。

●迪宮日光御成●●●●●　裕仁親王殿下には、御豫定の如く、八日午前六時、麻布狸穴なる川村伯邸御出門、川村御養育主任夫妻及御乳人御陪乘、弘田大學教授、橋本御用掛、小原、加藤、木内各侍醫幷に女官二名の供奉にて、上野停車場に御着、暫時御休息の上、曾我日本鐵道會社長の御先導にて御乘車、正七時御發車相成りたり。右に付、田中宮内大臣、岡侍醫局長、長崎調度局長、橋本博士、阪本府書記官其の他宮内省高等官十數名は同停車場迄御見送り申上げ、又た、久保運輸課長は、日光迄奉送したり。

●迪宮御安着●●●●●　八日午前十一時三十分、日光發にて、日本鐵道會社運輸課に左の電報到達したり。
迪宮殿下、御豫定通り午前十一時三十分、御用邸に御安着あらせられたり。

●一位局日光御用邸伺候●●●●●●　中山從一位局は、七日午前、上野發汽車にて日光に赴き、田母澤御用邸に伺候して、皇太子、同妃兩殿下に拜謁、親しく暑中御見舞を申上げたりと。尚、同局は、當分同地に滯在する由。

●九條家の暑中伺●●●●●●　九條家よりは、皇太子、同妃兩殿下暑中御機嫌伺の爲め、公爵代理として、藤井家令、日光御用邸に伺候し、即日歸京したり。

●迪宮暑中御伺●●●●●　裕仁親王殿下暑中御機嫌伺ひの爲め、廣幡侍從外數名は一日、大久保中將、南鄕子爵等は二日、麻布狸穴なる川村伯邸に參候せりといふ。

迪宮殿下御近況

（木内侍醫の談話）

裕仁親王殿下には、御降誕以來極めて御健勝に渉らせられ、未だ、一回も御病氣の故を以て御服藥ありしことなく、御體重の如き日に増し加はりて、七月廿九日を以て量り參らせたる結果に依れば、實に、一貫四百十匁の多きに達し、昨今は、玩具を見せまつるに、既に少しく御感識を備へさせらるゝもの丶如く、時々、御笑顔を拜すこともあり。室外の御運動は、毎日二回宛にて、夜間の御寢も、極めて御靜穩に就かせられ、御食物は、朝夕牛乳一合五勺乃至二合位召し、其の間御乳人より御乳を進め參らせつゝあり。右の如く、殿下には、至極御健勝に御成長あらせらるゝも、尚、御幼少に渉らせられ、且つ、暑中の事なれば、我々侍醫に於ては、一般に拜謁願出の儀は、可成差控へありたきを希望す。殊に、玄關にも掲示せる如く、麻疹、猩紅熱、實布垤里亞、百日咳、天然痘、水痘、腸窒扶斯、發疹窒扶斯、赤痢、虎列剌、黒死病、流行感冒等の傳染病に接近せる者に對しては、堅く拜謁を御斷り申し居れり。云々。

●京都に於ける有栖川若宮　目下、京都祇園中村屋に御滯在中なる有栖川若宮栽仁王殿下には、去る三日午前八時、藤島家從を從へさせられ、自轉車にて兩加茂へ御參拜幣帛を捧げしめられたり。同殿下には、暑中御休暇中は、父宮より、何地へも旅行隨意の御許しを受け京都に於かせられても、御運動の爲め、毎日自轉車の遠乘りを試みさせらるゝ事あるが、自轉車は平素御好みの事とて、技術御堪能に入らせられ、去る一日午後零時廿分七條着汽車にて、舞子より御入浴の際の如き、主殿寮よりは馬車を、亦た、御旅館中村樓よりは、

御召用として腕車を差廻はして御待ち申上げたるも、殿下には、御料の自轉車に召させられたれば、先驅警衛の伊東警部は、屈強の車夫三名を撰抜して御先を打ちたるに、殿下には、車中の御疲勞も見えさせられず、忽ちに、同警部を乗越して御勢勇ましく進ませられ、時々御車を弛めて扈從の人人を瞻き、御機嫌麗はしく御旅館に入らせられたるには、皆々、平素の御鍛錬めさそこと察し奉られて、ほと〳〵恐れ入りたりと云ふ。

●久邇宮女王御歸嫁　久邇宮純子女王殿下は、朝彦親王第九の姫君にて、邦彦王殿下の御妹に在し、明治十七年三月七日の御誕生にて、今年十八歳に渉らせらるゝが、今回舊大和國柳本藩主の後なる正五位子爵織田秀賢氏へ御歸嫁の儀、九日を以て勅許相成りたりとぞ。

○表彰録

●貧民窟の孝女　芝區新網町南十四番地中村せき(五十三)といふは、數年前より眼病にかゝり、遂に、盲目となりける上に、本夫内田清五郎(五十二)といふは、十年前より慢性脊髓炎にかゝり枕もあがらぬ程の有樣に、家内は、糊口にさへ差支ゆるを、長女おなか(十八)は、かゝる所には稀なる美人なるのみならず、心のうつくしさも格別にて、兩親の病苦を何とかして救はんものと、妙齢の身のなりふりも考へずに、毎日毎夜の手内職も、せち辛き世には、容易に芽も吹かねば、近頃は、又、苧から賣りとなりて、愛らしげなる聲に市中を賣あるく樣のいぢらしさ。天も此の孝道をみそなはして慈惠の徳を垂れ給はずやともどかしく思はるゝ程なりしに、此の程病檢的戸口調査に巡廻の警官がこれを聞込みて、感心なし、早速前記の趣を、芝署

長へ上申に及びたりといふ。

●●●●貞婦よし枝　和歌山縣那賀郡粉河町千百二番地林よし枝(四十)といふは、十四才の頃より、同地三宅進一郎方に下女となり、二十七歳まで十三年の間精勤して、一度も、主人の叱責を受けし事なく、眞に珍らしき忠婢なるが、二十五歳の秋、林定七といふに嫁ぎ、一男一女を擧げ、只管、内助に勵みしが、今より十一年前、夫は病の床に就きたれば、よし枝は、女の手一つに、二人の子供を養育し、夫へは赤心を盡して看護に怠りなかりしも、天命抗しがたく、定七は、遂に歸らぬ眠につきたれば、よし枝の悲歎云はんかたなく、其の後は、たゞ子供の成長を樂しみに暮し居りしが同人は、花の色香失せざるより、或時は再婚を勸めらるゝ事あれど、よし枝は、其の貞節を變せず、困難と貧苦に打勝ちて、米搗女と迄になり、其の収入を以て二人の子供を教育し、今日にては、二百圓ばかりの貯蓄も出來て、相當に暮し居るよし。實に、暗黑界の明星とも謂つべし。

○教の栞

●●●●●●●市教育調査部主任會　東京市教育會調査主任會は、先頃、感化院設立案及び盲啞教育に關する件に付調査し、感化院の建築費二萬八千二百圓、同經常費八千八百六十八圓、盲者學校建築費一萬二千圓、啞者學校建築費七千二百圓と豫定し、其の方法を左の如く決定し、しかして、調査部總會を開きて、同會の議に上すことゝせりと。

△感化院設置案

一、感化院を分て左の二種とす

第一矯正院、第二感化院

二、矯正は小學々齡に相當する浮浪少年男子及怠惰少年男子を矯正感化する所とす

三、感化院は年齢十二歳以下の犯罪少年者を矯正感化する所とす

四、右感化院及矯正院は何れも本市に於て要用なりと雖も就中矯正院を設置するを以て今日の急務とす

五、不良少年を矯正感化するには教育の方針に頼るべきは論を俟たざれども其矯正院の位置(即ち風光佳絶の地等)亦感化の效果を大に助くるものとす故に東京市外凡そ二三里を離るゝ地を卜して之を設置するを要す

六、教育法は之を概言すれば体育、學科、音樂及び實業(農業工業等)とす而して其教育の程度は之を小學及中學の程度に相應せしむ

七、矯正院の生徒の數は凡そ百名とす

八、矯正院の建物は之を大約百坪とし其建物内に教場、食堂教員室、炊事所、浴室等を設く

△盲唖教育に關する件

一、本市は速に盲人學校唖人學校各一個を設立するの計畫をなすべし

唖人學校は既設の唖人學校を補助し其方法成績等を調査し更に方策を立つるものとす

二、盲人學校を設立するに就ての要件は大略左の如し

(一)學科は小學校の程度に準じ外に鍼按摩等の實科を授くるものとす(二)生徒定員を六十四名とし其年齢は七歳以上十四歳迄とす但定員は百名迄増員し年齢は十八歳迄延長することを得(三)學校の敷地は大略五百坪を要す(四)學校の位置は赤坂、麻布、芝、四谷の方面を可とす(五)舍の建校坪は大略一百坪を要す

全國各女學校卒業生

第八回

●華族女學校卒業式　皇后陛下には、かねて、仰出されしとほり、華族女學校生徒卒業證書授與式臨御の御爲、去月十三日午前九時に御出門あらせられ、高倉典侍御陪乘、香川皇后宮大夫、山内皇后宮亮、高階侍醫、小倉權典侍、姉小路掌侍、西命婦等供奉しまつり、御順路を經て、永田町なる同校へ行啓遊ばさせ給へり。之より先き、同校にては、早朝より細川校長、下田學監、淺岡幹事以下各職員一同參校し、正門に大國旗を交叉し、表玄關には、紫羽御紋章附の慢幕をば打廻らし、

奉迎の準備を整へられしが、やがて、午前八時四十分頃より、久邇宮妃俱子殿下を始め奉り、田中宮內大臣、德川從一位、德川公爵(家達)、同夫人、島津公爵(忠濟)、鍋島侯爵、同夫人、大隈伯、同夫人、東久世樞密院副議長、野村樞密顧問官、同夫人、林樞密顧問官、佐々木伯夫人、川口宮內次官、勝間田圖書頭、長崎式部官、同夫人、藤波主馬頭、岡田文部總務長官、嘉納高等師範學校長、高嶺女子高等師範學校長、三宅錦雞間祗候、工藤學習院幹事、青山華族會館幹事、馬場帝室會計審查局主事、田中北白川宮家令、吉田內藏助、近藤內事課次長心得、齋藤調度局主事心得以下其の他學習院教授等、參觀人一同前後して參集せられ、九時五分頃校長以下、職員幷に生徒一同は、奉迎の爲め、門內に整列し、着御を御待ち申し參らしゝに、やがて、同十五分と申す頃に、皇后陛下には、御機嫌麗はしく奏樂の裡に着御あらせられ、校長の御先導にて、階上の便殿に入らせられ、御休憩中校長より第十六學年生徒成績表を御覽に入れ、次で、御臨校の久邇宮妃殿下に御對顏あらせられ、次に、來賓として參校せられたる、前にあげし御方々を始め、細川校長、下田學監、淺岡幹事、佐野、島山、土屋、秋山、阪、井上、愛知の各華族女學校教授等に拜謁仰付られ、次で、校長の御先導にて、陳列場に臨御遊ばされ、生徒の製作せる圖書作文、習字、裁縫、工藝品等を御覽遊ばされ、(此內に生徒幷に來賓參觀人一同、式場に着席せらる。)式場に臨御せさせ給ひぬ。此の時、生徒一同起立して最敬禮をなし、皇后陛下御製の「金剛石」「水は器」の二唱歌を奉して、校長より全科卒業生に卒業證書を授與し、其の次には、小學全科卒業の北白川宮武子女王殿下に卒業證書を奉呈し、小

學全科卒業生總代水野進子に、卒業證書及修業證書を一まとめにして授與し、次に、初學中學二學校別科御卒業の北白川宮貞子女王殿下に卒業證書を奉呈し、次に、高等中學二年級以下各級總代關淑子に、高等小學二年級卒業生以下各級總代滿口久美子に、證書を一まとめにして授與し、猶、一昨年同校全科卒業後、專修科に入り、二年間國語、漢文、英語三科を修めたる伊東はつ子、吉田つぎ子二名に、專修科卒業證書を授與し、畢りて細川校長は左の告辭、即ち、

諸氏は十數年勤勉の功を果れたる報酬として今日卒業證書を得後來卒業に付きては復本校の監督を受けざるべし然れども卒業は終極なき者なるを以て修身之を修むるも猶其の蘊奧を盡すこと能はず卒業は只是一個の階段たるに過ぎず卒業したる故を以て安ずべきものにあらず諸氏は已に普通の學科を修了せるを以て學業を自習し得べき材質を具へたり其の家庭に在ると嫁して他家に在るとを問はず家事を整理して猶餘力あらは之を用て其の未だ學ばざる所を學ぶことを得べし且學校の教授は夫々規程に依り常に狹隘なる範圍を出でず卒業後の自習に至りては固より規程に依らざるを以て各其の好む所の者を撰び豐富なる材料を蒐輯し任意に學術を研究することを得べし此の時に當り諸氏の得る所の者は卒業前學びて得たる所の者よりも更に多くして且大なる者あらん諸氏勉旃

朗讀(ろうどく)せられ、次で、卒業生總代大隈こう子の謝辭あり即ち、

謝辭

うち日ます都の大城のもとにいかめしう築きたち給ひし此華族女學校こそかけまくもかしこきわか后の宮の深き大御心もて開かせ給ひしものなりけれわれらいかなる幸のあれはかこの安らけき大御代に生れあひてかゝる高き文の林にわけ入り秋の御山の御かげのもとに校長の君師の君たちの御心つくしに二葉のはじめよりつちかはれて今日しも月の桂の下枝をかざしかひある青葉の花をしもつみはたる嬉しさはたとふるに物も侍られと又打返し思へば十とせ餘りの長き年月親とも組みまゐらせし師の君たちはらからともむつみしともがきをはなれて雲の朝雨の夕からひなれにし此の學のまどを今なと立ち別れむとする殘りをしさに昔を今にとおもほゆるもかつはかぎりも知らぬ世の海原に船出してあらき浪かせをも凌ぎてゆかむとするにあたりては今日賜りたる校長の君の御さと

しながちと組みて思ふ港にもいたりつかでやはと心のうちに希ふことの片はし打出でゝ並にうやくしくかしこまりて聞え上げ併せて此の校のいや榮に榮え行かむ事をいのりまつるになむ

明治三十四年三日

全科卒業生總代

大隈こう子

次に、卒業生江口八重、秋山きく高等中學二年級卒業生石田美節三名は、御前近くに進みまして、箏(姫小松)を卒業生千住千賀、高等中學二級卒業生松平經子二名は「ピアー」に(オペール、スッメ、フオン、ポルテチー、ウーベルチユール)を連彈し、次て、生徒一同は、起て唱歌(秋の宮居)を奏して、その式を終へたり、皇后陛下には、校長の御先導にて、便殿に入御。しばらく御休憩の後、奉迎の時の如く、職員以下生徒一同の奉送を受けさせられ、十一時十分還御遊ばされたり。式後、來賓に立食を、參觀人に茶菓を饗せられ、正午頃一同退散し。當日、皇后陛下より、御土産として、同校職員幷に生徒一同へ御下賜品ありたる由にて、卒業又は修業證書を授與せられし者は、四百四十六人、全科卒業者は、左の二十二名ありといふ。

全科卒業生（イロハ順）

畑芳子　橋元房子　德川糸子
川田みか子　吉岡芳　中隈富士子
永井良子　野村末子　大隈こう
山科新子　牧野悅子　小出錠子
厚東梅　江口八重　寺崎いその
朝吹ふく　秋山きく　菊池みつ
千住千賀　鈴木なを

特別卒業生

黒川榮子　松平佐男子

（以上）

○涼風一陣

◎獨逸皇太后崩御

最近のロイテルは、獨逸皇太后崩御を報じ來れり。皇太后は、故英國女后の皇長女にして、一八四〇年、即ち、女皇がアルベルト親王と結婚せられたる年の十一月二十日を以て誕生せられ、ヴイクトリア、マリー、ルイザと命名ありき。陛下の高尚優美なる品性と、强固なる志操とは、夙に、英國民の尊敬せる所にして、獨逸皇室に嫁せられたる後も、英國民の愛慕すること、少しも渝らざりき。普魯西の皇長子と結婚せられたるは、一八五八年一月にして、此の結婚たる、歐洲に行はるゝ政治的結婚にあらずして、二十七歳の普魯西皇子と十八歳の英國皇女とは、屢々相見て相愛し、相敬するの情共に醇厚なりしかば、御母ヴイクトリア女皇が、アルベルト親王との結婚によりて模範を示されたる如く、極めて幸福なる結婚なりき。結婚の式も、亦、女皇の式場たりしセント、ジエームス大宮殿に於て擧行せられ、女皇及び皇婿の臨御、國民の歡呼、又、稀に見るの盛儀なりき。皇子は、一八六一年普魯西の皇太子に立たれてより、國務の樞機に干與せられ、丁抹戰爭、普澳戰爭、普佛戰爭に際しては、一方の軍を率ゐて偉勳を樹てられ、父皇がウエルサイユに於て獨逸皇帝の位に即かるゝや、更に、獨逸皇太子の位に備はられたりき。此の如く、皇太子は、戰場の勇將なりしも、常に、深く平和の維持と、獨逸帝國の幸福進歩とに意を注がれたりき。思ふに、今回、崩御の皇太后即ち皇太子妃の善良なる補佐の効も尠からざりしなるべく、妃を通じて、英國女皇の感化ありしことも、殆と疑ふべからず。

斯くて、皇太子は、一八八八年三月ウィルヘルム第一世の崩御によりて皇位を繼承せられ、フリードッヒ第三世と稱せられしが、二三年前よりの患ありし咽喉癌は、既に、危險なる徴候を呈し、在位九十九日にして、遂に崩御せられ、ヴィクトリア皇后は、四十八歳にして寡婦となられたり。即ち、皇太子妃たること二十七年、皇后たること九十九日にして、皇太后となられたるなり。獨逸國民が、「高尚なる」フリードリッヒ皇帝の崩御を悼み、善良なるヴィクトリア皇后が、皇后としての感化を及ぼさるゝの機會なかりしを悔ひたることの、如何に深かりしかは云ふを要せず、英國民も、常に、愛慕せる皇長女に、最、厚き同情を寄せたりき。爾來皇太后は、閑散の生涯を送られしが、昨年末より病氣に罹られ、靜養を專らとせられ、御母たる英國女皇崩御の頃は、病勢漸く重く、英國現皇帝は、即位間もなく、獨逸皇帝と共に、御姉たるフリードリッヒ皇太后を見舞はれたりき。皇太后享年六十一、先帝との間に、親王内親王七人あり。現皇帝ウィルヘルム二世陛下は、皇長子なり。

●獨逸皇室へ弔電　獨逸皇太后崩御に付、同國皇帝陛下よりの御親電、七日午前十時到着したるに付、田中宮内大臣は、直ちに、闕下に伺候して捧呈し、兩陛下には、深く哀悼あらせられ、七日午前十一時四十分發にて、御懇切なる、御親電を、同皇帝皇后陛下へ送らせられたりと承はりぬ。

●獨逸皇帝の御返電　獨逸皇太后崩御に付、我皇室より御弔電を贈らせられたるに對し、十一日午前十時廿五分着にて、同國皇帝陛下より、鄭重なる御答禮の電報到達したりと。

●獨逸公使の答禮　獨逸公使アルコー、ワルレ

伯は、宮内省に出頭し、田中宮内大臣を、官房に訪問したるが、右は、同國皇太后陛下崩御により、田中宮相より、同國公使を弔問したる、答禮の爲めなりと。

●三室戸子薨去　病氣危篤と聞えし、子爵三室戸雄光氏は、去る三日を以て薨去したりと。子の略歴は、前號に、高齢の故を以て、宮中杖を差許されたる際、記載せしを以て、此に之を再びせず。たゞ、病勢革まりし時、そのこと　天聽に達し、特に、思召を以て、左の如く位階昇叙の御沙汰ありたりと。

正二位子爵　三室戸雄光

叙從一位（以特旨位一級被進）

●情のつゆ　香川縣香川郡東濱村字松島の熊田たけといふは、本所原町の大工某の妻にて、長男（四）長女（二）の小供迄あるに、夫は、病氣の上死亡したれば、世帯道具を賣拂つて喰ひ居りしも、今は、夫も盡き、如何することも出來ず、夫が存命中、横濱の居留地に親戚があるといひしを聞いて居りし故、之を便つて救を求めんと、家財を疊み、兩人と子供を引連れて、一昨日横濱に來りしが、町名は勿論、姓名さへ知らされば、尋ねる手段もつき、山下町百七番館を彷徨し居りしに、同館の石炭稼ぎが、たけの容子を見て不審を起し、樣子を聞けば前記の始末なるにぞ、大に不憫に思ひ、五錢十錢を醵金して壹圓七十錢となりしを、たけに惠みやりしに、同館主マーテンは同情を表し、自分で、たけに容子を尋ねし處、大阪まで歸ることが出來れば親類もある故、身の振方を付くることが出來るからんと答へしより、マーテンは、大阪迄の滊車賃と、外に、小遣若干を與へ、尚、加賀町署へマーテンより保護を願出で、同署にて

相當の保護を與へ、同日午後六時四十分の滊車にて、大阪へ向け立たしめしに、たけは、其の厚意を喜び、涙を流して別れを告げたりと。

●牛馬を虐使すべからず　農商務大臣は、左の通、各地方廳に訓令したり。

從來牛馬の飼育及使役の方法を見るに、概取調殊其常を失し、往々苛酷に流れ、疾病の有無を問はず、妄に之を使用し、或は、體力の如何を察せず、過度の使役に供し、或は、發育及資質を妨ぐべき取扱を爲し、之が爲め、動物本來の良性を損じ、發育を害するもの尠なしとせず。今や、牛馬の改良は、漸次其歩を進めんとするの時期に際し、尚是等の弊習を存するは、大に遺憾とする所なり。依て、各地方の實況に照し、適宜の取締方法を設け、之が改善の實を擧げんことを期すべし。

豈にそれ、ひとり牛馬のみならむや。有情非情天地間のあらゆるもの總べてに對ひて、皆、その本來の良性を損せざらむことに注意せざるべからず

●獨逸艦隊と服部中佐夫人　神戸に碇泊中なる獨逸國軍艦ガイエル號艦長パウエル氏は、司令長官ベンデマン中將の命令に依り、去月卅一日乘組將校を率ゐて京都に至り、伏見桃山なる服部中佐の墓に詣で丶花環を手向け、懇ろに、其の靈を弔ひたる上、同日午後七時十一分京都發電にて、同中佐未亡人とも子に宛て、慇懃に、中佐に對する友誼を通じ、未亡人よりは、直ちに、鄭重なる返電を送りたりと云ふ。艦長の電報左の如し。

司令長官ベンデマン閣下の命に依り、本日中佐の墓前に巡洋艦隊將校一同より、花環を供へたり。我獨逸の戰友として尊敬せる勇壯なる中佐に對する、貴下の愁傷を慰むるを得ば幸也

最も深き同情に於ける　艦長バウエル

故服部中佐未亡人トモ子殿

●・・・西藏探險　世界の秘密は西藏に在りと稱し、年々外國人の西藏に、入らんと試みるもの多けれども、未だ、一も成功したる者なく、付て、英人某が、印度より道を天山南路に取りて、西藏の北部を横斷し、北京に達したる事あれど、南部ラッサ附近の地は、斷えて外人の入るを許さゞるのみならず、自國民さへ、猥りに境を越て出ること許さゞる程にて、全く、外界より封鎖せられたる大乘佛敎の淨土なるが、昨年四月成田安輝が探險を企て、匪亂に遭ひ、遂に中止し、今亦東本願寺派遣の能海寛雲南より入らんとしつゝあるが、一朝我邦人と喇嘛敎主との間に意氣の投合する所あらば、能く千古の秘密境を世間に紹介するを得るのみならず、以て、露佛の連衡を斷つを得べしと。

落葉籠

本號から此の一欄を設けまして、讀者諸媛の御話を聞かうと、實は、よろこんで居りました處が、不幸にも、擔任記者が目下病床に呻吟して居るやうな場合ですから、今回は、止を得ず休む事にしました。ですから、皆さんより送てくださつた原稿は、次號に廻しました。

●第一回繪探解答　これは、二つのカクシ畫で、一つは波の形で魚と、今一つは、大なはうの松を倒にしますて、枝の右の處を見ますと、犬の顔が出來て居ります。それから皆當た方の姓名は、

三河　源たけ子　大和　植田いく子

北海道　渡邊花子　東京　竹岡とき子

以上四名で、半分當た方は、東京の鳥飼みと子を初め九名ありますが姓名は、略します。

○口繪につきて

●雨中蓮●●●　夕かげまたぬと人毎に、をしまるゝもさこそ。實に、ながめやる間いと短かき朝顔の、朝なさな咲きかはりては、こよなう愛らしく、風雅男ならぬ賤にまで、嗚呼よき花や、うつくしやと觀る人ごとに、賞せられしも、いつしか蔓は、みにくう擴ごりて、花もやうやく小さくなりゆけば、入谷にかはる不忍の、蓮こそよけれと、杖を池畔に曳きて、朝露ふみつゝさまよう人のいと多さ。あはれ、蓮の葉のあをやかに、そが間より白に紅に、水の濁にしまずして、清らかに、いづれも香をり高う咲きいでゝ、いと麗はしく、人の心もおのづから清く、されど又、夏の暑さに得たへ難き頃、俄かにふりくる雨雫、ポツリ〳〵と立葉をうちて、浮葉におつる水の露、玉かとばかり見え渡りて、とみに塵界を脱したる心地せらる。嗚呼卷頭の雨中の蓮、其の枝の如何ばかりか眞に逼て床かしく、一入涼しき寛明壽伯が筆ならずや。

●鋭底の金●●●　こは、豫告したる如く、德太寺侯が諸媛のために、特に有名なる山内一豊の妻を詠じで記者に玉はりし眞蹟あり。あはれ諸媛よ、勉め勵みて、一豊が妻の行ひにはぢぬやう、且つは、侯が厚き御心にも報はでやあるべき。侯は、大職冠鎌足第十世の孫、從二位師輔の十男、大政大臣公季十五世の孫公實の五男、從一位左大臣實能の後なり。實能公保元の亂に、いたく世をはかなみ、遂に薙髮して、眞理と言はれしより、茲に始めて德大寺と稱せらる。其の子公能より廿四世を經て從一位公純に至る。實にその長子にして、名は實則、天保十年十二月六日京都に生れ長じて後、諸官を歷仕し、明治三年八月侍從長に任ぜられ、獻替一日も忽せにせず以て、今日の久しきに至る。嗚呼侯が温厚忠誠なる事は、諸媛が能く知らるゝ處あらん。今なは、侍從長、兼內大臣、從一位勳一等侯爵たり。（超舟漁史）

○新刊寄書

東京市教育時報	第九號	東京	東京市教育會
愛媛縣教育雜誌	第百六十七號	松山	愛媛教育協會
愛知縣教育雜誌	第七十號	名古屋	愛知教育會
山形教育雜誌	第百二十一、二、三號	山形	山形教育社
上野教育會雜誌	第百六十四、五、六號	群馬	上野教育會
鹿兒島私立教育會雜誌	第九十一、二號	鹿兒島	教育會事務所
大阪府教育會報	第百七十九號	大阪	大阪府教育會
紀伊教育	第一百號	和歌山	和歌山印刷所
明義	第六、七號	東京	明義雜誌社
教育	第十六號	同	茗渓會事務所
法政新誌	第四十七、八號	東京	法政學會
千葉教育雜誌	第百十、十一號	千葉	千葉教育會
神道新誌	第六十四號	東京	神道新誌社
大成同盟會々報	第五編	東京	大成同盟會本部
海洋	第十七號	東京	帝國海事會
日本國教大道叢誌	第百五十五號	東京	日本國教大道社
高知教育	第百八、九號	高知	高知教育會
長崎縣教育雜誌	第百六、七、號	長崎	教育會
日本濟美會雜誌	第三、四號	東京	日本濟美會
日州教育會雜誌	第二十六號	宮城	日州教育會
少年世界	第七卷第八、九號	東京	博文館
心の華	第四卷第六、七號	東京	大日本歌學會

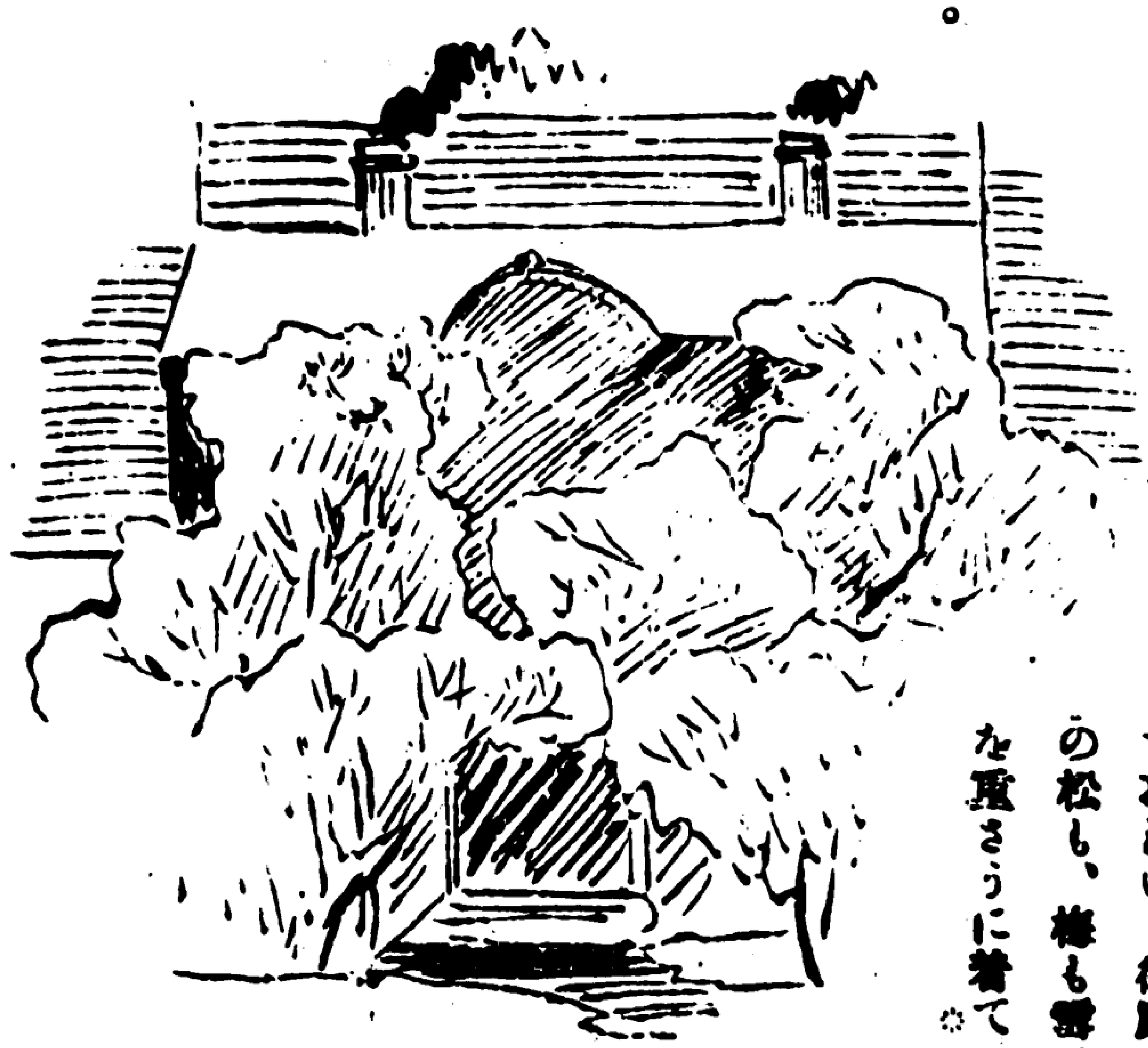
第二回繪さがし

花ちやん、わたいはどーいふ者が西洋作りの御家は、すかないの、父が雪中の西洋館は、角別だれい。姉さん、ホントに奇麗な事れい、御庭の松も、梅も雪を重さうに着て☆

＊花ちやん、おまへ用心しませんと、雪焼になりますよ。

プラこはい事姉さん、……だつて何か居るじやありませんか。

オヤ／＼可愛さうに、雪に凍へたのか、ちつとも動きませんよ、花ちやん。……



ハヽ何でせうか諸者諸援（みなさん）あてゝ御らん。

ソレカラ分りましたら、はがきで知らしてくださいな

○社告

今度から、新に落葉籠といふ一欄を設けまして、讀者諸媛が、本誌についての希望。或は問はんと欲する事。言はんと思ふこと。又は、一つの問題を提出して、相互の意見を發表し。其の他百般の通信を悉く此の欄に收める事にしましたから、續々投稿を願ひたいのです。最も投稿の節は、次の規定を必ず守て、いたゞきたいので御座ります。

落葉籠投稿規定

一、字体は楷字に限る、但し漢字の外は總て平假名にて、變体假名を用ふべからず

二、文体は投稿者の隨意なれども、一行廿二字詰以内の事、但し句或はフリカナを附けて貰ひたし

三、誌上の匿名は隨意なれど、便宜の所へ必らず宿所姓名を明記すべし

四、記事は隨觀隨目何にてもよけれど有益にして興味あるものを望む。書式は次の例に依るべし

●何園、何之雛曰、私の妹は今年九歳になりましたが、誠に學校へ參るのを好みませんドーいふ方法にしましたら、進んで行くやうになるでありませうか、

五、〆切期限は、月次兼題の歌文と同日の事。紙は隨意。尤もハガキにてもよし

○次號豫告

和歌　　賴　梅　颸

本誌第二百三十四號を以て、其の手翰を呈せし所、世に珍らしき者とて、各地の愛讀者より、猶出し與れとの請願少からねば、重複のきらいあるにあらざれど、次號を以て、更に又、梅颸女史が、優麗なる水莖のあとを、呈せんとす。

富士川の眞景

去にし七月、華族女學校卒業のをり、紀念として、同校卒業生たる姫方が、ものされたる合作なり。あはれ其の枝の如何に眞に入り、韻致に乏しからざるかは、今特更に玆にいはず。請ふ次號をまち玉へかし。

卒業生の寫眞

こは前と同じく華族女學校の紀念として、寫されたる卒業生諸孃が肖像なり。

其の他、例の如く、記事豐富、趣味津々。

女鑑歌文月次兼題

九月五日分

歌　川霧

文　歸省中の感を記す

右八月二十四日〆切

九月廿日分

歌　月前雁

文　月見に友を招く文

右九月九日〆切

十月五日分

歌　擣衣

文　秋

右九月廿四日〆切

十月廿日分

歌　海邊紅葉

文　女郎花を人に贈る文

右十月九日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

…………………………

………………

………………

用紙は半紙半截の事。一題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名

……、……、……。……。

……。……、……。……

……、……、……。……

……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なに人にても、隨意に投稿するを得。

○天地人を取りし人には賞品を呈す。

生徒募集

規則書入用の者は郵券貳錢を送るべし

來九月新學期授業開始に付左の各級に補缺生の入學を許す志願者は至急願書差出すべし

◎本科一、二、三、四年級

◎技藝科一、二年級

◎別科各級

●本校は我國固有の婦徳を發揮し女子に必須なる高等普通の智識を養成するを以て目的とす

●學科目及修業年限

本科　修身　國語　漢文　外國語　歷史　地理　數學　理科　家事　裁縫　習字　圖畫　音樂　體操

技藝科　修身　國語　數學　家事　裁縫　習字

別科　第一種點茶　第二種插花、

修業年限は本科を五年技藝科を二年別科を二年とす

●教職員並講師姓名

校主兼校長　西澤之助　學監　三輪田眞佐子
講師　市川吉太郎　教員　富樫孝子
教員　宮永その子　講師理學士　刈屋他人次郎
教員　吉野眞澄　講師　田島利三郎
教員　梨本信子　講師　小野鋼之助
教員　岡田きし子　講師　松岡止波子
教員　松島八重子　教員　藤岡新一郎
講師　深津丈子　教員　青木貞子
講師　安藤正次　講師　櫻井岩惠子
講師　南寛明　幹事兼講師　宮島茂次郎
講師　宮崎照子　教員　箕田信子
講師　下田義天類　教員　椎名季子
教員　師岡須賀子　校醫　有賀立雄

●本科及技藝科の學科目に新に割烹の一科を加ふ

●本科第二年級は新に一學級を増設す

●塾舍あり寄宿を許す

●編入試驗は來九月五日より始む

東京市本郷區龍岡町三十六番地

日本女學校

明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

女鑑

毎月二回五日廿日發行
第貳百參拾五號

明治二十四年八月廿日發行

東京築地活版製造所株式會社印刷